

人氣ニ茂差障可申哉ニ付詰長ニハ相成候得共來春詰代被仰付本途之差引被仰付候へハ異論も有之間敷乍然本紙ニ申違
置候通常秋ノ御人數減之儀御願濟之御見込も有之候ハ、右御渡方之一條ニ因而來春まで御人數詰込被仰付譯茂無之
候間何卒御人數減之儀ニ成丈御取扱有之當秋ノ秋願通ニ相成候ハ、當時之詰込之面々秋差引にて難澁之模様ニ因而ハ
相應ニ別段之御心附被下置候而も可然哉迎茂此元ニ而治定之見込ハ付兼候間宜被及御會議候様存候以上

御備場詰御人數交代并渡方之調

御備場詰として被差登置候御備組并炮術手之面々交代之儀如何被仰付可然哉餘り詰長ク相成候而者壯年之面々等萬一
之謹慎も薄不慮之儀等出來可仕哉之恐茂有之候間當秋ニ茂交代可被仰付哉尤當時之形勢ニ而之ニ三年之内兵端を開候
程之儀之有之間敷平穩ニ相成候而之ト御備全ク被差登或ハ炮術手杯只今之人數交代被仰付候ニ茂及申間敷哉ニ候得
共既ニ四月朔日御登城之時分今度御請持之御方々様於殿中被仰合別而立花様杯必至度御差支之由ニ而御斷被仰立之儀
至密御相談被爲在仍而福田源兵衛を以內分御聞籍ニ相成候處逆も御斷切と申儀之御都合惡ク可有之御有筋何ぞ御願立
ニ相成可然との趣ニ候山御自筆狀之通ニ付唯今之處ニ而御人數等被減候而者追而之御願立ニ差障候儀可有之哉左候得
者當秋交代被仰付候ハ、矢張御備組一手炮術手共是迄之人數可被差登哉然處御備頭初メ未タ御渡方之土豪相定り不申
平常之旅詰と違御軍役之形ニ而出府之事ニ付大身業程連人も多ク夫ニ應諸雜費も強ク中々一式造用位ニ而取賄出來可
仕様も無之此元出立前方内才覺等有之たる様子ニ而段々煩敷内意之筋茂起居候由ニ付何ぞニ御定法通旅手取引直不被
仰付候而之治り兼可申と於御勘定所兩様之えらへ大略兼々願置候通ニ而當秋下りニ仕候得之左之通

一式造用差引残り

一五百貳拾兩餘

御備頭

右同斷

一貳百九拾兩餘

御番頭

右同斷

一三百兩余

無役着座

無役ハ地手取少ク其分戻米多ク仍而差引残り御番頭ノ茂高相増居申候

右之通ニ相見候處此節御備場ニ引越ニ付而段々願之趣有之御備頭ニ五百兩其以下に茂相應々々ニ拜借被濟下候由左候
へハ追而交代之節之御渡方ニ敷御備頭杯ハ此節皆濟程ニ相見何程ニ可有御座哉仍而詰長ニ之相成候得共來春交代被仰
付候得之全クニタ所務之差引ニ相成左之通

一式造用差引残り

一千貳百三拾兩余

御備頭

内

五百兩

引越ニ付而拜借分立用

殘而 七百三拾兩余

右同斷

一五百貳拾兩余

御番頭

内

六拾兩

引越付而拜借分立用

殘而 四百八拾兩余

右同斷

一五百五拾兩余

無役着座

内

安 政 元 年

引越付而拜借分立用

百兩 殘而 四百五拾兩余

右以下之面々茂夫々手取相増候儀奥ニ有之候付略ス

右之通ニ而來春之交代ニ相成候得之手取茂相増諸役詰方之通ニ々所務之差引被仰付候上者たとへ如何様之論説起り候共御取上ニ及間敷其身々々ニおいても有餘有之候得之此元出立前之才覺價茂出來可仕哉ニ付來春交代之方可然哉兩岐如何程ニ可有之哉

但御中小姓以下ニ相成候而之當秋又之來春之交代ニ而茂差引之差別ハ無之御知行取者不對ニ有之候得共此儀之御定格之様子ニ付致方茂無御座候乍然一式造用引殘至而乏敷面々ハ出立不差支様別段之御振替ニ而茂不被渡下候而之治り兼可申哉と於御勘定所茂見込居候との事ニ御座候

右段々之通御座候處御備組一手ニ而茂當秋交代方來春之交代ニ而之御出方之増減大略左之通相見申候

二々所務之差引ニ

一 壹萬八千七拾八兩余 御備組一手來卯之春下りニ

千九百九兩余 御備頭壹人

千貳百六拾六兩余 御番頭二人

千三百貳拾貳兩余 無役着座二人

三百貳拾六兩余 五拾挺頭一人

三拾挺頭二人

貳拾挺頭三人

副頭三人

貳千四百四拾四兩余

御物奉行一人

御番方組脇四人

大組付五人

七百九拾五兩余 御番方二組八拾人ニして

壹萬拾六兩余 御備組一手當秋下りニして

一ト足半之差引

一 壹萬千六百九拾壹兩余 御渡方之惣高

千貳百三兩余 御備頭一人

八百貳兩余 御番頭二人

八百四拾五兩 無役着座二人

貳百八兩余 五拾挺頭一人

千五百七拾三兩余 三拾挺頭以下十三人

五百五兩余 大組附五人

六千五百六拾兩余 御番方二組

差引 六千三百八拾七兩余 來春交代之方御出方増

右之通御出方之方より申候得之莫太之遠ニ相見申候尤當秋交代被仰付候得之代りとして被差登候面々ニ茂壹萬兩余之御渡方ニ而二々重之様ニ相見候得共來春交代被仰付候得之又壹萬八千兩余之御渡方ニ而長ク詰込ニ茂相成候時之永々之御出方増ニ相成申候前文之通於江戸御願立ニ相成御斷切ハ迎茂六ヶ敷候ハ、御請場詰平常ハ御番方一組炮術手二々師役位被差越置自然之節者江戸詰合之御人數を被差出模様ニ應し御國方御人數御呼登と申様成儀之相叶申間敷哉只今

通ニ而年々御人數交代被仰付候ハ、炮術手共ニ之御出方三萬兩ニ及及御家中之面々ニおいても次第不手廻ニ成行可申哉誠ニ不容易筋ヲ付得斗御衆議被爲在度儀ト奉存候

但自然當秋交代之方ニ及相成候ハ、委細前條ニ顯置候通差引残りハ皆済程ニ而江戸表出立差支之業及可有之候間別段之御心付ニ而及不被下置候而之治り兼可申夫ニして及來春交代御出方増之半方及有之候ハ、御取賄ニ相成可申哉其儀ニ於御勘定所員數等猶まらへ可被仰付ト奉存候
右何れトモ御決議奉仰候

機 密 間

本紙之通秋差引ニ而被罷下候ハ、別段之御心付ニ而及可被下置哉之儀猶御勘定頭ニ及申談候處此節之儀之去年及至急ニ被差登勿論戰爭之覺悟ニ而大身衆之家來及多人數被召連其以下及家屬不殘譜代之者迄及連登ニ相成夫ニ應雜費及強其處を以被附御心ト申ものニ候得共々様之儀追而之定例之様ニ成行此後交代之面々ハ直様心當ニ及相成御心付及定規之様ニ相成候儀之必然之儀ニ而其外御役人之内秋交代之面々トも不對ニ相成可申候間秋交代之方ニ御決議ニ相成候ハ、先差引ニ被直下是迄御振替渡り等ニ相成居候分立用殘出立前被渡下段御達ニ被及候ハ、其程ニ應下り造用之手當不足之面々ハ拜借等願出ニ可相成候間下り之旅用不差支様御振替又ハ拜借之名目ニ而被渡下成行之儀ニ於御御會議ニ可相成ト申所ニ而御取切ニ相成候て之如何程ニ可有御座哉是等之儀及於江戸表現事ニ懸不申候而ハ御議定成り兼候へ共申談候處申上試候右之通ニ之御座候得共此節ニ限別段之尊慮を以御心付等被下置候儀ハ格別之御儀ニ候得とも猶御勘定所及跡々ニ類推を恐候儀ハ尤之事ニ奉存候

五月十日通詞森山榮之助下田に着す

〔異國船渡來一件〕

〔寛永六年以後〕
寅五月十日仕出關通詞森山何某が長崎同役西吉兵衛へ之書狀

當月二日江戸出立今日下田表到着仕候下田ト申所ハ茂木村位之土地ニ而家數千軒ト申事ニ候得とも隨分邊鄙ト相見申候市中ニ而亞人見懸候處附役人も無之勝手ニ町家ニ立寄錢を以品物相調長崎表之振合トハ怪からぬ相違市中之者も恐氣も無之至極馴陸ひ之様ニ相見御仕候
一當十日及十三日迄ニ亞船箱館方歸船可仕まかし約定有之應接所ハ了仙寺。ト申二夕寺兼而亞人上陸休息所ニ相定居候由御座候

一此度之亞人ト約定別紙入御覽申候
右之外尙追々可申上候已上

五月十日

森 山

（英之助）

西 吉 兵 衛 様（文ニ約條書アレトモ略ス）

五月十二日我藩邊鄙固陋の士風却つて事端を惹起する虞あるを以て米船警固の任務を解かれんことを幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

十二日朝御留守居田中八郎兵衛海岸御懸月番松平和泉守様ニ持參差上候處御落手浦賀御奉行戸田伊豆守様より去朝日越中守御備場詰役人ト近々亞墨利加船五艘程横濱沖見置として渡來之由若渡來候共右船々ニ附添致警固候迄ニ而荒立申間敷旨御達御座候然亞墨利加船平穩之御處置ニ被成置候趣付而ハ猶更家來共ニ及諸事穩ニ相心得候様精々申付置候得共頃日及申上候通全體之人氣國風ニ而聊之事及無禮非法ト存候得者臨其期何分其儘見邊鄙相成遠國邊鄙之者共之性質ニ御座候得者自然異人自儘不法之儀御座候節若哉行違之儀出來不容易後患を引起候様之儀共御座候而者以外之儀ニ奉存候間附添警固船之儀者不差出様仕度奉存候右之趣浦賀御奉行様ニ兼而御達被成置候下候様奉願候此段申上候様申付候以上〔本文指〕

五月十二日

細川越中守家來

田中八郎兵衛

五月十二日ヘルリ下田に上陸し了仙寺に於て林輝井戸覺弘伊澤政義等と應接す

〔相州御備場御用一件〕

今度アメリカ和親相調薪水食糧石炭をも御渡ニ相成候節ニ付豆州下田松前箱館之兩湊に入津御免ニ付ヘロリ箱館之湊見繕として罷越當五月十二日下田之湊に歸帆いふし候間同十三日林家を始御役々並河田八之助應對有之候處ヘロリ箱館之湊ハ袋之様ニ有之山川人家之辨利等蟹國ニも稀成ル能湊と稱美いたし候得共一向湊之様子見聞も屆兼居取合せも出来不申候間湊之圖いたし置候間送可申と約し翌日之應對ニ三枚持参いたし候由右書圖歩割いたし山々之高低海之深淺海底巖石泥沙と申儀迄委敷測量いたし人家軒數廣狭をも委敷記し有之由

一 下田之湊者一向譽メ不申由

一 今度和親相調薪水食糧石炭御渡ニ相成年來之懇願東海之船路辨利を得於ヘロリハ萬邦ニ對し無此上面目と喜申候由然上之アメリカ之產物者不及申鉄炮を初何品ニ而茂日本之望ニ隨ひ如何様成御用ニ而も相勤可申と彼方々誓詞を認遣候由若日本之禁例を背候ものハ日本之御仕置被仰付候様ニかし日本之御刑罰アメリカニ而難用御法御座候節ハ御法替を願出可申候

一 於日本ハ大炮を嚴候儀之驚候と申候處於彼國ハ祝事ニ用候儀ニ候ヘ共右之通ニ候ハ、と申候而即日相止候よし

一 下田之湊七里四方勝手ニ上陸いたし度願出候付林家始御答ニ不苦との儀被及返答候よし

此儀江戸表伺なしニ被差免候儀ハ一里計ハ平地ニ而人家も有之候得共其外ハ嶮岨之山ニ而通路も出来兼候由ニ而即答有之候よし段々上陸いたし歸路を失候ものも有之たるよし

一 下田者當時迄非山江川様御預所ニ有之候處今度被改下田御奉行鈴木駿河寺様井澤美作寺様御支配所ニ被仰付境杭を被

建新國出来アメリカ關外へ出候節者願出御免之上與力同心差添ニ而罷越候よし尤所之ものたり共同様願所出入嚴重ニ被仰付候由

一 下田表ハ來春開發御奉行之官宅を始普請等出来之上通商をも被始候筈之處ヘロリも今度和親相調候上ハ再渡いたし不申由ニ而來春餘人渡來自然此度之申談狂候而者相成不申候間此節々通商等之諸品之直段立茂取究度と申出候ニ付被任其意候よし

一 右ニ付而者第一金銀之位不定候而之相成不申於双方吹分見候處アメリカ金者極々位宜ク慶長金もおよひ不申程ニ有之由ニ而日本金ハアメリカ金之三步一ニ茂當り兼候由如何してケ様ニ之下品ニ有之候哉と云き申候由此返答ニハ當惑有之候由銀茂日本銀少々位劣り申候得共是ハ同様之中談ニ相成候よし金銀之丸ク灰吹之程位と申事ニ御座候

一 石炭此節御渡相成候品常陸方出候よし石炭ハ三段有之候よし上品ハいふり立不申火力強し中品はいふり立候而火力強し下品いふり立火力弱ク有之候由此度御渡之品ハ中品ニ極候よし此石炭二三十年ニ掘盡し出来不申よし

右之外御渡之品々盡ク直段立相極候よし

一 アメリカ人自然病死之もの有之節と下田玉泉寺へ送り候由尤日本通し葬式いたし吳候様相願候よしニ而葬式料までも取究候よし

一 アメリカ人所々見物等ニ上り候ハ、いつ方ニても酒食致度と申出候得とも其儀ハ斷り良仙寺を酒食所ニ定ニ相成候よし

一 今度ヘロリは御役々之御應接貳拾四五度有之候よし之處於ヘロリハ温順ニして決斷敢果實ニ功熟如才も無キ人物之よしニ付イキリスフランス渡來何程之見込ニ御座候哉と尋ニ相成候處アメリカ杯ハ第一東海船路之辨利にて和親を乞候ヘ共右兩國ハ北海之船路遙々日本へ押立參候儀ハ交易願ニて可有之兩國共ニ人質惡敷國柄ニ付交易御免無之候ハ、必仇を成し可申來春迄ニハ何様参り可申と相考候間其内ニ得斗御評議被成置度と申候よし

安政元年

五五一

右者此節之一件林家差添ニ而河田八之助專取扱候由ニ付同人歸府後遠山追々罷越候得共此節之ニらへ且家來等有之又用見舞ニ參漸ク右之囃承リニ相成申候由私義出立前々日世話敷ながら遠山が囃承リ直ニ其序ニ而書留置候事

嘉永七年六月廿九日

吉 田

右者吉田間之助江戸出立之節聞書差出候付記置候事

五月廿二日林緯等下田に於てヘルリと神奈川條約附錄十二條を締結す

〔續徳川實紀第三編〕

日本國へ合衆國より之使節提督彼理と日本大君の全權林大學頭、井戸對馬守、伊澤美作守、都筑駿河守、鶴殿民部少輔、竹内清太郎、松崎滿太郎、兩國政府之爲取極置候條約附錄、第一條、下田鎮臺支配所之境を定めんが爲、關所を設るは其意之儘たるべし、然共アメリカ人も亦既に約せし日本里數七里之境關所、出入するに障ある事なし、但し日本法度に悖る者あらば、番兵是を捕へ其船に可送、第二條、此湊に來る商船鯨船の爲め、上陸場三ヶ所を定置き、其一は下田、其一は柿崎、其一は港内の中央にある小島の東西に當る濱邊に設くべし、合衆國の人民、必ず日本官吏に對して丁寧を盡すべし、第三條、上陸のアメリカ人免許を不請して武家町家に一切立寄べからず、但寺院市店見物は勝手次第たるべし、第四條、耕種者休息所は、追々其爲旅店設る迄、下田了仙寺、柿崎玉泉寺ニケ寺と定置べし、第五條、柿崎玉泉寺境内に、アメリカ人埋葬所を設け、鬼略有事なし、第六條、神奈川にての條約に、箱館に於て石炭を得べきと有共、其地にて渡し難き趣旨、提督ヘルリ承諾致し、箱館にて石炭用意に不及時は其政府に告べし、第七條、向後兩國政府に於て、公顯の示告に、關語譯司居合ざる時の外は、漢文譯書を取用する事なし、第八條、港取締役一人、港内案内者三人定置べし、第九條、市店の品を選むに、買主の名と品の價とを記し、當所へ送り、其價は同所にて日本官吏に辨じ、品は官吏に渡すべし、第十條、鳥獸遊獵は、都而日本に於て禁する所成ば、アメリカ人も亦此制度に服すべし、第十一條、今度箱館の境日本里數五里を定置き其他之作法は此條約第一條に記す處の規則に倣ふ

べし、第十二條神奈川にての條約の書翰を得、是に答るには、日本君主に於て、誰に委任有共意のまゝたるべし、第十三條、茲に取極め置所の規定は、何事によらず、若し神奈川の條約に違ふ事有共、亦是を變る事なし、右條約附錄エグレス語、日本語に取認、名判致し、關語に翻譯して、其書面を合衆國並日本全權双方取替するもの也、曆數千八百五十四年六月十八日下田に於て名判す、彼理、日本嘉永七年五月廿二日、前六人名、右直譯致候、ホットメン、右之通和解差上申候、本木昌造、堀達之助

五月某日本藩は異船渡來の節斥候船其他手船等の番所前の通行のことにつきては簡易の法に據るべき旨を幕府に申告す

〔相州御備場御用一件〕

異國船渡來之節物見船等差出候儀急連之事ニ付御番所前乘通候共御改受不申直ニ沖通往返仕右船交代之節茂同様ニ仕度尤異船退帆以後引拂御番所前罷通御改受候節は持具員數等乗組之者より御斷書面を以通船被仰付可被下候
一大津並鴨居陣屋詰之者共浦賀邊又は富津邊迄折々船路乘試武器積入渡海仕御番所御改之節茂乗組之者より御斷書面を以通船被仰付可被下候
一異船渡來之節時宜ニ寄御持場之内に手船相廻置人數乗組候儀も可有御座候間此段策而御斷申上置候右之趣御持場向々に茂御沙汰被成置可被下候
一異船渡來中固船差出置風波強小舟にて繫場等格別難儀之時分ハ最寄海岸に繫置相固可申と奉存候
右之段申上置候以上

五月 細川越中守内 青地 源右衛門

五月廿二日日本藩は米船渡來に際し弊備を辭するの我申請に對し未だ其指示なきを以て若し外船

の入港することありとも其任に當らざるべきの意思を幕府に申告す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

左之御書付五月廿二日御留守居代神谷矢柄持參上候處御落手
亞米利加船渡來之節附添警固船之儀者不差出様仕度との趣去十二日申上置候右者御差圖御座候迄之内若異船渡來仕候
共附添警固船者差出不中心得ニ御座候尤持場内之儀者番船差出可申候此段各様迄御内意申上置候以上

五月廿二日

細川越中守家來
田中八郎兵衛

五月廿二日浦賀奉行松平伊豫守は本藩留守居を引見して幕議の已むを得ず平和を主とする所以を懇示す

〔相州御備場御用一件〕

浦賀御奉行松平伊豫守様御役宅に外御用ニ而去廿二日罷出候處伊豫守様可被成御逢由御用人を以被仰聞候付御間ニ相通候處一と通御挨拶相濟此度御備場御受持ニ付而者遠國を被懸御多人數被差出置何角太守様に茂可被在御配慮御家之儀ハ御大國殊ニ御家柄士氣も盛有之公邊よりも別而御頼母數被思召候此節亞墨利加御取扱之儀ハ不被得止を事ニて昇平數百年打續候流弊故中々御所置も六ヶ敷御國之通士氣一統盛有之候得ハケ様之御取扱ニ者相成間敷候へ共時節と申旁被致方も無之追而ハ如何様とそ御處置も可有之候得共方今之儀者上さへ右之通之次第ニて御堪へ被成候間重疊心配之事ニ者候得共天下之御爲ニ候間願曰穩相心得若兵端をも引起候様之儀出來いたし候而ハ天下の御爲且御家之御爲合ニも不宜候間彌以平穩ニ相心得居候様猶被仰聞候者手前杯も先役之節ハ御側近相勤一體之御様子も粗致承知居候此節當役被仰付候而者盡力之身分甚當惑之次第候得共天下に之御奉公と相心得相勤居候間萬事不依何事無伏願御家之御辨利ニ相成候様御談可被成是よりハ追々御逢被仰聞事茂可有之且御陣屋詰重役之内に茂其中可被成御逢由をも被仰聞候

五月廿四日

青地 源右衛門

五月廿六日日本藩宮部鼎藏歸國を命せられ本日江戸を發す

〔自筆御用狀扣〕

六月十三日仕出

一宮部鼎藏儀ニ付從是三十枚手前（四月十三日付書狀）ニ有之候通中向候處於御國元茂重疊心遣虎次郎と無ニ之交なと之一條公邊に響候而之何程可有之哉と申來候付付札返事

被仰越通致承知虎次郎列御吟味大辨濟存外輕く御取扱可相成哉之模様ニ承中候鼎藏儀何ぞ煩敷引合も無之其身より出立之内意申出候間御様子有之廻國之難叶直ニ御國元罷下候様及達せ先月廿六日此元罷立候由候以上

六月十三日

六月二日米船悉く下田を退く

〔相州御備場御用一件〕

以飛札内啓仕候然之去ル朔日辰上刻蒸氣船二艘軍船三艘下田湊退帆いたし候付札、追而浦賀より下田迄陸地五十里海上四十一里ニ有之候間此段御含迄申上候本文五艘之内軍船二艘も南風つよく相成出戻りいたし翌二日退船いたし候旨只今申越候已上
是ニ而當時居残り之船無御座候應接結局之趣大略左之通御座候

日本之内三四ヶ所ニおるて交易いたし度旨ベルリ申聞候趣之御間濟不相成日本アメリカ永代不朽之和親御間濟付而之日本近海ニ而船中之食料其外關乏之品有之候節之下田箱館兩所之内に入津薪水食料石炭欠乏之品相調代料ハ金銀錢を以相納候積尤全ク船中ニ而入用丈日本ニ而被遣候而も差支ニ不相成丈ニ候間織計之事ニ御座候右様相成候上之下田箱館兩所之外に者張ニ渡來不致取極ニ御座候下田ハ此節御ひらき箱館ハ來三月ハ始候事唐阿蘭陀同様屋敷に閉籠究窟之

安政元年

五五五

日本三軍

義無之下田湊内小島周り七里四方勝手ニ上陸日本人ニ打交り致律制不法之儀決而不致管ニ御座候右之次第ニ付交易
と申譯ニハ無之船中入用之品丈御拂被遣候儀御座候

右之内々申上候間御覽後御火中可被下候以上

六月四日

右之相州詰同心ことき内方注進之由奥方見せ候付き六いたし置候事

六月五日我兩支藩の兵をして旗山十石二砲臺を分守せしむ

〔相州御備場御用一件〕

口上覺

相模國御備御座場旗山十石兩所の内細川能登守様山城守様申談右一ヶ所受持候様先達而御沙汰之通相談仕候處旗山之
方大炮六挺狼烟筒一挺十石之方ハ大炮五挺是迄御備ニ相成居中候間御高順之通譯柄ニ而ハ能登守様旗山御座場御請持
御相當之趣申談ニ相成候依之山城守様ニ十石御座場御渡被成候様仕度奉存候以上

六月五日

黒木辨藏

口上之覺

相模國御備御座場旗山十石兩所之内細川山城守様能登守申談右一ヶ所受持候様先達而御沙汰之通相談仕候處旗山之方
大炮六挺狼烟筒一挺十石之方ハ大炮五挺是迄御備ニ相成居中候間御高順之譯柄ニ而ハ山城守様十石御座場御受持御相
當之趣申談ニ相成候仍之能登守に旗山御座場御渡被成下候様仕度奉存候

一右御渡ニ相成候へハ旗山之方御座場大炮六挺御備ニ相成居候處能登守此節貫目以上之大炮四挺所持仕候通ニ御座候ニ
付何卒相成儀ニ御座候ハ、大炮二挺拜借被仰付候様仕度奉存候且又當時所持之大炮御座場居方之儀様子ニ寄土居等手
入ニ不相成候而ハ差支之儀も可有御座奉存候手入等仕候而も宜哉奉伺候

但旗山之方山上是迄外記流十貫目玉唐銅狼烟筒御備ニ相成候趣ニ御座候右代筒無御座候間木炮ニ而も差出置可申奉
伺候

付札

本文但書狼烟筒ハ公義御筒ニ而拜借續可相成哉之趣も承り申候如何程之儀ニ御座候哉奉伺候

一大津御陣屋外東之方二行ニ建方相成候明御長屋桁行二十間二棟拜借奉願當時夫より通勤爲仕度奉存候尤別紙繪圖面之
通追而外圍も仕度奉存候 (繪圖而略)

但間仕切其外少々之造作手入等仕度奉存候不苦儀ニ御座候哉奉伺候

右之段相伺候様申付候以上

六月五日

兩角金左衛門
米野覺右衛門

(前記兩末家の稟中は藩主之承認を得て奉行より異存なしとの口述を與ふ)

六月八日日本藩江戸留守居青地源右衛門は異船渡來の節斥候船等番所前通行のことにつき簡易の
法に據るへきことを浦賀奉行に稟申したるを以て之を守備各部に傳達ありたき旨を奉行荒木甚
四郎に申達す

〔相州御備場御用一件〕

異國船渡來之節物見船等被差出候節並大津鴨居御陣屋詰之面々浦賀邊又ハ富津邊迄折々船路乘試武器積入渡海之節乘
組より御斷書面を以通船被仰付候様浦賀御奉行松平伊豫守様に私名元之以書付及御届候寫一通且右御斷書面案文一通
差出申候間其向々に被及御達置度此段相達申候以上

六月八日

青地源右衛門

荒木甚四郎殿

安政元年

五五七

斷り書案文

覺

何之誰
上下何人
水主何人

- 一 鎗何本
- 一 具足何荷
- 一 駕籠何擬
- 一 兩掛何荷
- 一 合羽籠何荷
- 一 何々
- 一 何々

右者主用ニ付大津陣屋より浦賀表迄渡海仕候間此段御届申上候以上

年號月日

細川越中守内

何之誰印

浦賀御番所

御當番衆中

覺

手船何拾艘
一艘に

番士何人
足輕何人
小者何人
水主何人
乗組

- 一 鐵炮何拾目玉何挺宛
- 一 鎗何本宛
- 一 具足何荷宛
- 一 何々
- 一 何々

右者此度異國船渡來ニ付爲何船出張罷在候處今日異船退帆いたし何船引拂申候付此段御届申上候以上

年號月日

細川越中守内

何之誰印

浦賀御番所

御當番衆中

六月十日幕府米船悉く退帆の由を達す

〔相州御備場御用一件〕

嘉永七年六月十日松平和泉守様被成御渡候御書付寫大御目附衆方被差廻候

大日付に

豆州下田湊に滞留之亞墨利加船今度不殘歸帆致し候此段爲心得向々に可被達候
六月

六月十七日米船一艘越後の漂民を乗せて小柴沖に來船す

〔相州御備場御用一件〕

今十七日巳中刻走水村より一里半程沖合に異國船壹艘相見富津之方に向走り候段同所に差出置申候者より注進申越候此段御届申上候以上

細川越中守内

青地源右衛門

六月十七日

先刻御届申上候異國船一艘追々内海に乘入小柴沖に碇泊いたし候段物見之者罷歸申出候付早速固人數並番船等差出申候此段御届申上候以上

細川越中守内

青地源右衛門

六月十七日

〔全書〕(松平伊豫守家)

(來よりの書面)

以切紙啓上仕候然者先刻得貴意候異船之儀組之者共乗止通請いたし候處當春渡來之亞墨利加船未タ滞船罷在候心得ニ

安政元年

而參候趣並漂流人一人乗船罷在候付早々下田湊に相越候様申論候得共何分逆風ニ而乘戻兼無餘儀小柴沖に碇泊いたし候段組之者申聞候付猶下田表に相越候様申論候様申付出船爲致候右異船ハカルホルニヤ商船之由御座候此段可得貴意旨伊豫守被申付如斯御座候以上
六月十七日
西尾貞之進
柳島勇輔

青地源右衛門様

〔全書〕

小柴沖碇泊之異船余田大之助申出之趣ハ全アメリカ船ニ而商船之由箱館表ニ而越後船難船之處乗組十三人之内拾壹人溺死残り兩人助命然處一人ハ箱館之方ニ而も上陸得斗相分不申一人ハ右アメリカ船が助ク乗候付此節爲引渡右場所に渡來尤十九人之由外ニ別條無之趣ニ候段申出候以上

六月十七日

青地源右衛門

〔全書〕

小柴沖碇泊之アメリカ船ハ此度漂流人乗せ渡來之由漂流人ハ上衫領之者之由御組方之者申出候此節ハ何茂別條ハ右之間敷段浦賀御奉行松平伊豫守御直ニ被仰聞候

六月十七日

青地源右衛門

〔全書〕

今日渡來小柴沖に致碇泊候亞墨利加船之儀青地源右衛門并余田大之助書面之通ニ御座候處鴨居に爲檢使被差置候被助作方申出之趣ハ類船等茂無之炮器一切載せ居不申由應接應之與力より承候との事ニ而漂流人乗せ參候儀相違茂無之段

申出有之候

一今日書八半後田中龜之助上月十郎右衛門組召連大津方乗船ニ而田中ハ泥龜新田上月ハ柴村に出張ニ相成申候尤炮器等ハ船底ニ積込不目立様ニシテ御人數繰出ニ相成申候且又浦賀に注進之通ニ候得之御物頭二手ニハ及中間敷哉明日參談之上省候様ニも可有之と存候

一夷人取扱之儀付而今日青地に伊豫守様方被仰聞候趣有之右書付ハ追而致進覽可申候右之段申達候條藏人殿に茂御達有之候様存候以上

六月十七日夜

荒木甚四郎

高木敬太郎殿 (尙々書 略寸)

〔全書〕

以別紙申達候去ル十七日異國船一艘又々渡來御請場之内小柴と申所に致碇泊候付早速爲檢使被差置候其外御物頭二手出張浦賀與力方承紀候處亞墨利加船之由ニ而先度渡來之船將ヘロリ見廻且越後國漂流民一人乗せ來外煩敷様子茂無之船中闕乏之薪水喰物等願出候付於浦賀同所御奉行様方夫々被下候處無異儀同廿四日退帆いたし候段大津御陳屋表方達有之候此段爲可申達如是御座候以上

六月晦日

溝口藏人

御家老宛
御中老宛

〔神庫文書人印密書輯錄 三百九十四印〕 (此方様よりの御書論御) (草案等四十四通の内)

(袖書) 六月廿日
安政元年

伊達遠江守様

御再輪拜讀仕候愈御清勝奉賀候今度渡來之異船一昨日以來之模様猶又被成御承知度由委細被示下候右ハアノリカ州カ
ルホルニヤ漁船ニ而十九人程乗組越後國之漂人一人送來候と申事ニ御座候昨日小柴沖出帆浦賀湊に致碇泊候由右ニ付
懸り月番に相届候寫入貴覽申候折節取紛紳々申縮候以上

六月十七日浦賀奉行本藩留守居を招き外人に對してはつとめて寛大平穩の處置をとるべきこと
を内示す

〔相州御備場御用一件〕

浦賀御奉行松平伊豫守様より被成御面談度旨被仰越候ニ付參上致候處當三月江戸表ニ於て御備場詰之面々心得方之儀
ニ付伺書奉出候處願く穩ニ相心得其上押而上陸等致し御持場之内ニ入込砲器等ニ手を懸又者民家に立入不法之所行ニ
および候節ハ先穩ニ相訓其上ニも不聞入候ハ、捕押浦賀御奉行に引渡可申旨御差圖相濟居候事ニ付何も子細ハ無之儀
ニ候得共自然異人共右之及所行擲取候跡ニ而萬一被より名と致し被是申懸候種ニ相成候様之事有之候而ハ天下之御爲
不宜候間此上共穩ニ相心得萬一右様之節ハ不擲取以前先浦賀表に御知らせ可申旨左候ハ、如何様共御家之御恥辱并
申譯ニハ不至様御取計可被成由尤異人共及亂妨候ハ、擲取も可致候得共天下ニ一統同様ニ無之相州表而已右之通有之候
而ハ中々喧留と申譯ニハ至り兼可申畢竟天下ニ一統御家之様ニ士氣も盛ニ無之處より公邊ニても無御餘儀も御處置ニ付
其心配之事ニハ候得共天下之御爲と相心得賢へ異人共如何様及亂妨候而も可成文け穩ニ相悟し其上ニ而萬一擲取候様
之時宜ニも至り候ハ、擲取候以前先御知可申旨再應被仰聞左候ハ、御家之儀ニ取候而ハ萬事被成御引受何方迄も能
様御申聞可被成旨且又追々魯西亞船渡來之趣ニ候得共右ハ大國ニ而隨分禮儀も相辨へ居候由ニ付格別亂妨と申様成事
ハ右之間敷職近々ニハフランスイキリス渡來之風聞有之イキリス杯ハ別而無禮不法之國風之由ニ候得ハ旁前書之通穩
ニ相心得可申旨併右様被仰聞候而ハ諸士之勇氣をくしき候様ニ而殊ニ此度御備場御受持ニ付而ハ諸士遠境之無厭是迄

出張ニ相成候ニ付而ハ右様被仰聞候も其御心痛思召候得共何も天下之御爲ニ候得ハ無御腹被成御相談候由尤右ハ御
役前之御咄ニ而ハ無之御内輪御相談之由ニて御陣屋詰御重役ニも前書之趣致相談候様相働可申旨被成御頼候段御直
ニ被仰聞候以上

六月十七日

青地 源右衛門

〔異國船渡來一件〕

嘉永六年以後
一七月中旬浦賀御奉行此方浦賀御留守居青地源右衛門御使番御呼出内話之趣先達此方様御伺之被公義御付紙ニ之若
異人上陸民家亂妨御毒場炮器等ニ手懸候節ハ押捕浦賀奉行に可引渡との趣之處左様ニ而萬一彼方兵端を聞之種子ニ相
成候儀も懸計候ニ付左様之事有之共不押捕浦賀奉行相建候様との内話有之右之趣を以彌以平穩ニ取扱候様一應御建右
之候處御人數執をも不服ニ而伺書差出ニ相成其内之事ト相見へ御番方之内木村嘉右衛門と申者浦賀御奉行申分尤之由
申候處一被大ニ腹を立絶交致ト申事ニ而嘉右衛門御小屋に詰懸ケ人數詰兼候ニ付或ハ屏之上ニはしこを漢字アラン打
殺せ杯詰じり殆大事ニ及候様有之組脇心配漸ク取頭メ積り當人ニ都て斷り廻致たる由右様氣色ニ而 上ニも御配慮被
遊段々御仕法付キ吉田平之助御郡代浦賀御留守居青地同遣浦賀御奉行に御主意之趣を懸相働居候由

六月十九日在府本藩老臣溝口藏人直は相州警衛の備頭三淵志津摩に浦賀奉行内示の意を達す

〔相州御備場御用一件〕

異人共自然押而致上陸不法之所行等ニおよび候節取計様之儀ニ付阿部伊勢守様御差圖之趣及達置候通ニ付固より穩
ニ相心得居候上之重而申達候不及候得共今度浦賀御奉行様御示談之趣被爲聞食萬々一御人數之内ハ一旦之怒氣ニ乘
一統之動亂ニ係り候様之儀引發候而之屹ト難相濟儀と深ク被遊御配慮執茂御示談懇切之主意得斗相辨彌以末々ニ至迄
聊輕卒之儀無之様猶精々可被示置旨被仰出候條被奉得其意組中にも夫々可被達候以上

安政元年

五六三

六月十九日

溝口 誠 人

三 淵 志 津 摩 殿

六月十九日在浦賀本藩留守居助勤吉田平之助は外國船の舉動を在江戸留守居福田源兵衛に報告す

〔相州御備場御用一件〕

從野島早打得貴意申候同所浦ニ碇泊いたし候異船今兩浦賀渡之様ニ引返せ候段與力より野島出張田中龜之助列に相答無程午上刻頃帆を揚富津方角をさし船り帆ニ而出船いたし候付愈以平穩之模様ニ御座候
一今朝異人六七人バツテイラより海岸に乘付其内水主體之者二人致上陸野島染王寺境内ニ有之候井戸より水を汲取直ニ本船ニ乘返申候此節之者共は至而平和ニ相見不作法體之儀少も無御座候今朝書狀仕出申候跡ニ而出帆之様子相分り申候間水島段右衛門船を以懸々私より御注進仕申候今朝之紙面ハ宿願ニ而仕出申候間自然ハ未タ相違不申哉と奉存候此段宜被成御達可被下候御上

六月十九日午中刻

吉田平之助

福田源兵衛殿

六月某日本藩は隨時申報の煩を避けんが爲めに臺場及び其附近の海濱に於ける發砲及び練習の日割を定め豫め之を幕府に申告す

〔相州御備場御用一件〕

越中守相模國御備場所々御臺場は居附之御筒今度御引渡ニ相成候付打試申度且又陣屋並御預所海邊等ニ而家來之者積古鐵炮大筒船打とも四季無差別打試陣屋内外ニ而人數訓練貝鐘太鼓等相用折々相試候様仕度由海岸御懸御月番之御老中様は伺書差出候處可爲伺之通旨御差圖御座候依之毎月十日より廿日迄之間大筒等積古打仕居附御筒之儀も右日割之

内毎月一度宛火通仕候付其節々別段及御案内中間敷候此段並而申上置候以上

細川越中守内

青地源右衛門

六月

六月廿一日日本藩相州警衛將士の船舶試乘運轉の練習を容易ならしめんが爲め其都度浦賀番所に鑑札提供等の煩を避けんことを幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

廿一日朝海岸御懸御用番松平伊賀守様は御留守居代神谷矢柄持參上候處御落手
越中守相模國御備場御用付而持場内は備置船々平日乗方爲修業所々乘試相房沖合迄乗出候儀可有御座處浦賀御番所之儀並而鑑札請取置其時々鑑札差出御改を受通船被仰付候右鑑札者御奉行様御連印ニ付御轉役之節之鑑札引替等之手數及相懸被是不辨利ニ而差支候節及御座候間御備場御用中者別段を以以來不及鑑札他船ニ不紛様嚴重ニ船印相用無異儀通船被仰付被下候様有御座度尤御番所に者兼而船印體形差上置申候右之通御座候得者時々無混雜御手数及相懸不申候間旁此段奉伺候以上

細川越中守家來

福田源兵衛

六月廿一日

伊賀守様方十二月廿日夕御呼出ニ付福田源兵衛參上之處本文伺書ニ如左御付札御用以御取次御渡有之候

書面之趣以來鑑札相渡ニ不及旨浦賀奉行に申渡候間得其意最前相達置候通相心得船印相建浦賀御番所前通船致し不

苦候

六月廿二日館浦碇船の異國船下田に向ふ

〔相州御備場御用一件〕

安政元年

五六五

館浦に碇泊罷在候異國船今廿二日五半時過下田表に出帆ハムし候段浦賀表方申越候此段相連申候以上

六月廿二日

青地源右衛門
吉田平之助

荒木甚四郎殿

念十

六月廿四日先日出帆の異船再び浦賀に来る

〔相州御備場御用一件〕

以別紙啓上仕候然之先刻得貴意候亞船再應爲相糺候處當浦出帆後大島邊沖合漂居下田に離乗寄沙引惡敷風風其内沙ニ
としれ南風ニ而當浦再罷越候趣尤海面何分不案内之由水先之者只管數願申上候間則水先之者差違當表出帆之儀申渡置
候此段爲御承知可得貴意旨伊豫守被申付如此御座候以上

六月廿四日

西尾貞之進
柳島勇輔

青地源右衛門様

昨廿四日浦賀港に碇泊之亞里利加船今朝五半時比同所出帆いたし候間此段相連申候以上

六月廿五日

青地源右衛門
吉田平之助

荒木甚四郎殿

六月廿六日我藩は江戸留守居をして過日懇示せられたる守備將士の心得に關しては西阪頑固の
武人等却て激昂の色あるを以て更に適宜の處分を行はんと欲する意を浦賀奉行に辯せしむ

〔御備場記録、相州御備場御用一件〕

異國船渡來持場内に上陸等致し候節心得方之儀ニ付而頃日委細御内敷之趣早速江戸表重役共ニ茂申遣候處御懇切ニ御
示敷之趣難有奉長候衆體受場之儀付而者重役共初段々不安意之儀茂御座候間如何様卒實情之趣其御筋に歎願仕度存念
ニ罷在中候得共折を得不申空敷相控居申候處此節之御懇詞ニ奉纏不願憚申上候持場邊ハ内海咽喉ニ者候得共近比異船
乘馴觀音崎富津邊之中央を通過致候得者連夜炮丸杯之及候所柄ニ無之其上向地迄ハ里數有之海底深ク潮之呼吸其數御
座候間差寄海防之見込茂付兼其當惑仕候尤異人も容易ニ亂妨等致候夕所とも相見不申候且又當手人數之儀者生質至而
偏固ニ有之今度御備場御用被仰付候付而ハ萬難當春ニ應數百里之所急速ニ罷越末々ニ至迄必死之覺悟ニ而到着仕候得
者氣力引立居動すれハ内輪中分等差起重役共其心配仕居申候持場以來御臺場を初其外共彌以早々嚴重ニ仕置度大炮等
茂數多製造仕置候得共是急ニ取懸り候様ニ而ハ人氣猶更鋭立若其中異船渡來持場に近寄茂致候ハ、如何成不慮之儀
引起可申哉茂難計候付何事茂得と事情相定候上取計可申と評議を茂仕候程之議ニ御座候乍恐方今之時勢ニ而ハ今度御
内敷之趣至極御尤之御儀ニ而魯墨迄ニも無之英佛等之諸蠻相窺候ハ、如何ニ茂卒爾之儀なと御座候而者皇國之御大事
と相成候事故御趣意之處具ニ奉敬守彌以下々迄不慮之儀引起不申様重疊相示置謹愼不仕候而ハ難叶儀ニ御座候然處前
ニ茂申上候通偏固之風習故兼々御趣意ハ深奉畏居候而茂眼前難差通振廻と存込候節ハ一身を擲討果候敷炮發仕候様之
儀等有之間敷トハ難申上於此儀ハ如何ニ相示置候而も熱心凝居候偏情其節之時宜次第臨時ニ出來候事故甚無心元其上
大勢之人數殊ニ末々ニ至候而ハ猶更拙辨も無之持場より浦賀に者道程も有之異人亂妨等致候段ニ至り不攝取以前如何
ニ至念ニ御付答いたし候共隙取其内ニ者是非持を付候様ニも成行可申哉若名と致し當手より後患を引起し天下之御大
事と相成候様之唱ニも罷成候而ハ以之外之儀去々ハ理柔和順然ニ而已取扱候様相示候而ハ自然と士氣相衰物場之御用
ニ不相立様成行候事ハ當前ニ而是以證する所御國家之御爲ニ不相成且又永陣爲致候而ハ其身々々ハ不及申上下家族ニ
至迄速感難遣仕候事ニ付凡一々位ニ而國許ニ罷在候者共新ニ交代茂可申付處只平穩ニ計取扱萬事相忍候を主と致し

相示候様ニ而已相心得候而ハ當今持場に相詰候證者無之杯ト是又偏固之者共最初より交代詰方等相斷候時ニも至り可申哉ト夫等之心遣も不尠被是此御持場詰之面々心得之示方ニ者甚當感仕居申候頃日御内話之末ニ茂御座候間内輪難渡之次第打明御内話申上可然御見込茂御座候ハ、猶又御内敷を茂奉伺候様家老共初中越候何卒無覆御存慮之程御教示被成下候様奉希候事

御内話之趣ニ候得ハ今度御備場之儀ハ御撰ニ而被仰付御打拂之譯ニ而可有御座處當時之所ニ而ハ先平穩第一之御取扱ニ相成候ニ付而ハ偏固之者共差置自然後患を引起候端とも相成可申哉ト深心配仕候付前段之者共ハ江戸表に引付置非常御用之節出張仕候様ニ茂御座候得ハ兼而示方等茂行届安心之次第ニ御座候尤江戸定詰之者共ニ候得ハ大都ニ生立一通り辨別茂有之候事ニ付容易ニ危忽之儀杯ハ仕出中間敷候間平常者定詰之者共相應ニ差遣置候様ニも可仕哉右之通御座候得者平穩之御取扱申御心遣も薄却而御都合可宜哉此等之趣ハ私共心得ニ而御賢慮之處一通り奉伺候不容易事を茂申上被是失敬恐ハ候得共大儀之事故存意之儘不打算申上候間不當之所ハ一々御叱示被下若又表向申立候而茂可宜と思召被取候様茂御座候ハ、何分御内敷被成下候様重疊奉願候事(本文書は六月廿八日浦賀奉行の差圖により七月朔日修正して更を參照せよ)

〔相州御備場御用一件〕

御備場之儀付而浦賀御奉行松平伊豫守様は御内々御申入之趣青地源右衛門吉田平之助に委細申談夫々相心得書取茂出来去ル廿六日兩人一同伊豫守様に罷出御逢之儀相願候處直ニ被成御逢候付御家中御示方を初海防其外御迷惑之次第兩人ニ而繰返具ニ御内話申上書取を茂差上候處巨細被成御承知何茂至極尤之儀被成御察候被仰聞差寄御存意等ハ不被仰聞書付ハ得可被成御被見山ニ而其儘御預置ニ相成申候尤御寬談申上候内ニハ不敬之儀を茂申述候御断申上候處少茂不苦ケ様御内談等仕候様有之被成御太慶候兎角私之無之様御奉公不仕候而ハ相成不申由矣々茂被仰聞候様又追々御増被成候通御相切之御事ニ付連茂御通ハ被爲出来間敷御口氣其上アメリカハ少々異情も知ラロシヤハ禮節も有之由ニ

候得共エキリスフランヌなどハ不法之國と被及聞其御懸念被成候趣ニ御座候段々御話之内浦賀御組方御人少ニハ候得共異船渡來之節御持場に御組方之内少々御貸被置取扱せ候而之何程ニ可有之哉との御事ニ付左候ハ、備手之面々ハ隠伏致せ置自然之節御組方ハ合同次第罷出候様ニ茂有之候得ハ大ニ可宜哉との趣先御取合せ仕置候

一昨廿七日外御用ニ付而源右衛門罷出候處伊豫守様被成御逢前日之趣猶又御話有之御人數等御尋有之候付千四百人參り居候と申上置候千人程江戸に御引取被置五百人程茂被差置江戸定詰之者ニ而候得ハ成程心遣茂薄ク可有之カかし此方様計ニ而無之外御三方も又御同様ニ可被仰立なと、彼是御困り被成候御口氣ニ而勿論未駭といたしたる御返答ニハ無之何様御當惑と被察申候書取茂未々御留置ニ而御座候間近々猶御返答ニハ相成可申候右兩人口達之譯先申述候以上

六月廿九日

藤 本 彌 三 郎

栗原 伊 左 衛 門 殿

追而申述候昨廿八日夕松平伊豫守様ハ御呼出ニ付青地源右衛門參上之處早速被成御遇去ル廿六日差上置候書付江戸御同役様迄可被成御差廻御存念ニ候尤江戸表之鹽梅段々御心得有之間ニハ手荒御評論等有之事ニ付成丈差障無之様書取之内御見込之處少々相省差出候方可宜と巨細被仰聞御自分様茂當所は御越以前ハ現ノ所ニ御懸被成候而ハ段々御心持茂違候杯と重疊厚御内話等御座候仍之別番懸番之通書取認直今夕猶又源右衛門持參差上答ニ御座候此節何茂無御覆候御示談有之矣々至密ニ相心得取扱候様被仰聞候以上

六月廿九日

藤 本 彌 三 郎

栗原 伊 左 衛 門 殿

六月より七月にかけて藩兵江戸より熊本に歸着す

〔異國船渡來一件〕

一寅六月七月ニかけ監物殿備前殿其外沼田木下初大組付之面々下着御番方子弟登込居候人々孰まも下着御番方大筒手之

安 政 元 年

五六九

七月三日薩藩鮫島正助書を長岡監物に贈り琉球に於ける異船跋扈の状況を告げ且つ同藩士十三人流罪を赦されたることを報す

〔先哲遺翰〕

一輪奉呈候時氣不順ニ御座候得共益御機嫌能海陸無御恙去六月中旬御歸國ニ相成候段御懇書被仰下難有奉拜披候水府老公御拜領物等之儀且御詠草等感佩之至御座候可敷哉天下之事いか、決定可仕哉極秘之事なら琉球ニおひて阿部侯並林井澤等應接之次第且往返之書翰等一々寫取呈申候間江戸に差登相成候彌以通商和義之趣ニ而其外言語ニ絶し申たる次第共多々有之歎息之至御座候右應接書不遠内寫取り可奉入覽候満清彌以大敗北ニ而天下四裂之形ニ御座候由右式之成行故夷人殊之外浩然之勢ニ而日本さへ手を束通和ニ伏候形行故琉球位之一海洲ハ不及論候間押而和いたもへき趣杯申掛殊之外難事ニ御座候就而者先達而も御教示被成下候儀共悉肝銘之至ニ御座候天下國家之事御互ニ一己之務ニ不相成候間何を不遠内何とぞ奉拜尊顔候而委曲可奉申上候煩後ニ而殊之外執筆心ニまかせ不申候亂筆御禮答迄乍延引如此御座候恐惶謹言

七月三日

鮫島正助

政徳花押

監物様

御左右

追啓午未筆時分柄ニ茂御座候間無御痛痒尊體被爲重被下度伏而奉祈候序ニ御吹聴申上候内憂之儀も流罪之者共十三人此節赦免相成申候苦中之少慰ニ御座候御同悅被遊可被下候

七月五日本藩は異船の到底我海戦の敵にあらざるを以て陸戦の外選撃の策なきを憾とする旨を豫め幕府に開陳す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

七月五日阿部伊勢守様海岸御願御勝手は田中八郎兵衛兼上公用人に出會左之通申述別紙差出候處委細致承知伊勢守様は可申上御登城御留守ニ付別紙者預置御退出之上差上可申段申聞候
越中守相模國御備場請取方相濟人數差遣專諸事手當仕家老共初追々御臺場海岸等致見分候處及承候通持場邊海上咽喉と者相見候得共向地迄ハ存之外手廣有之異船者富津隱洲之上を茂乗通候様子ニ付御臺場邊を避沖合相越候ハ、炮先杯ニ而打留候所柄とハ相見不申其上大津内海之境ニ付潮之呼吸甚敷海底深御座候間差寄海防之見込茂付兼申候渠ニ者自在堅固之船ニ而船軍之利有之夫ニ尋常之船を以敵對いたし候共人數を損候計ニ而防留候儀無覺束追々ニ者大船製造水夫之働等茂致熟練迎討候手立茂可有之哉ニ候得共製作乗方等何茂不鍛練ニ而之却而不覺之基ニ付旁諸事急ニ者相整兼いつき之道ニ茂方今沖合ニ而防留候見込も無之右之通ニ而者態々遠國より御固被仰付候詮茂無御座且之御要地と唱來候場所自由ニ乗通せ候而者武名ニ茂相係候儀家中舉而無本意次第と申出當惑之至ニ御座候前文之通ニ而外ニ策略見込之筋茂無之場所ニ付彼は無據此段一應御内意申上置候尤海岸之儀者重疊差入防禦可仕候此段申上候様申付候以上

細川越中守家來

七月五日

田中八郎兵衛

七月九日幕府は日章旗を以て我日本國總船印と定め且つ總て大船には白帆を用ひす各自明瞭なる徽號を附すべき旨を令達す

〔尊攘錄皇武令〕

大口付に

大船製造ニ付而者異國船ニ不紛様日本惣船印者白地日の丸幟相用候様被仰出候且又公義御船之儀ハ白紺布交之吹貫帆中柱に相建帆之儀者白地中黒ニ被仰付候條諸家ニおゐても白帆ハ不相用遠方ニ而も見分ケ候帆印銘々勝手次第ニ相用可申候尤帆印並其家之船印も兼而書出置候様可被致候右大船之儀平常廻米其外運漕ニ相用候儀勝手次第ニ候得共出来之上ハ乗組人数並海路乗筋運漕方等猶取調可被相伺候
右之通可被相觸候

七月（九日の日附は續
徳川實記に據る）

七月十五日英國水師提督ジェームス・スターリング船艦四艘を率ゐて長崎に入り英露開戦のこ
とを告げ且つ長崎其他の諸港に碇舶の許可を請ふ

〔神庫文書 人印 密書輯録 四百五十印之内〕

〔袖書〕

イキリス渡來之儀ニ付佐分利十右衛門内狀

一筆申上候益御安泰ニ被爲成御奉奉恐賀候今般イキリス船渡來之儀者先便言上仕置候通ニ御座候右船ヨリ當所御奉行に當テ書翰差出申候得共嘆話ニ而通詞和解出来不申候ニ付かひみんに翻譯被 仰付其上ニ而西吉兵衛列和解仕別紙林榮七郎密々書取指越申候間其儘差上奉入尊覽候

一阿蘭陀本國蒸氣船渡來後別段風説書當御役所に差上候内ニ則有之候儀先達而申上置候通來卯年日本にエケレス政府が使節差越候儀決定いゝし候ニ付魯西亞トルコと戰爭有之候を名として一身の國々申合當年日本諸港を打廻り人氣を

取り奔命ニ被せ左候而來年表分之使節を差越御返答之御振合ニ而直ニ一身之國々一同襲來之積りと相見申候且又御奉行様之書翰ニ添エケレス國版一枚差出申候由則別紙榮七郎心覺を書留候通ニ御座候右引札いたし置無餘儀戰爭ニおよひ候仕懸ケと相見候趣ニ御座候誠日本に對し無禮之いゝし方ハ今度イキリス船ニ而通辯いたし候ものハ元ト尾州之者ニ而先年漂流いたしイキリス船ニ助ケラレ其後イキリス船將モリソン浦賀に連レ參候處鉄炮を打懸候間漂流人相渡候儀も難相成直ニ薩州に連レ越候處浦賀ニ而請取不申候漂流人難受取申候由ニ而無致方イキリス養ひ置日本通辯官ニいたし置尾州之元吉と申候者ニ有之候段檢使に自身として相名乗申候由衣服イキリス通ニ而隨屬いたし居候得ハ少茂恐ルけしき茂無御座不的之應接仕候由ニ御座候依而此節ハ通詞ハ右船ニ御用無之御奉行様御返答被是之次第ハ御役所手筋を承候外手寄無御座候相考候處跡船を相待出帆可仕と相見へ申候定而別紙之趣ニ御座候得者浦賀に茂相廻右之引札等差出可申事と相見候趣榮七郎列も相考候段咄仕候乍恐 公邊ニ而茂明年ニ至候而ハ黒白差詰候事ニ相成最早海内相手ニ相成候而ハ 神力を頼必死之覺悟仕候外有之間敷御廟算何程之御決議ニ相成申候哉日本人ハ無殘所承知仕度事ニ奉存候別紙之趣至而機密ニ心得候様通詞共に茂猶御申渡ニ而有之候間其思召被成下候様奉存上候此段奉言上度如斯御座候恐惶謹言

寅門

七月十八日

佐分利 十右衛門

御家老宛
御中老宛

〔全書〕（前文ニ所謂
別紙ナラン）

今般魯西亞國とトルコ國と戰爭有之候處此節之魯西亞方之致方甚理不盡之事ニ而トルコ押領之思立之由ニ而難點止候付味國女王フランス帝と相議して數多之海勢ヲトルコニ遣し援兵をらしめ候右ニ付當一手之大将スコウトベイナグト

安政元年

五七三

官名ステイルリンキ名八東海發軍之命を受只今御當地に罷越候旨右ハ嘆國ニ不限一身之國々何をも同様ニ而嘆國之船外ニも數艘出掛候由右者何故なまハ魯西亞之船又者彼方ハ被奪候船も此方角ニ而見當ル時直ニ夫を妨候爲之由右之次第ニ付船々度々日本へ可罷出間當湊ハ勿論其外所々罷出候儀御許安被下度於御奉行所可然御取計宜御差圖被成下度吳々相願候大定

〔安政二年 異國船一件〕

嘉永七甲寅七月十五日渡來之嘆人々差出候書翰和解

長崎之地長多御奉行所に

- 一大ブリタニヤ女王の恩意は其一味向其ニ索を一致し被魯西亞國より歌羅巴を押領せるの手段有を以歐羅巴爲ニ防禦せんと欲して魯西亞國ニ此度軍を發出仕候事柄ニ付告知の書面の寫差出候此旨御承知可被下候
- 一數多之軍勢既ニ合戦ニ差出申候
- 一魯西亞國之船勢ハ計策盡果不得止事其自己潰レ引返し潛り居申候
- 一魯西亞之諸術數々所手ニ入或ハ荒廢せしめ候將又魯西亞國之内トルコ境界せし所ニおひて既ニトルコ。ルシヤの軍勢入込候ニ付代迎散々の政走して及退去候
- 一右之趣意有之候間今般決斷致テロシヤ國之船之勢ハ勿論其近邊方々の商官ニ至迄手ニ入候且致滅却候旨心得候擬テロシヤ國ハ漸く其境界を廣めサカリイン及び蝦夷千島にも及はし頓而日本も志有之候事ハ反的顯然之事ニ候大ブリタニヤ女王之恩意にて海勢の大將として私儀東海上ニ發軍の命有之候節此一手之船勢只今此地ニ罷出猶右一件の爲數多之船勢出掛候儀ニ候得ハ是は魯西亞の軍船或ハ右魯西亞方より被奪候船も可有候時分是及妨候爲ニ候勿論右等之爲御當國の湊ニ罷出候儀も可有之事ハ大ブリタニヤ國王之趣意ニ無之同國一致之向一同之趣意ニ御座候此段入御聞可被下候
- 一右様之次第ニ御座候得とブリタニヤ國奉行之心得てハ親睦之旨を主として何卒日本國帝或ハ其從屬之高貴方ニ對し

軍戰等之儀無御座候心之及び相成丈々相違々候様仕度宿願候先如斯之心得ニ有之候ニ付而者無餘儀情合御没分別日本於御奉行所御勘考被下御當國湊等ニ此度之件一味之者罷出候様御免許御座候様所希候

- 一右之譯合ニ而御座候間可然様御含被是都合能相整萬端御差圖被下萬事差支無御座候様相成於長崎湊ハ勿論日本國領之及其地場所ニ罷出候儀相叶候様仕度志願ニ御座候

フリタニヤ女王之船ウサンセストル船於て曆數千八百五十四年九月七日 嘉永七年甲寅七月十五日ニアタル

大將 スコウヘイナク ト官名 六十二才
 セーメスステイルンキ名

右四艘とも是方唐土上海に罷越夫松前箱館に渡海之積其譯ケハテロシヤ船萬一松前邊ニ罷越居候哉も難計候爲ニ罷越候趣テロシヤ蝦夷地島々迄横領致後ニ之御國をも相望歐羅巴洲をも并吞相企候付歐羅巴洲ニおひてハ國々一致いたしテロシヤを敵國して致爭戰候趣尤英國ニおひてハ俄ニ不仕乍併阿蘭陀國之儀之ニ百年來御國に貢物等差出候得之屬國同様之國柄英國ハ御國之御下知ハ不受御相談之儀も御座候ハ、何事も承り御用相辨可申段申立候由當節出帆之日より十二日目に尙いつを本國使節を以可申上候申渡候由ニ御座候極々秘密之儀有之候

〔異國船渡來一件〕

嘉永六年以後

- 一此節和蘭使節船渡來ニ付御小姓組林九兵衛爲御使者長崎御奉行御見舞罷越答ニ用意致居候處閏七月十五日イキリス船四艘渡來ニ付御模樣替り御使番長鹽庄兵衛同廿日長崎に罷越候事
- 一右四艘之内壹艘軍船三艘ハ蒸氣船之由先年モリソンと申亞羅利加船浦賀に連來薩州ニ而も大筒ニ而打出され其儘廣東に滞りイキリス船ニ而通事致居候尾張國之者何某此節之イキリス船に乗り居通事致候間外ニ通事を用候ニ不及段イキリスカ申出應對之役人ニ對し最初ニ彼方御姓名はと日本辭ニ而問懸られ大ニ驚キ候由此節使節主意ハ近年魯志亞トルコと取合出來イキリスフランス諸國トルコ一味致し候間右取合之譯ニ乘し漢土日本方角ニ往來致候オロシヤ船を打取候爲處々軍船差出置候便利之爲日本湊々を借用致度との趣之評判

七月十七日本藩管轄相州十石臺場を末家細川山城守に引渡す

〔相州御備場御用一件〕

十石御臺場先月十七日細川山城守殿に双方御役々立會無御滞御引渡相濟候段高本敬太郎より荒木甚四郎に申來候事
八月

七月十八日幕吏辻茂右衛門は我藩相州備場詰人員減少希望の件聽許せらるゝに至るべきを内示す

〔御備場御人繰一件〕

七月廿二日 青地吉田方 同廿三日月夕着

内密申進候去十八日辻茂右衛門様は源右衛門御逢申候節御内々被仰聞候之先頃松平伊豫守様は兩人參上御内話申上候一件追々心配いゝしゝるゝ而可有之右一件ハ茂右衛門様ニ茂專御取扱ニ相成候付御内意之通定詰被差越置候方ニ相濟候様御取調ニ相成江戸に被仰向置候由乍然
公邊ニ而如何御會議ニ可相成哉其儀之御伺得不被成候得共多分ハ御内意通可相濟御見込之由極密被仰聞候右付而者御内々御人賦等調立ニ相成居候方ニ可有之哉若其中御奉行様且組頭衆之内より被指越候定府之御人數等御聞合ニ可相成哉茂難計候付定府御人數何百人位申儀大略之趣被仰置候様御取計可被下候右之趣御手元迄御内意置候間溝口殿且荒木にも宜御囑可被下候以上

七月廿二日本藩管轄相州旗山臺場を末家細川能登守に引渡す

〔相州御備場御用一件〕

一旗山御臺場同七月廿二日細川能登守殿に双方御役々立合無御滞御引渡相濟候段高本敬太郎より荒木甚四郎に申來候事

八月

七月廿二日本藩管轄備地兵員交迭願の件に關し豫め其配置並に巡視番船及び其乗組人員を定む

〔御備場記録〕 (七月廿二日)

左之通取調御奉行様且組頭衆より定府御人數等御尋も有之候ハ、差出可申と相和居候處殿と御尋無之候付不差出不用ニ相成候得共御人繰等爲後變記之

- 一砲臺六個所
 - 一外國船碇泊所
 - 一檢視船
 - 一物見船二艘
 - 一番船五艘
- | | |
|-----|------|
| 大筒手 | 百四十人 |
| 足物頭 | 三人 |
| 足馬廻 | 三人 |
| 足馬廻 | 二人 |
| 足馬廻 | 各一人 |
| 足馬廻 | 各一人 |
| 足馬廻 | 各一人 |
| 足馬廻 | 各二人 |
| 徒士 | 各一人 |

七月某日幕府は士氣の振はさるを憂ひ令を發して武術の研磨を督勵す

〔相州御備場御用一件〕

大日付
御日付

武術之儀者風儀第一ニ而不取締之儀無之實意ニ勉勵いたし候儀勿論之事ニ付是迄も度々相達置候得共更角心得違之もの有之打毬等ニ事寄せ慰ミ同様相心得候より實意之修業難行届自然不宜風儀ニも押移候哉ニ相聞如何之事ニ候畢竟常々無益之費用を相省き名聞ニ拘はらず實用之修業專要之儀ニ候間頭支配におつても右弊之儀無之常様々可被心附候事右之趣向々に可被達候

安政元年

七月

七月廿四日幕府は内外の狀勢に鑑み大に軍制を釐革する所あらんと欲し其擔任者を選び且つ水戸齊昭の意見を需む

〔相州御備場御用一件〕(七月廿四日)

大目付

井戸石見守

筒井肥前守

御勘定奉行

松平河内守

川路左衛門尉

御目付

鶴殿民部少輔

一色邦之輔

岩瀬修理

御軍制御改正被仰出候間右御用可被相勤候右於新番所前溜伊勢守申渡之遠藤但馬守侍座

筒井肥前寺

海岸防禦之御用並異國人應接之御用向是迄之通可被相勤候間所御用者御免被成候只今迄被下候御手當金之儀者思召を以共儘被下之

岡田利喜次郎

海岸防禦之御用並内海御臺場御書請大筒繩立大船其外御船御製造之御用可被勤候右於同席同人申渡之

御軍制御改正掛に

公儀御軍制之儀前々より御法式も有之候得共當今之時節古來之御備立ニ而者不都合之儀も可有之御取捨之上御改正有之可然と思召候依之御實備之處御大切之儀ニ付此度夫々掛り被仰付候事故得と御勘考之上御十分御見込被仰立永世之御規則御定可相成候様ニとの御沙汰候事

右之通水戸前中納言殿に相達候間追々被仰立候儀も可有之候付爲心得相達候事

七月廿四日日本藩豫め相州守備兵の増減配置の設計を立つ

〔御備場御人繰一件〕(七月廿四日)

御備場詰凡之御人數

一定府御物頭列並平士 十五人位子弟七人位

一定府徒御使番列以下諸役人段以上 小者十人計

一定府足輕段以下 二十人位子弟十人位

一定府足輕ハ不加 十人位子弟各別無之候

一定勤番物頭 但定詰足輕ハ不加

二人足輕五十人位又者 六人程

一勤番定府打交内勤之御役人御 上下七十人位

醫師并定詰足輕等上下之人數 四人今迄之通詰方被仰付

一步御小姓 等候外ニ小者二人之積

一御預所御扶持人 七十六人札筒七十人計

惣御人數四百十四人 當時大津詰

御末家之御人數ハ不加 百人者六十二人

七月廿六日本藩管轄地の收米は糧食に買収し貢納は石代を用ひむと欲し其旨を幕府に申請す

安政元年

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

廿六日海岸御懸御月番阿部伊勢守様に御留守居代神谷矢柄持參御取次を以兼上候處御落手
越中守御預所相模國三浦郡鎌倉郡武藏國久良岐郡村々之内松平誠丸様元御領分之是迄收納米之備米納又之石代金納有
之井伊掃部頭様元御預所之分者皆石代金納有之冬御張紙直段ニ金三兩増ニ而取立ニ相成候趣ニ御座候右村方之儀近年
異國船度々渡來付而者數十日之間夫役ニ相働農業等出來兼平日之食糧茂難取續程ニ付非常之貯米等者猶更無之當時ニ
至候而者糶と困窮ニ陥居中候此度越中守御預所被仰付候而者右村方取致且ハ御備場諸人數糶米非常之節之手當共段々
手續仕候得共國許數百里相隔廻米之辨利不宜追々難船等有之御備場諸人數並江戸諸人數之扶持米等差支ニ度及候程
之儀ニ付役人共甚以心配仕居申候右ニ付御預所村々收納米之分越中守方に買入御場所諸人數並村方手當米等ニ貯置候
様仕度依之以來年々皆石代上納ニ被仰付冬御張紙直段ニ金三兩増ニ而御金藏に相納候様仕度奉存候御備場御用別段之
譯を以何卒右之通御聞濟被成下候様奉願候此段申上候様申付候以上

細川越中守家來

七月廿六日

田 中 八 郎 兵 衛

八月廿六日伊勢守様御勝手ニ御呼出ニ付御留守居代神谷矢柄參上之處木文願書ニ左之御書取御添以御用人被成御波
書面之通取計御勘定組等之儀者御預所に掛置候役人より御勘定所に相伺候様可仕候事

七月某日本藩池部啓太門人を汽船練習砲術研究の爲め肥前に派遣す

〔異國船渡來一件〕

一和蘭使節船肥前侯御頼之蒸氣船小形持來長サ六間計り之山和蘭木船蒸氣ニ而與力同心船乘方砲術積古有之蘭人共懇懇
ニ教候山御國及肥前筑前薩摩四ヶ所方願相濟血判之上右積古見習支不申候由此方ハ池邊隱居門人中カも見習ニ參候

山

〔防長回天史〕

安政元年七月和蘭の軍艦我が長崎に入るや(中)爾後尙は久しく長崎港に投錨す肥後藩之を見て昨冬既に相州備場警衛
の命を蒙るを以て其兵備を嚴にするを要するを理由と爲し藩士七八名を蘭艦に派し親しく造船運用の術を見學せしめ
んと欲し長崎開役をして之を長崎奉行に請はしめ其允許を得たり(中)一行(幕府派遣) 八月二十五日を以て長崎に着し
二十八日を以て乗艦見學の事あり故を以て奉行終に諸藩士の乗艦を謝絶す

閏七月三日我藩相州警備地在勤の將士及び吏員の員數につき長州藩の照會に答ふ

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

御場所詰込御人數之儀長州様御備場詰御家來方大津御陣屋に問合來候段同所詰御奉行方申參候由依之追々御役所打合
左之取調閏七月三日機密間根取古小路嘉右衛門に入披見得と囑合如左相決御用人は茂入披見候上御備場詰御留守居青
地源右衛門吉田平之助は差遣長州様業に答ニ相成候様同日申向

- 備頭 壹人
- 番頭 貳人
- 奉行 壹人
- 目附 壹人
- 物頭 六人
- 副頭 三人
- 使番兼留守居 壹人
- 小荷駄奉行 壹人

安 政 元 年

- 作事奉行物頭並陣 壹人
- 郡奉行留守居兼 壹人
- 馬廻組脇 四人
- 昇副頭 壹人
- 長柄頭 壹人
- 軍師 壹人
- 砲術師 五人内一人天文算術兼

五八一

斥候	四人
馬廻	八十人
子弟	五十二人
大筒方	二百人
右筆	壹人
奉行方根締役	壹人
武器支配兼	壹人
郡方吟味役奉行方	壹人
根締役兼	壹人
勘定役判兼	壹人
兵醫兼	五人
醫師	五人
作事方根締役	壹人
徒目付	六人
勝手方徒目付	二人
郡方徒目付	壹人
作事方徒目付	壹人
奉行方書役	三人
昇支配	貳人
貝太鼓役	十二人
役割支配兼	壹人
掃除方見給	壹人

勘定方書役	四人
作事方書役	二人
留守居方書役	四人
留守居方下役	二人
郡奉行書役	四人
作事方下役	二人
武器方下役	壹人
大工棟梁	二人
足輕小頭	十三人
足輕	二百二十人
長柄之者	二十人
昇之者	八人 <small>本文之内四人 御抱入之者</small>
船頭	四人
船手組	四十四人 <small>本文ハ都而 御抱入之者</small>
中間	六十二人 <small>本文ハ 百人者</small>
惣人數千五百人餘	
本文之外兩御末家方御人數且職人并御預所御抱入之者 等相加候ハ惣人數千五百四十六人ニ相成候由ニ付如 本文	

閏七月九日本藩留守居青地源右衛門は幕吏辻茂右衛門に就きて警備地詰人員に關し内談したる旨を報告す

〔相州御備場御用一件〕

辻茂右衛門様に御用御領御領掌ニ付而之御挨拶被進物之御使者昨八日相勤候處茂右衛門様被成御逢段々御懇切之御内話有之能折柄御座候間御雜話いたし候内私心得ニ而此節内調之趣左之通御話仕候尤先達而松平伊豫守様に御内話申上置候一件其後江戸御模様茂無之餘り延引之事ニ付此七日江戸表に御催促被仰遣候由尤彼表ニ而茂段々御評議茂可有之夫故思ふ程ニ急時ニ至り兼候との御内話御座候

一定詰御人賦之儀付而之大略取調申候處聞ニハ難去役儀申付置候者度多分有之十分差繰茂出來兼内役等打混凡四百餘り茂可有之哉いまた治定之調ニ而ハ無之いつを治定之上者入御覽御内教を茂可奉願候尤先頃伊豫守様カ先三四百茂遣置候得ハ宜可有之哉其節ハ猶御相談を茂可被成との御内話ニ御座候間御見込之趣何程ニ可有御座哉と相伺候處委細被成御承知至極之調ニ而差寄御存寄茂無之其内右下調御披見可被成との御禮御座候
一御備場に相詰居候御人數之内ニハ若者勝ニ而文武之積古等茂存分ニハ出來兼縱令江戸表に引付置候而茂國許ニ而師範之手ニ付修行仕候程ニハ相成兼候間御備之内御番方一組ハ御國許に差遣置申度左候ハ江戸勤番之内御出馬手外ニ相詰居候御人數茂可有之哉と見込申候間自然之節ハ御國元ニ被差下候御番方之代ニ右勤番之内ハ出張仕せ候様ニ茂御座候ハ、別而都合茂宜尤右之儀ハ私存付候迄ニ而重役共ニ談候儀ニ而ハ無御座因而人數等取調茂仕不申段申上候處當時之處ニ而ハ段々御難澁之綾茂有之抑揚ニも嚙々心配可仕尤成事ニ而右之調茂致出來候ハ、披見仕度左候ハ御奉行所に御願立ニ相成不苦儀ニ候ハ、程能御相談を茂可被成との御取合ニ御座候

畢而猶申上候ハ御國元ニ御人數被差下候而茂自然之節御奉行所カ御差圖次第早打飛脚差立申候得ハ大概十日程位ニハ參着可仕哉左候而急速ニ御國許出立仕候ハ三十四日内外ニハ此元ニ着揃可申夫迄之處ハ江戸表に引付被置候

御人數々勤番之内方出張仕せ置候得ハ御間欠ニハ相成中間敷哉夫込手薄ニ被思召候ハ、可奉願様度無之何様左様ニ
 茂取調之時ニ至候ハ、御内敷を奉請度段申上候處重疊尤成趣ニ御間取ニ相成候
 一御人數出張所に異人上陸之上薪水等再應實請候様之節ハ此方々茂再々應相斷可申候得共湯ニ度及候躰ニ而強而乞請候
 ニ差遣不申候得ハ夫々彼是申分拆茂引起可申哉茂難計旁懸念之儀ニ御座候間其節ハ先可也ニ與へ候心得ニ御座候尤此
 儀ハ屹ト御伺申候儀ニ而ハ無御座段申上候處當時平穩之御取扱故其處か至極尤成取扱ニ而不成と言而投而遣ル心持と
 の御咄ニ御座候

一此許御陣屋諸武器類積下證文名元一件鉄炮五十目以下四拾挺弓五十挺矢千本迄ハ御備場御請持申別段之譯ニ而浦賀通
 船宜様ニ御咄合被成置候得共五十目以上弓五十挺以上矢千本以上之處も右同様通船不苦様ニ御申談御辨利ニ相成候様
 御取計可被成由右之別段御奉行所に御願立ニ相成候筋ニ候ハ、願書下調等ハ被成御披見可然様御相談可被成由尤い
 つまとそ相決候上御紙面ニ而可被仰遣との御咄ニ御座候

一英佛渡來茂いたし候ハ、魯墨と遠取扱筋懸念仕候趣申上候處突留候儀ニハ無之候得共當時清朝末々及戰爭清朝ニハ
 英墨人加勢いたし明末ニ魯佛加勢いたしとふか英墨及數艘打碎レ候様之風説茂有之右之趣自然實事ニ度候ハ、渡來
 之事ハ暫氣遣無之墨船當春渡來之内四艘か打碎レ候哉之唱ニ而彼ニ攻合相始無此上事との御咄ニ御座候尤魯ハ當年渡
 來何程ニ候哉自然ハ來春ニ茂參り可申哉先當月來月之内ニも參不申候ハ、多分ハ前文之通來春と御見込被成候との御
 咄ニ御座候

一土岐様方浦賀表に仰越候ニハ魯西亞蝦夷地之境界御糺として江戸方御役人方差出ニ相成候處彼よりハ疾先達而參居御
 役人方出張餘程相待居候由之處御役々週々ニおよび被計ニ而境界を究魯船ハ出帆いたし候由被成御咄候

閏七月九日

青地源右衛門

閏七月十六日水戸藩會澤安書を長岡監物に寄せて府下の状況を報じ人心の懈怠士氣の不振を慨

歎して西國士氣の碎勵を望む

〔先哲遺翰〕

(子爵米田家藏)

恭呈小簡候殘炎未退候得共衰候愈々御萬祥可被成御興居奉教賀候老樵方々依舊消光仕候乍憚御省念可然下候河瀬生滝
 留寛々得而幣大慶仕候此程東奥邊遊歷不遠江戸着之上西歸之趣ニ付一書候而候起居且御疎瀆背本懐之段謝罪候儀ニ
 御座候先以御東留中ニ貴詠御投被下反復吟詠情意深長感銘難盡筆紙奉存候御發軔前俚語を裁候而鄙衷之萬一をも呈露
 仕度奉存候處津田子發途之節も恍惚ニ而草卒分手候間不能其儀引領西望候而已今便巴調兩首謹呈仕候御垂覽被下候ハ
 幸甚老境藻思別而乏相成中情を述候ニ至候而ハ千言萬語寄贈座薪之四字ニ過不申候江城之光景依然として平穩を唱
 照々如上春臺兵制聲正之命令も有之候處人心ハ一般ニ戰鬪ハ無之事と心得居候而者孫吳之兵法ニ而も所施如何と杞憂
 此事ニ御座候近來西州之如何御座候哉高明御激勵ニ而者退々神氣有之人物も出來候哉と景仰仕候情緒縷々短簡ニ難盡
 候津田其外諸有志に毎々御論難も御座候儀と奉遙想候何共俾入候へ得共御而晤之節宜御致聲被下候様奉希候他期後鴻
 候謹白

閏月十六日

尙々殘炎幾日も有御座候間爲世道何分御自玉御座候様奉祈候已上

〔折返シ上ハ書〕

長岡君

玉座下

會澤安再行

閏七月十八日日本藩史に管轄地を増加せられんことを幕府に申請す
 〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

閏七月十七日分藏御用人に差出(中略)思召寄不被爲在旨翌十八日被仰出候付請書出來同日夕御留守居代神谷矢柄持參海岸御月番牧野備前守様に持參差上候處御落手

越中守相模國御備場御用被仰付同國三浦郡鎌倉郡武藏國久良岐郡右三郡之内高堂萬四千三百石餘御預所被仰付私領同様可申付旨御沙汰ニ相成居申候右村方者多分是迄松平誠丸様御領知ニ而退々異船渡來之節水夫人夫等及不足十五歳より六十歳或者七十歳之者迄差加ニ相成候而茂引足不申候付御城下附之村方より助夫差出漸御取賄ニ相成來候程之儀ニ付數十日之間晝夜夫役ニ詰切耕作漁業等者一切相止田畑荒老幼飢餓ニ茂及候付誠丸様より御救恤ニ相成僅ニ取續候末當時ニ至候而者礮と零落ニ陷申候是迄井伊掃部頭様御預所者人數多故ニ哉水夫人夫共代合相勤候ニ付農漁共兎哉角取續候を相養何卒相應ニ加村被成下候様追々嘆願及仕候由今度越中守御預所ニ相成是迄誠丸様御領知御陣屋元海岸等最寄ニ而人戸茂多有之候櫻山村上山口村木古庭村山野根村久野谷村松平大膳大夫殿御預所ニ御引付ニ相成代ニ者是迄掃部頭様御預所鎌倉郡之内ニ而遠村ニ御引替ニ相成陣屋元より七八里相隔海岸茂相離候村方故急速之夫役ニ者相成不申其上人戸茂貳百軒餘相減申候然ニ御備場詰人數多ニ付夫遺茂相増猶更引足不申國許者山海數百里有之助夫者難相成彼是當感仕村方者彌以及困窮申候間櫻山村外四ヶ村共如元ニ御引戻御預替被成下猶久良岐郡之内ニ而別紙之通貳拾九箇村程加村を茂被仰付候様仕度石者不容易筋と奉存候得共御備場御用及差支重疊迷惑仕其上最寄之村方者遠村ニ相成候儀等類ニ歎訴仕一同人氣茂落着兼候様子ニ付格別之御評議を以可然御沙汰被成下候様有御座度奉願候右様加村等被成下候而者相應り之御方々様御預所ニ比候得者鈞合兼可申やニ候得共此節歎願之通被仰付候者御備場御用夫遺等差支不申村方に茂重疊相論引立可申と奉存候此段申上候様申付候以上(本文申請再三に及十二月廿四日)を以て管轄地を増加せられたり)

細川越中守家來

福田源兵衛

閏七月十八日

嘉永七年

一御預所増村加村願之事件ニ付伺書御預所人夫不足付而ノ上段細字

本文書付ニ左之村付茂相添差上牧野様に茂書付と一包ニ差出

武藏國久良岐郡之内

富岡村 杉田村 森三ヶ村 岡村 蔦田村 太田村 吉田新田 永田村 井土ヶ谷村 弘明寺村 中里村 引越村

最戸村 別所村 久保村 下大岡村 上大岡村 關村 田中村 雑色村 栗木村 中里村 峰村 矢部野村 氷取澤村 谷津村 坂本村 堀内村 石川村

閏七月廿四日本藩留守居青地源右衛門は今や事平和に屬したるを以て我若干兵を歸藩せしめ危機を轉せんことを浦賀奉行に進説す

安政元年

五八七

〔相州御備場御用一件〕

當時國許より罷越居候御備場詰人數取扱之儀付而ハ先日以來厚御配慮被成下誠以難有仕合奉存候右一條未だ御沙汰も無御座内猶又申上候も恐多奉存候へ共追々申上候通當手人數之儀ハ田舎者之偏情就中歳若之者共ハ猶以辨別も無之近來大勢之中間ニハ不善之儀も差起内輪之儀顯然とハ申上兼候程之心遣も御座候付而ハ此末迎も越中守初重役共も彌以案勞仕居申候右ニ付聊安心可仕筋ニも至り可申哉と私存付候儘追々之御配慮ニ奉繼輕卒ニ申上候間何分可然様御教示之程奉願候當陣屋詰之人數都合千五百人程も有之其内ニ馬廻組二手相詰居申候處右馬廻組ハ別而若者勝ニ御座候間專士氣衰エ不申様文武藝等精々相併申候得共何分於國許師範之手ニ附習練致候程ニハ無之夫而已ならず當時之處ニ而ハ先平穩第一之御取扱ニ相成居候付而ハ先ハ邊土之番兵と相心得居候形ニ而何れも及退屈自然と人氣も相忘候様成行是又不得止勢ニ付種々工夫を凝し候得共差寄安心之埒ニ至候様之見込付兼申候畢竟ハ偏固之生質殊ニ大勢之儀ニハ有之旁抑揚筋當惑仕候儀共ニ御座候依而精々勘考仕候處右若手之者共只今通差置候而ハ往々ハ彌以弱弱ニ相成物場之御用ニ不相立様成行候事ハ當然ニ而詮する所御國家之御爲ニ不相成差寄夫等之儀深懸念仕候間前文馬廻組二手之内一組上下大略百人程此節國許に差遣候様ニも御座候得ハ前ニも申上候通於國許師範々々之手ニ附け文武專一ニ相勵せ候得ハ自然と士氣も引立方今之御趣意ニも相叶強兵之儀歟と奉存候尤右一組丈之人數ハ當時江戸表に相詰居候勤番之者去夏以來異船之模様付而ハ多分ニ呼登置候間越中守出馬手外ニ差繰出來仕候見候ニ御座候間右之者共を以兼而一組相立置非常之節急速出張仕候様手當仕置候得ハ國許より相詰居候も先ハ同様之儀と奉存候將又時宜次第早速國許に早打飛脚差立候得ハ大概十日程位ニハ相達候間是又急速國許罷立道中差急候ハ、二十四五日内外ニハ此元は馳參助勢致候様兼而手當仕置可申候左候得ハ前條馬廻一組差下候而も聊備向手薄之譯ニハ至不申候意體持場邊ハ内海咽喉ニハ候得共亞墨利加杯追々渡來横濱邊迄も乘入内海之針路粗心得居候付差寄海防之見込ハ付兼申候へ共持場海岸附陸地之防禦迄ニ御座候へは廣場之ヶ所連ハ無之候付炮丸杯打懸苦戰ニおよひ候共險阻之地形も數多有之候間切所々々に引受相支候

ハ、主客之分別も有之候事故當時相詰居候三ケ一五百位之小勢ニ而も當分ハ東邊角と喰留も出來可申哉其中ニハ先日御内意申上置候通江戸表に勤番之人數引付置候方ニ御沙汰相成候而も急速ニ馳加り防戰仕候儀ニ御座候へハ是又備向ニおゐて格別懸念之儀ハ有御座候哉と竊ニ評議ニおよひ候事ニ御座候間自然思召も不被爲在候ハ、前條之通馬廻一組差下申候儀取調候様江戸表に可申遣奉存候右之趣自然ハ手許之便利より専差量候形ニも相見不束之御内意筋ニも可被思召哉と重疊心痛仕候得共畢竟當今義勇を蓄置候様との御主意を奉敬守越中守他日實戰御一大事之節精勤仕度兼而之意中を没取且者當節聊安心をも仕せ度被是難斷止右様取計可申と奉存候得ハ兼而入御聽置候人數之儀ニ付此段一應申上候自然思召も候ハ、何分無御覆藏御教示之程奉仰候事(本文何等指示なきを以て更に八月十一日書面を呈して許否を促したり)

閏七月廿四日

青地源右衛門

閏七月廿四日日本藩警備地より守兵を直に歸藩せしむるに當りては武具携帶の證書は該地在勤留守居の名を用ひされは不便甚しき所以を浦賀奉松行平伊豫守に開陳す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

御備場交代之者武具類炮器等江戸に國許に差遣候節御關所々々浦賀御番所罷通候儀別紙之通海岸御掛松平和泉守様ニ奉願候處六月十日御附札を以御差圖相濟申候右者御備場より直ニ國許に出立仕候者共之荷物船路差遣候節一旦江戸表之様ニ差遣候上現品引合證文出來船積等仕候而者往反被是甚手間相懸内輪段々難遣之次第御座候間御備場詰詰込居候者共之武具類炮器等之證文者都而所留守居名元ニ而差出候様仕度左候得者詰場ニ而直ニ現品引合證文出來同所カ船積をも仕大ニ辨利茂宜御座候家老證文又者附添之内重立候家來證文と御差圖相濟居候付附添之譯ニ御引付被下場所詰込之者共之荷物ニ限同所留守居名元之證文ニ而罷通候様御聞濟被成下候様奉願候勿論江戸表より仕出候分者家老證文差出可申候以上

閏七月

細川越中守内

青地源右衛門

安政元年

五八九

伊豫守様方之付札

青地 源右衛門様

柳 島 勇 輔
西 尾 貞 之 進

以手紙啓上仕候然者昨日御差出御座候御書付之趣取調候處當所詰御留守居御名元之御證文當御役所に御差出ニ相成候へハ御書付之通ニ而差支之儀無之候依之御達被申候尤御呼出御達し被申候姿ニ御心得可被成候則御差出之御書付返却仕候御落手可被成候此段可得貴意伊豫守被申付如此御座候以上

閏七月廿五日

閏七月廿九日本藩は浦賀奉行に對し外船入港の際組方差遣のことを申請す

〔御備場記録、相州御備場御用一件〕

御備場人數之儀平常ハ江戸定詰之者差遣置候様ニも可仕哉の段先以私共心得ニ而奉伺候處右ニ付而之段々御配慮被成下置候處右一件未タ御沙汰無御座候其内畢船何時渡來可仕哉難計此儘持場々々ハ人數差出候而之偏固之者共御趣意ハ重疊相辨居候而も其場ニ臨自然心得違之儀引起候而ハ追々御切之御教示茂御座候未重疊難相濟被是深懸念之事ニも御座候間御人少之内御難題筋之儀何共申上兼候得共先頃之御懇詞ニ奉維何卒畢船渡來之節ハ持場内ハ御組方之内被附置被下候様奉願候右ハ畢船迅速ニ乘込御役船參着不仕内異人上陸缺乏之薪水杯乞候節之取扱偏固之もの共ニ而ハ別而氣遣敷事ニ御座候間烏ヶ崎に一人觀音崎猿島に一人宛且畢船碇泊所固人數差出置候野島又ハ小柴杯之向に一人都合四人別段之御練合を以異船渡來早速被差出被下候様難重ニ茂奉願候

一番船之儀茂何時異人に應對いたし候哉難計是又偏固之者共ニ而ハ心遣茂不少候ニ付右乘組の者共ハ所柄ニ而扶持米等取置候者輕身分ニ御座候得共數十人召抱置候間御差遣之儀茂無御座候者以來者右之内より差出候様可仕候右之者共ニ御座候得者先御領主以來諸事馴込居候もの共ニ而萬端辨利之筋ニ茂有之示方等茂行届且異人に應對いたし候而も先々之儀茂能吞込居候間卒爾之儀杯茂有之間敷敷と奉存候將又御組方ハ附添用辨致し候者も右人數之内より兩三人宛位茂差出置候様仕度左候得者備手人數之儀者銘々之受場々々ハ罷出埋伏いたし居御差圖ニ應候様仕度奉存候
右之通御間濟被成下御組方被附置被下候得者御蔭を以備手一統安心仕且ハ先日御内意申上置候江戸定詰之者差遣置候一條縱令類推等之御差障ニ而御沙汰ニ難被及此儘人數差置候而も聊御心遣之儀茂有御座候間敷且越中守初重役共ニおるても彌以安心仕儀茂御座候間何分ニも宜敷奉希候事

閏七月廿九日

青地 源右衛門

(本文ハ向ニ差出せるものと混するの恐ありといふを以先つ辻茂右衛門(浦賀支配組頭)手許に留置かる)

八月十一日我藩は浦賀奉行に對し更に警備地人員の變更に關する内申の許否を促す

〔御備場記録、相州御備場御用一件〕

當時國許より罷越居候御備場詰人數練之儀ニ付而先月二十四日松平伊豫守様に御内意申上置候ニ付其後御模様伺とし一兩度罷出候處右ハ土岐豐前守様に被仰遣置候由被仰聞候付不遠江戸表より之御左右可有御座候と奉待居中候然處右一條急ニ不奉伺候而ハ内輪稜々難遣仕候内差寄當時江戸詰之内控之人數として繫留置候者共多分ニ御座候間當月中ニハ此後之人練是非治定不仕候而者難去差障之儀多端ニ御座候間猶御模様奉伺早打申遣候様江戸表重役共より此節手附之者陣屋元ニ差遣委細申越候處伊豫守様に私より度々奉伺候儀御差合中彼是重疊失敬奉恐入候間近頃御配慮之儀何共奉願兼候得共右御内意申上置候一條御兩所様より御内々御伺取被成下候様偏奉願候御間濟之儀御急決被成下候得之無此上儀御座候得共江戸表之御模様急ニ之御沙汰無御座候見込ニ茂御座候ハ、其程ニ應し別途ニ人數練之儀國元ニ及取遣不申候而ハ此許限治定難仕儀茂右之左候得ハ遠國之往返日數茂相懸り候付願日速ニ取懸當秋中ニ之夫々治定不仕候而者内實差支候儀茂御座候間江戸より之御模様未タ相分り不申候ハ、責而ハ御沙汰之頃合寬急之御模様迄ニ而も組

安政元年

拜聽仕度奉存候何分右之御言を以可然様御周旋之程奉願候右者手許之便利を差量自由々間敷奉存候得共御備場詰人數交代等之儀付而八種々難澁之儀も御座候間差迫候而江戸表より重役手附之者態々此節差越申候間聊之御模様ニ而茂急ニ相分候様御執成之程幾重ニ茂奉希候事

八月十一日浦賀奉行松平伊豫守は我藩警衛地詰兵員減少の件につき異儀なき旨の内意を傳ふ

〔相州御備場御用一件〕

御備場之儀付而浦賀御奉行松平伊豫守様は六月廿六日源右衛門平之助一同參上御逢相願海防其外御配慮之次第具ニ申上候末御國許被差遣置候御人數ハ江戸表に引付被置兼而ハ江戸定詰之内に相應ニ差遣置候様ニ茂可仕哉之段委細御内話申上右書取差上置候處巨細御承知段々御取調之上七月朔日江戸に御催促被成置候由之處昨十一日伊豫守様御呼出ニ付源右衛門參上仕候處前條書取之趣ニ付一昨十日夕江戸表御同役土岐豐前守様御左右有之候由ニ而右御備場詰御人數御差繰之儀御内意申上候通御存寄無之旨被仰聞候然處當時御陣屋之御人數不殘江戸表に引付被置候而ハ差寄被差置御屋敷等御難澁之筋茂可有之哉ニ付先當時之御時勢ニ而ハ右之内見計御差略有之候而茂可然歟尤表向御老中様に御願立ニ相成候得者右御願書ハ是非浦賀表に御下ニ相成可申左候へハ御備向之儀ニ茂有之表向ニ相成候而ハ御法之通猶更手厚備置候様御答被成候外無之夫ニ而ハ表向之論ニ而御自分之御役前ハ一通り相立候得共左候而ハ當時平穩之御取扱も可成丈々御國力を被蓄置萬一實戰御大事之時ニ至御精勤を被盡候様有之度追々御内話申上置候趣逐一被成御取扱候付御自分丈御働不被成候而ハ御勤役之詮茂無之事ニ付度々江戸表に御取遣別段御心配ニ相成前文之通申來候付而ハ御人練之儀ハ御安心ニ至候様何時取扱候分茂不苦段被仰聞候依之源右衛門申上候之先日心得ニ而御番方一組差下度趣御内々申上置候一條茂今日之御沙汰之趣ニ御座候得ハ直様取調候而茂宜可有御座哉と相伺候處此節一條相濟候上ハ勿論何そ御存寄茂無之急速ニ取調候様尤百人計之御差略ニ而ハ御大國之御人練之儀候間各別之儀茂有之間敷歟何様江戸表に引付被置候様さへ相立候得ハ其餘人數増減等ハ相含如何様共見込ニ取計候而茂可然々様ニ申聞候得共

自然表向ニ御願立ニ相成御差圖濟之上ならてハ御人數之差略難相成杯と申様成心遣可有之哉茂難計候付右等之綾得斗御重役方に被談置決而懸念無之様との儀茂精々被仰聞候此節之一件御内話申上通御内決ニ相成候而ハ於御自分様茂御太慶且御安心被成候由惣辨ハ御人數茂多分ニ御國許に引付被置候而茂宜候得共左様ニハ參り兼可申御大家之御動向ニ候得ハ相應ニ御手當不被成置候而ハ難相成乍然此元異變之儀茂候ハ、急速御國出立ニ相成候得ハ御間ニ合候儀ハ頃日差出置候御内話書取之通ニ而異論茂無之段被仰聞候將又右一件ハ成丈至密ニ取扱外々に之弊不申様心得可申若公邊御役方或ハ御相備之向方聞付承合無據節ハ浦賀御奉行様御内談之上取調候段返答いたし不苦當分茂被仰聞其外御内話之内ニハ前後段々御懇切之御内沙汰茂有之候付比節之一件偏ニ御配慮を以相整千萬難有奉存候段御請申上候直ニ江戸表に申遣候様可仕段相應之御挨拶申上置候事

八月十一日

青地 源右衛門
吉田 平之助

〔全書〕

今十二日伊豫寺様并組頭衆兩人に不取敢自分勤之爲御禮敬太郎を源右衛門同道いたし御奉行所に罷出伊豫守様御用人を以此日御内沙汰之趣ト通御禮申述敬太郎儀ハ初而參上仕候付御逢之儀茂相願候而伊豫寺様に兩人一同厚御禮御直ニ申上候末右之趣早速江戸表に申向候付而ハ越中守初重役共ニ茂難有安心仕可申との儀を茂懇々申上候處定府詰之一條思召通ニ相成御太慶被成候得共一旦ハ餘程御手茂入候由差寄御同役御取遣御書通ニ而之御面談と違其上御備場御請持繩年數茂相立不申先ハ御請持即下之御願立ニ付而ハ御自分御取扱自然ハ依頼ニ私情ニ牽き候との嫌疑御斟酌等茂有之歟ニ付而ハ精々御主意貫キ候様數度再偏御取遣ニ相成たる由畢竟偏固之御人數萬一兵端を開候而ハ御家ハ勿論天下之御爲ニ不相成又自然之節者偏固ニ有ルガ宜敷ニ付平穩中ハ定府都會ニ馴を候者氣遣薄との事至極尤成ル申立ニ有之尤夫茂表向之御願立候得之從是茂是非役前を以御備場御人數ハ一人ニ而茂無減少嚴重ニ御手當可有之又偏固之心遣ハ

安政元年

御家臣之事ニ而重役方々抑揚被行届候様御差揮可有之と御答申外ハ無之左候而ハ青表紙味口無之御咄合ニ相成拙者杯
 役向者御備場御請持之御方々よりハ先ハ向フ差シニ致し候氣味ニ而平穩之時節ハ夫ニ而茂相濟候へ共非常之砌ハ互ニ
 無腹臆咄合不申而ハ御奉公之實意ニ叶不申故此節之儀初發ハ無取飾内輪之儀双方ハ打出咄合候儀源右衛門委細承知通
 之事ニ而第一御家之儀ハ書面ニ茂相見候通太守様他日實戰御一大事之節御精勤を被盡候儀兼而御頼切之御相手ニ有之
 候得ハ平穩中ハ御國力共成丈々著不被置候而ハ難相成依而今度及御挨拶候上ハ御人繰之儀馬廻一組被差下候儀共無懸
 念御重役方取調ニ相成候様ニ茂被仰聞候付越中守儀ハ列藩ニ申内別段之家筋ニ而兼々相應之御奉公を茂申上聊御高恩
 を奉報度覺悟勿論ニ御座候得ハ素より平穩中たり共國力を盡し相勤不申而ハ難叶節ニ茂御座候へ共左候而ハ他日斷然
 御打拂之御時節ニ至何之御用ニ茂相立不申様成行可申哉と深懸念仕又偏固之文字ハ他藩之人ニ當候得ハ謙退之意味茂
 含居可申候得共當時陣屋詰之者ともハ偏固之文字を下し全相當仕有様謙退之譯ニ而無之旁以重役共懸念之餘り御配慮
 筋奉願たる儀御座候處内輪之事情御汲取被成下深難有仕合奉存候敬太郎儀ハ今日御日通申上御内沙汰之趣御直ニ奉致
 承候段ハ國元家老共に茂早速取遣可仕奉存候是又いつま茂如何計難有可奉存候將又馬廻組差下候儀五切八十切ニ茂致
 し成丈々目立不申様竊ニ出立仕せ可申含之儀を茂申上候處江戸表に御人數引付候儀茂是以目立不申様ニと被仰聞左無
 之候而ハ飛驒守殿杯類役よりハ究而問合可申併内付札、飛驒殿と有之候は分と申内重役方迷惑ニ成り候譯ハ曾以無之右
 一條付而自然申分有之節ハ同役豐前守と兩人ニ而引請申開い、候間其段ハ無懸念様ニと吳々被仰聞候事
 右畢而組頭本多喜八郎様に罷出伊豫守様より定府入替一條御内沙汰ニ相成候儀畢竟御執成故と奉存御禮申上候段是又
 兩人一同申述候處伊豫守及ヒ御沙汰之趣全老中方に伺濟之上ならてハ手切ニハ右様御答ハ出來兼候筋合ニ付御安心ニ
 て御人數御差操取計可有之との御挨拶有之候事
 但辻様ニハ御不快中ニ付御用人迄申置引取候事
 八月十一日
 高 本 敬 太 郎

青 池 源 右 衛 門

八月十二日本藩相州警備地詰兵員減少につき其交代等に關する一般方略を定む

〔相州御備場御用一件〕

御備場詰御人數減方一件浦賀御奉行松平伊豫守様御聞濟相成候付交代等之御取扱左之通
 一長岡銚太郎組共可被差下哉之事
 一御物頭組共片手可被差下哉之事
 但人柄者左右手之分有之候間三淵志津摩殿見込次第可被仰付と奉存候
 一財津勝之助池部彌一郎門弟共可被差下哉之事
 但十石旗山兩所之御臺場御末家様御請持相成候付二々師役不用ニ付先着より被差下候方と奉存候尤去年來出來之御
 筒村井流西洋流専ラニ而御筒臺共未タ手殘有之試打茂相濟不申候付後藤尉右衛門勝之助彌一郎庄林曾太郎庄村助右
 衛門儀之暫御留人可被仰付哉
 付札 勝之助門人者御側手其外定府等ニ茂功熟之面々有之候付尉右衛門迄被留置可然見込ニ御座候
 右三稜者御國に無御取遣仰山ニ無之様ホツノ被差下候而子細有之間敷候事
 一三淵志津摩殿
 一松山權右衛門組共
 一殘之御物頭片手組共
 一志賀何右衛門池邊次郎助大島久平門弟共
 右者御國許御人數着次第交代可被仰付候事
 御備場詰として御國許被差登候御人數左之通

一御中小姓頭一人

但人柄之儀御自筆狀を以可被仰向と奉存候

一御物頭四人

但江戸詰同様いつま之御備組より被召仕候而茂不苦候

一御中小姓貳拾人程

但異船渡來いたし候而茂檢使船斥候番船之外重士ハ不被差出御陣屋に埋伏いたし居萬一開兵端候節御差圖ニ應出張いゝし候迄之儀ニ而御座候間兼而ハ無用之御人數ニ御座候得共二十人程ハ詰込不被仰付候而ハ相濟中間敷と本文之通御座候

一大筒手輕輩在御家人等より百三拾人程外ニ爲引廻代見等より一ト師役一人宛

但御臺場四ヶ所ニ大炮等三拾挺居エ付有之候付一挺五人懸ニ仕候得ハ百五拾人ニ相當候得共右之内ニハ二三百目之小筒茂取交ニ相成候付本文之通御座候

一外様足輕八拾人

但此節登之御物頭銘々之組引連ニ不及江戸詰込之内より被召仕一年又ハ半年代と賦被仰付江戸詰と振替之御仕法ニ被仰付度奉存候

右者用意濟次第御備場詰として可被差登候事

江戸定詰之内より御備場詰被仰付分左之通

一御物頭列一人

但異船渡來碇泊ヶ所に檢使として被差出副士平士一人其外水主差配舟手組乗組

一平士拾七人程

但異船渡來之節斥候船貳艘番船五艘一人宛乗組其外水主差配茂乗組御臺場に茂一人宛被差出番船之晝夜交代ニ付本文之通御座候

右二艘之公義御役人衆浦賀與力同心等に應接之爲ニ詰方等被仰付候事

但人柄之無役或ハ御廣敷且無足等より被召仕先ツ半年代又ハ一年詰ニ茂可被仰付哉

一江戸表に相詰居候勤番之者去夏以來異船之模様付而ハ多分ニ呼登置候間ヶ様々々々青地源右衛門を差出置候書取之通御座候間江戸表に引付之御人數萬々一御奉行様を御尋茂有之候ハ、右之趣を以程能被及御返答候而差障聊相見不申此節之御演達之趣ニ而之右様之御問合無之ものと相見申候得共誠之用心ニ調置申候事

八月十二日

以上

機 密 間

八月廿八日米船一艘琉球に來る

〔癸丑以降秘録〕

八月廿八日

琉球へ亞船一艘來薪水乞受

九月朔日本藩浦賀留守居助勤吉田平之助相州警備人員省減につき其補充方法に關する意見書を提出す

〔御備場記録〕

一左之書付御奉行に相達候九月朔日

御内意之覺

今度御備手省減被仰付候付而ハ御物頭片手茂被差下候御模様之由左候へハ浦賀御境目並野島表等出張之御固人數切詰

安 政 元 年

五九七

ニ相成此内ノ斥候番船乗組之足輕被差出候而之陸手御固之方必至度差支候由ニ付此節被差下候足輕之内四拾人程被殘置候歟又之別段定詰足輕之内ニ而茂詰込不被仰付候而ハ當前御人數繰差支申候處左候而ハ餘計之御出方ニ茂相替々此節柄之儀ニ付右足輕之場ニ所柄船手組御船頭水主差配之内を被召仕候ハ、寢と無御出方御取賄出來可申哉乍恐見込之趣左之通

一足輕登人ニ付旅詰被仰付候得之凡拾兩程別途御出方ニ相成候由ニ付都合四拾人ニ而一ヶ年四百兩程
本行番船拾艘御手當之儀ニ之先頃浦賀與力申談相決居候付一艘ニ付足輕二人完之乗組ニハ交代密組共ニ都合四十人之無ク而相濟不申候事

一船手組列ニ相成候得之下地貳人扶持被下置候事ニ付川越様御見合ニ而異船渡來之節御賄被下置出役日數應追而金子五拾疋或ハ百疋宛之御心付有之候迄ニ而別段御出方迎之無之由仍御先規より過分ニ見込大略五十日之出役ニハ登人三百
本文船手組御船頭水主差配ともニ御人數出舟之諸手配相濟申候ハ陸之方ニ之各別諸手數等も無之候間其儘舟乗込海陸共ニ差障之筋も有之間敷歟奉存候事

疋宛被下置候而も全四拾人之御心附三拾兩ニ而相濟可申候間一ヶ年之差引三百七拾兩程之御出方減ニ相成申候若又異船渡來不致候得之金四百兩宛之減ニ相見地場ニ而之足輕及船手組列茂同様貳人扶持之持懸ニ而出役之節も等敷御賄之被下候事ニ付右御心付之外聊雜費も掛り不申殊ニ所柄案内之者共ニ而却而御用辨ニ茂相成候上異人應接も追々馴込輕卒之心遣も薄當今之御趣意ニ茂相叶可申哉ニ付旁右之通御省略被仰付候而之何程ニ可有御座哉奉存候左候得之番置拾艘ニ貳拾人此交代乗組貳拾人都合四拾人ニ士席定府詰被差越候内ハ引廻登人宛壹艘ニ乗組ニ相成候得之改メ浦賀表伺等ニも及不申御手數も相減被是簡易無造作ニ相濟可申哉奉存候此段不圖御内意仕候條宜敷被成御參談可被下候以上

嘉永七年八月

吉田平之助

九月八日米船流球を退く

〔癸丑以降秘録〕

九月八日

前條(八月廿八日)亞船出帆

九月十八日幕府吉田寅次郎の罪を斷して其藩に囚へ佐久間修理を松代に銅す

〔神庫文書地廿印密書輯録〕

申渡

松平大膳大夫家來

杉百合之助次男ニ而

厄介致し置候

浪人

吉田寅次郎

御目付井戸對馬守 立合
鶴殿民部少輔

其方儀近年異國船所々に渡來致候處元主人方勤中養家之兵學師範之家筋ニ付別而長州海防之儀を苦心致し佐久間修理方へ入門西洋學炮術を茂修業致し其後浪人之身分ニ相成候へ共兼々御爲筋之儀存量且之舊主之恩儀も有之旁非常之功を可立心懸候處去夏中以來異國之軍艦近海に渡來致し候趣及承深痛心之餘西洋に渡風教軍備等悉研究可致し修理と茂及議論候處當今之形勢彼レを知を急務ニて間諜細作を用候外良策無之候得共重キ御國禁ニ付官許之有之間敷自然漂流之弊ニ致成事情探索之上立歸候ハ、專御國之御爲ニ可相成旨申聞兼々内存し符合致し頻ニ西洋周遊之念指起去秋長崎に渡來之魯西亞船に身分を託候歟又之漁船を雇渡海可致し九州筋遊歴之積ニて修理に暇乞ニ罷越候處其方

安政元年

五九九

胸間を察送別之詩作を贈志を通し候付彌發憤致し長崎表に立越候へ共一旦退帆後にて便を不得空敷歸府致し候後浦賀表へ亞墨利加船渡來神奈川沖ニ碇泊罷在退帆可致趣及承宿志を可達存窮瀧木松太郎事重之助儀茂同志ニ候連立横濱村へ罷越候處修理主人眞田信濃守應接所警衛被 仰付修理儀茂人數ニ加り出張致し居候間通辯之由漢文にて認置候書翰草稿に添削を乞重之助供々周旋致し候へ共異船へ可近寄手段無之其内下田湊へ相廻り候ニ付同所へ罷越異人上陸を見受右書翰ト別啓之策を投置夜中竊ニ傳馬船をもつて重之助一同異船へ乗込外國同伴相頼候へ共不致承引被送戻候儀共一途ニ 御國之 御爲を存仕成候旨之中立候へ共右躰重キ御國禁を犯し候段不届ニ付父杉百合之助へ引渡於在所盤居申付ル

浪人

瀧木松太郎ト中立候

松平大膳大夫足輕ニテ

欠落致し候

重之助

其方儀漢學並兵學炮術修業ニ由り近年異國船所々へ渡來ニ付海岸防禦等 御爲筋之儀を心掛吉田寅次郎ト議論およひ候處同人之和漢軍學を心掛之上佐久間修理門下ニ相成西洋學炮術を茂修業致し去夏以來異國之軍艦近海へ渡來ニ由り候間海防策等修理方教諭請候次第具ニ承實々當今之形勢被レを知ルニ止り候儀ト存窮間諜細作トして西洋取扱風教軍備等悉研究致し立戻候ハ、 御國之 御爲可相成候へ共主家を憚且之夫トホク親共にも暇乞可致ト欠落致し候於旅中異國船浦賀表へ再渡ニ由り候趣及承候間動靜を考手段を以可乘組ト立戻身分押隠島山新三郎方ニ寄宿致し寅次郎に内存相話候處同志ニ候連供々横濱村に罷越周旋致し候處修理主人眞田信濃守應接所警衛被 仰付修理儀人數ニ加り出張致し居候間通辯之由漢文之書翰草稿一覽相頼候處添削いたし吳候後異船に可近寄策を

乞候へ共手段無之内下田湊へ相廻り候ニ付同所へ罷越上陸之異人へ書翰並別啓之策を投置夜中竊ニ異船に乘込外國同伴相頼候へ共不致承引被送戻候儀共一途ニ 御國之 御爲を存仕成候旨之中立候へ共右躰重キ御國禁を犯し候段不届ニ付松平大膳大夫家來へ引渡於在所盤居申付ル

眞田信濃守家來

佐久間修理

其方儀和漢兵學西洋學炮術等師範致し罷在近年西洋之風教國力等漸く盛大ニ相成加之蒸氣船を以走り候迅速之船出來候趣先年書籍之上ニ而發明致し自而西洋も隣候道理ニテ殊ニ異國船屢渡來致候間万一本邦を窺察致し近海に軍艦を進メ候義も可有之ト業躰へ對し實用之場合專ニ御爲を存海岸防禦者勿論必勝之籌策を考日夜苦心挫肺肝候處戰は彼レを知 己を知ト申内當今の形勢は彼を知ニ止ル儀ト研究致し候折柄門人吉田寅次郎儀も其方同様海防策之内を平常痛心致し外國へ渡間諜細作を用ひ度旨議論いたし元來同志之申分ニ而其器ニ當り候ものニ候得共其國に渡候義ト重キ 御國禁ニ付官許之有之間敷自然漂流之躰ニ致し成手段を以西洋に渡事情探索致し候ハ、歸來之功も可相立旨申聞其後同人儀九州筋遊歴トして發足致し候由ニ而暇乞ニ罷越右之渡洋之企ト同人胸中を察し其意を察送別之詩作を送候得共右手段者不被行立歸り候後當亞墨利加船浦賀表に渡來致し主人信濃守儀横濱表應接所警衛 被仰付候付其方儀も軍儀役として同所に出張致し候砌猥ニ異船に近寄間敷旨別段被 仰出茂有之候處水夫ニ紛レ異船に可近寄ト吉村一郎に相頼或之吉田寅次郎儀重之助供々宿陣へ尋參異船に乘込ニ通辯之由め投し候漢文之書翰草稿を差出し候連添剛致し遣殊寅次郎儀異船に寄候策及索候節是又吉村一郎へ頼ミ文通認メ遣終ニ寅次郎外登人茂下田表に相廻り同所ニおゐて上陸之異人へ右書翰を投し置夜中竊ニ異船に乘込外國同伴相頼候得共不致承引被送戻候次第ニ至候段専ら 御國之 御爲を存量仕成候旨ハ申立候得共元來同志ニ而重キ 御國禁を犯し候段不届ニ付眞田信濃守家來に引渡於在所盤居申付ル

交替寄合

溝口又十郎家來

鳥山新三郎

其方儀遊來松太郎事重之助之欠落者ニ有之其儀之不存候共得身元茂不相糺門下ニ指加へ寄宿爲致置既吉田寅次郎申合 御國禁を犯し候仕儀ニ至候段右始末不埒ニ付押込申付ル

浦賀奉行組同心

吉村一郎

其方儀當春中異國船渡來ニ付神奈川宿へ番船乗組出役ニシ居候處旅宿に佐久間修理儀訪候ニ付面會ニシ候處異船に近寄視留候手段頼受嚴敷相斷候義氣之毒ニ存同人之惣髮異躰ニ付右ニ而之難出來旨及斷候後吉田寅次郎外登人儀修理方之手紙を持罷越同様相頼候節浦賀表に交代立戻り掛ケニ付其方知邊之由申三郎兵衛方に參可承合旨申聞候段其場之躰を不失ニ申遣候旨を以^{本ノマ}申右始末不埒ニ付押込申付ル

齋藤嘉兵衛御代官所

武州播磨郡

神奈川宿

百姓 三郎 兵衛

其方儀異國船渡來神奈川沖淀泊中海陸共都而見物ケ間敷儀之無用可致御備場之御用相心得候向方視留船差出候も異船に之乗寄申聞敷旨御觸之趣乍相辨吉田寅次郎外登人儀吉村一郎知邊之由ニ而罷越し異船に近寄視留度旨申聞候迎便船茂有之候ハ、何レも敷取計可申旨挨拶およひ候段不埒ニ付手鎖申付ル
右申渡趣證文申付ル

松平大膳大夫家來

杉百合之助在所ニ罷在候ニ付

名代

豐田又右衛門

同家來

武弘太兵衛

真田信濃守家來

津田轉

溝口又十郎家來

大津源五右衛門

浦賀奉行組同心

濱口誠一郎

齋藤嘉兵衛手代

永井雅次郎

右宿 役 人

右者阿部伊勢守殿依御差圖申渡候間得其意主人並其筋に可申聞
寅次郎者杉百合之助に重之助者武弘太兵衛に修理者津田轉に引渡遣ス

右之通申渡間其旨可存

寅 九月十八日

安 政 元 年

九月十八日露國水師提督布恬廷突如大坂天保山沖に渡來す依て在坂の諸藩兵各其持口を警衛す
〔相州御備場御用一件〕

當月十六日紀州沖に異船五艘計相見段々乘込内壹艘十八日天保山沖に乘込候山河村對馬様内より此許御留守居方に爲
知來候類船も究而天保山邊に乘付致上陸中間敷ものも無之萬一大坂町中横行等いたし候時ニ茂至候ハ、御藏屋敷御
手薄固之御人數等彼是御心配も可有之候處差寄其御許請込之人數至而少有之幸相州御備場詰之内大筒手ニ夕師役分七
拾五六人七切計ニ被差立全日までニ而何も出立相濟候管御座候間右之内御見計相應之御人數暫懸留可被置哉尤去年
來江戸近海ニ追々異船渡來付而 公邊御取扱振別而平穩ニ有之且浦賀御奉所様より容易開兵端候様之御取成無之との
御内話も有之旁御備詰茂先ハ番兵ト申ものニ付右御奉行様は御内意被信入追々と御備場詰御人減被仰付管ニ而此節茂
大筒手交代無シニ被差下程之儀ニ御座候是迄之形勢開兵端を候氣遣ハ無之候付於其御地亂妨弊之儀いふし候様ふる御
取扱決而無之儀ト相考候得共爲御含申達候御大筒ふとハ別而若手之而々多御備場詰中種々心遣絶不申其御地相滞候
儀重疊不好事ニ而藏人殿甚々被致掛念候間其御地格別御氣遣も無之態々大筒手之内懸留候ニ不及御見込も候ハ、一刻
茂被差下候様何々ニも現實之模様ニ應夫々可有御取計旨候此段爲可申達東海四日限之雇飛脚差立候事ニ御座候以上

江戸詰副役御奉行也

九月廿三日

荒木 甚四郎

大坂詰御目附也

松崎 九郎 平殿

猶々若大筒之内御懸留ニ茂相成候ハ、御門出入等之縮り方屹ト被附置候様此段茂可申達旨候以上

委曲被仰趣致承知然處右ニ付去ル廿一日雇飛脚ヲ以申達置候通ニ而最早夫々御承知ニ相成可申其後も未タ致滞船
居候得共惣躰平穩ニ而別段申達候程之儀茂無之尤日々傳馬船を以沖手乘廻間ニ之測量もいたし候様子ニ相見候得共

町觸之通ニ而之會而心遣之儀も無之哉ニ相見申候尤跡船兩三艘茂追々渡來いたし候哉之風説茂有之候得共虚實相分
不申候併御用心ト相見京都大坂共御固之人數ハ御手厚被 仰付御模様ニ而天保山近邊之海手諸家様御人數追々出張
此方様御受持場御人數茂其儘被差出置候儀ニ御座候依而大筒手之而々ニ切ハ追々着坂之内意申出候趣有之候得共
當時之模様懸留ニ之および不申見込ニ付近々乗船致達候事ニ御座候猶様子も有之候ハ、追々可申達幸今日御國許よ
り之雇飛脚被差通候付此段御報旁申達候以上

九月廿八日

松崎 九郎 平

荒木 惠四郎 殿

〔嘉永七年機密間日記〕

大坂に異國船渡來候付而御人數被差出候儀立花様より茂御届有之候ニ付此方様より茂今夕左之通御届仕候
海岸御懸り

御月番様は

去十八日大坂天保山沖に異國船渡來端船ニ而安治川筋に乘入候間諸家藏屋敷有合人數市岡新田に差出候様町御奉行川
村對馬守様より御達之趣松平遠江守様岡部美濃守様御家來より通達有之候依之越中守家來大坂詰有合之人數炮器等用
意早速出張仕依御差圖島屋新田之内海邊相固候様彼地詰家來之者々申越候此段御届申上候以上

細川越中守家來

九月廿六日

清田 新兵衛

〔嘉永六年以後
異國船渡來一件〕

一 九月末大坂表異船一雙渡來魯西亞船ニ而余程大船之由泉州之方乘込直ニ兵庫前に船繋り余程内も知り居候様相見夫

安政元年

六〇五

大坂川口近く乗寄天保山に上りハッテイラニ而川口乗候處ち川四丁目ニ而乗留メ彼方書翰杯差出候様子ニ候へとも此元ニ而ハ可受取所ニ無之段申噓し不取上候ニ付其儘十月五日比出帆致し浦賀廻との諷評も有之候へとも虚説ト相見其後何之様子も無之候紙細工之火打袋杯銀錢一枚ニカヘ利方ニ而引付る氣色ふと申大黃余計ニ積込居出帆之節ハ荷足余程輕ク爲相成とも諷評諸家御屋敷方海岸に御人數出張此方様ニハ詰合之御目付御勘定頭杯少之人數をつゑふるし幕張は余程廣ク致有之候由町家ニハ二三日以前方異船來ル模様ニ付騒動不致様御觸も有之公義ニハ疾方相知レ居爲申之之諷評近國御大名方も人數出張赤石邊ハ甲冑ニ而出張候を下りるけ之御勘定物書何某現在見物爲致由

九月十九日本藩は東海道程ヶ谷驛より大津村に至る宿驛人馬使用の制限判然せざるを以て幕府勘定奉行石河土佐守に稟申する所あり

〔相模國御備御用ニ付諸御願御同等〕

左之伺書御勘定奉行石河土佐守様御用ニ差出候處付札之通御差圖有之候由ニ而九月廿五日御留守居方物書見せ候付

控留置賜仕置者御勘定奉行御請之由

越中守相州御備場陣屋に追々家來并飛脚之者差遣候節宿々繼人馬を以旅行仕候儀御座候處東海道程ヶ谷宿迄之兼而御定之人馬高相心得居申候得共脇往還之振合相心得不申依之右宿より金澤通陣屋大津村迄之人馬御定高爲心得奉伺候以上

細川越中守内

田中八郎兵衛

九月十九日

御差圖之御付札

書面脇往還人馬高之儀家中一日十三人十三疋ト可被心得候

寅九月

九月廿一日日本藩政府は在府老官に對し曩に相州警衛の任に當りし長岡監物以下に特別心附給與に關する件を通議す

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候去冬御備場詰として被差登候而々者都而戰爭之用意ニ而身代高ニ應餘計之人數引連ニ相成候處無役着座杯千石丈ケ之振廻ニ而之難澁之様子内意之向茂有之候付精々及僉議せ候處規矩無シニ而者見込茂付兼候得共此節之儀之治亂混シ候而之儀ニ而前條内意之趣意茂尤之儀ニ付當時之御軍役半役と申所ニ據持前之御知行半高を旅振廻ニして其内身前當前引殘分茂御足米被下置候得之別紙之通之金高ニ相當り其分を格別御心附と申名目ニ而可被下置候と申談候尤無役着座右之通被 仰付候得ハ監物方ニ茂差障是又三百人余之人數引率有之諸雜費八千兩計ニ茂及候様子ニ付則別紙之通及僉議候條御序を以可奉入 御内聽ニ茂哉と差進申候右之外三淵杯茂同様ニ之候得共御役前ニ而三千石之振廻被 仰付半知より之越し居其外御番頭も持前丈ケ之差引被下置候付別紙三人之外之願出ニ相成候共難及僉議管御座候御報相達候迄之達見合置候間急便ニ被仰越候様存候以上

九月廿一日

御中老連名
御家老中

溝口藏人殿

被仰越通委細致承知奉親 御内慮候處不被爲在 思召候付別紙御人數被差登候之誠ニ臨時非常之儀ニ付別紙外之而々たり共格別及難澁候ハ、相應ニ取扱候様ニとの儀茂被爲在 御沙汰候事ニ御座候以上

十月廿一日

覺

一金千兩

安政元年

長岡監物

六〇七

但御知行高壹萬五千石半役之積を以七千五百石之内四千五百石分ハ御足米被渡下候殘三千石丈ケ之格別御心附渡
付札、本行之外ニ四千五百石分御足米ニ被直下其内カ一式造用引残り金ニして五百三拾兩余此節被渡下管候
一同四百五拾兩

但御知行高五千石半役之積を以貳千五百石之内千石分ハ御足米被渡下候残り千五百石丈ケ之格別御心附渡
付札、本行之外ニ勘解由伊織兩人共千石御足米ニ被直下其内カ一式造用引残り金ニして貳百貳拾兩余充此節被渡下
管候

一同百兩
但御知行高貳千七百石半役之積を以千三百五拾石之内千石分ハ御足米被渡下候殘三百五拾石丈ケ之格別御心附渡
右之通御座候以上

九月

九月廿五日本藩警備地の守兵は暫く中小姓以下を用ふる旨を番頭物頭に示達す

〔相州御備場御用一件〕

長岡 銓太郎 組共
藪 助 作
増田 十郎 左衛門
右組 足輕 共
尾藤 貞右衛門
小篠 彦右衛門

右者御備場御人練御仕法持被仰付候管ニ付用意次第御國許に被差下候條此段可被達候以上

九月廿五日

三淵 志津摩殿

溝口 藏人

九月廿五日本藩政府は砲術師範の相州在番を廢し其門弟中各二名をして砲手を率ゐて守備に任せしむ

〔相州御備場御用一件〕

牧新兵衛に

杉谷 十左衛門

武藤 猪左衛門

右者相州御備場詰として被差越其方門弟引廻被仰付候
條早々用意相仕舞候様其方より可有通達候以上

九月廿五日

右同斷同日

水野 仙太郎

平野新四郎に

中垣 久之九

萬之進弟

平野 軍次郎

畑尾章左衛門に

作藏養子

森 小右衛門

新之允弟

淺香 庄右衛門

右同斷同日

中村五郎右衛門に

緒方 久左衛門

權内嫡子

沼田 勝太郎

内尾源八に

梶野 四郎助

傳右衛門嫡子

同日

右同斷引廻被仰付候

右同斷同日

安政元年

九月廿七日米船また琉球に来る

〔癸丑以降秘録〕

九月廿七日

又々一雙(船)着諸國山水竹木見分之爲香港へ無人島へ渡琉球へ着之由十日程日本へ渡海夫々香港へ差越八ヶ月後本國船等合三艘又々來候上日本下田箱館之間へ可渡來段申出候由

九月某日幕府は長崎箱館に英船の寄港を許したる旨を達す

〔相州御備場御用一件、尊攘錄皇武令〕

大目 付に

長崎表渡來之英吉利船御國地に船繋之儀願出候尤御國法者堅可相守趣申立候依之向後長崎並箱館之兩港に船を寄薪水食料等船中圖乏之品々相渡候積御差許相成去月廿九日彼地不殘退帆いたし候此段爲心得向々に可被達候

九月

十月朔日本藩政府は警備地在番の郷士中足輕班以下は在藩中其班を諸役人段に進むる旨を在府老臣に通報す

〔相州御備場御用一件〕

(十月朔日附在藩老臣連名在府滿口藏人宛書狀向々書)

足輕段以下ハ詰中諸役人段之場ニ而被召仕候旨及達候以上

十月朔日本藩政府は相州警備地よりの歸還兵員を以て一時露船の警衛に充つへきことにつき在

坂目附松崎九郎平に通牒す

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候其御地安治川沖に異國船渡來付而之御奉行様も御沙汰有之有合御人數七十人程川口に被差出候由萬事不調ニ而種々御心配可有之就而之今度相州御備場詰大筒手等被差下候面々通坂之御直ニ御懸留之御申談可有之哉左候ハ、一弊之都合之可宜候得共持附之様ニ共成行候而之重疊御迷惑之譯ニ有之上御藏屋敷之儀候得之御人數不足且少々不調等者何方に押出候而茂御外聞杯ニ係り候筋ニ而茂無之候間旁向後共願言有合之人數ニ而御取賄有之大筒手等之其儘被差下候様有之度夫込右之通ニ而之現實之處如何躰ニ茂御取賄出來兼候様之儀可有之候ハ、臨時之御取扱可有之候得共先右之趣意を以御心配有之候様可申達旨候以上

十月朔日

松崎九郎平殿

御奉行中

向々萬々一異船が及爾訪實職ニ懸候等ニ茂候ハ、日本之爲ニ付幸通懸候大筒手等早速被差出候様申迄茂無之候得共當時之形勢ニ而ハ勿論右様之譯ニ無之願斗之番兵ニ而徒ニ國力を被費候迄之儀ニ付旁前條之通申達候様との旨御座候

被仰越御端書之趣共委細致承知御本文大筒手懸留等之儀ニ付而ハ先便荒木甚四郎殿が別紙寫相添置候通御申越ニ相成候處此元現實之模様ハ先月廿八日雇差立申進候通ニ而其後異國船滞船も至而平穩ニ有之大筒手下り懸之面々暫ク相滞御人數ニ差加度段内意之候も有之候得共其儀ニ及不申見込ニ付追々出帆ニ相成候趣ハ此節被仰越之御紙面ニ符合仕候尤異船致退帆出張之御人數ハ夫々引拂候趣ハ去ル十一日雇飛脚を以申達候通ニ付此節ニ到り候而ハ彌以平穩之場ニ而致安心候事ニ御座候間左様御承知可被下候以上

十月十七日

松崎九郎平

安政元年

六一一

御奉行衆中

十月四日米提督以下約八十名琉球に上陸す

〔癸丑以降秘録〕

十月

四日提督並官人等八十人計上陸總理官へ逢引水船不出先達而取極之約條書ニ相違之段申候ニ付其砌風波強屈兼候由申
理り本船へ歸り候翌日猶又上陸押而入城右一。件落カマ條約ニ違候儀且又贈品等追々々減少彼是ニ付本國へ申罪し可申杯申出
且以後ハ管事官を差越置可申杯申出候へ共兪哉角と申斷管事官差越候儀之斷聞受其後退帆之由己上安政二年
二月薩御届

十月某日本藩管轄地武藏相模兩國各村に於ける夫役貢米納金等本年は前領主の法規を襲踏し明
年に至り幕府所領の制に従はしめんことを稟申す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

武藏相模國村々夫永免除引付伺書

覺

村高拾五石壹斗三升九合之内

一高壹石七斗三升七合

武藏國久良岐郡

泥亀新田

夫永掛高

外高拾三石四斗貳合
是ハ名主段右衛門儀異國船數度渡來之節致出精取締宜敷者ニ有之其上同國金澤入江新田亡所起返之儀別段致出精候

ニ付居屋敷年貢諸役免除松平八郎磨様領中申付候分

村高貳百四石六斗六升六合五勺之内

一高百九拾四石壹斗六升六合五勺

同村之内

金澤入江新田

夫永掛高

外高拾石五斗
是ハ前々田方沙入亡所ニ相成田高五分以上荒地三役免除ニ有之候處去ル未年中伺濟之上田方起返去井より物成取立
候ニ付高役相勤可申之處起返ニ付而ハ多分入用相掛殊ニ早魁之節ハ沙浮出不然地故手限高役之儀前御同人様領中免
除申付候分

村高貳百四拾貳石五斗七升八合之内

一高貳百石

同國同郡

町屋村

夫永掛高

外高四拾貳石五斗七升八合
是ハ繼場村ニ而去ル卯年中大津村に陣屋取立相成候以來非常御用人馬繼立多相勤難澁致候ニ付前御同人様領中免除
申付候分

村高三百拾四石三斗四升八合之内

一高貳百石

相模國三浦郡

六一三

安政元年

横須賀村
右同斷

外高百拾四石三斗四升八合

是ハ右同斷

村高七百五拾九石四斗四升貳合之内

一高四百貳拾貳石八斗五升貳合四勺貳才

同國同郡
大津村

内

高四百石

是ハ陣屋元村ニ有之繼人馬持出し問屋同様相勤候ニ付前御同人様領中免除申付候分

高貳拾貳石八斗五升貳合四勺貳才

是ハ畑地之内陣屋敷地を始用地之分前御同人様領中免除申付候分

村高六百七拾壹石六斗七升貳合之内

一高六石五斗九升壹勺四才

同國同郡
公卿村

内

高壹石三斗八升八合三勺三才

是ハ畑地之内陣屋敷地を始用地之分前御同人様領中免除申付候分

高壹石七斗壹升七合六勺七才

是ハ名主庄司儀異國船敷度渡來之節別段致出精候ニ付前御同人様領中免除申付候分

高三石四斗八升四合壹勺四才

是ハ宇田津海岸新道代引高之分前御同人様領中免除申付候分

外高六百六拾五石八升壹合八勺六才

右同斷

村高百七拾七石八斗四升七合之内

一高三斗壹升貳合

相模國三浦郡

走水村

右同斷

外高百七拾七石五斗三升五合

是ハ去ル卯年中御臺場取立候節畑地之内御臺場敷を始用地之分前御同人様領中免除申付候分

村高四百拾七石五斗六升五合之内

一高百拾五石八斗五升壹合六勺六才

同國同郡

鳴居村

内

是ハ陣屋元村ニ有之繼人馬持出し問屋同様相勤候ニ付前御同人様領中免除申付候分

高拾五石八斗五升壹合六勺六才

是ハ畑地之内陣屋敷地を始用地之分前御同人様領中免除申付候分

外高三百壹石七斗壹升三合三勺四才

安政元年

右同斷

村高七百九拾八石六斗四升九合之内
一高三石壹斗九升三合

同國鎌倉郡

小菅谷村

外高七百九拾五石四斗五升六合

右同斷

是ハ名主與次衛門義異國船數度渡來之節別段出精候ニ付前御同人様領中免除申付候分

高合千四百四拾四石七斗貳合七勺貳才

外高貳千四百五拾七石貳斗三合七勺八才

夫永掛高

右ハ松平八郎廣様上知武藏相模國村々細川越中守御預所被仰付當四月中齋藤嘉兵衛様より郷村諸書物受取候ニ付取調候處書面之通御座候當寅年ハ上知初年ニ付私領引付之通免除被仰付候哉奉伺候以上(本文指令見る所なしと雖翌二年四月廿五日申請書に昨年之別は云々初年に因り推考すれば申請許可せられしものと知るべし)

細川越中守内

福田源兵衛

嘉永七寅十月

御勘定所

〔公書〕

武藏、相模國村々諸運上、小物成、冥加水、取立方引付伺書

覺

武藏國久良岐郡村々

一永貳拾五貫八百貳拾貳文五分

鹽

場

一永八拾八文

同國同郡泥龜新田

野山

永

一永百拾七文五分

相模國三浦郡森崎村

百姓持山

小物成

一永貳貫四拾五文

同國鎌倉郡峠村

雜木山

年貢

一米五升三合

同國三浦郡大津村

笹山、狼谷、芝地

年貢

一米貳升

同國鎌倉郡村々

定免中寸志増先領引繼納

一永壹貫四百拾貳文

同國同郡鍛冶ヶ谷村

山

年貢

一永八拾貳貫四百六拾八文五分

同國三浦郡鎌倉郡村々

山

永

同國三浦郡村々
一永四拾叁貫八百五文六分
船役 永

一永貳貫八百三文四分

同國同郡浦郷村

鹽場役 永

一永貳貫七百八拾六文七分

同國三浦郡鎌倉郡村々

御林下草 永

一永貳貫四百拾三文壹分

同國同郡村々

百姓持山 永

一永七拾四文八分

同國鎌倉郡小菅谷村

散在野 永

一永六百八拾貳文七分

同國三浦郡村々

鍛冶 永

一永六百二拾八文七分

同國鎌倉郡鍛冶ヶ谷村

小物成 永

一永七百六拾四文四分

同國三浦郡鎌倉郡村々

藍瓶役 永

一永六百四拾三文九分

同國三浦郡村々

秣山 永

同國同郡村々

安政元年

六一七

一永六拾五貫五百七拾五文九分 濱 役 永
 同國鎌倉郡山崎村
 一永三百三拾八文三分 百姓 山年貢
 同國三浦郡村々
 一永四百八拾五文四分 肴運 送冥加永
 同國同郡横須賀村
 一永貳貫文 肴江戸船廻冥加永
 同國同郡同村
 一永壹貫文 金澤渡船 右同斷
 同國同郡走水村
 一永六百六拾四文四分 鮑 榮 螺 運 上
 同國同郡不入斗村
 一永五百四拾八文三分 糖 菓 代
 同國鎌倉郡山崎村
 一永壹貫四百拾九文壹分 荏 代 永
 同國同郡同村
 一永三百八拾四文 洞 葉 永
 同國三浦郡鎌倉郡村々
 口永不掛 百姓 持山 永
 一永貳貫八百拾貳文六分

右同斷 同國三浦郡村々
 一永三拾壹貫三百五拾七文五分 船 方 冥加永
 右同斷 同國鎌倉郡峠村
 一永百四文貳分 小 豆 代
 右同斷 同國三浦郡村々
 一永八貫七百五拾文 肴 仲買 冥加永
 右同斷 武藏國久良岐郡町屋村
 一永百貳拾五文 藍 瓶 役
 右同斷 相模國三浦郡鎌倉村々
 一永六百九拾七文貳分 小 物 成
 右同斷 武藏國久良岐郡 村々
 一永六貫文 肴 仲買 冥加永
 右同斷 相模國三浦郡横須賀村
 一永百貳拾五文 活 簀 船 運 上
 右同斷 同國同郡村々
 一永壹貫文 水 車 運 上
 右同斷 同國同郡金谷村
 一永三百九拾壹文 糖 菓 代
 右同斷 武藏國久良岐郡 村々
 相模國三浦郡鎌倉郡 村々

一永拾八貫七百五拾文 質屋 冥加永
 右同斷 同國三浦郡大津村
 一永貳百五拾文 笹山狼谷芝地年貢
 右同斷 武藏國三浦郡大津村
 一永壹貫八百八文三分 浦 役
 右同斷 同國同郡同村
 一永貳貫七百五拾文 船 役 浦 役
 右同斷 同國同郡同村
 一永四貫九拾五文貳分 浦 方 冥加永
 右同斷 同國同郡同村
 一永三百文三分 宿 並 年 貢
 右同斷 同國同郡村々
 一永貳貫文 薪 置 場 運 上
 右同斷 武藏國久良岐郡柴村
 一永壹貫貳百文 船 役
 右同斷 同國同郡同村
 一永壹貫五百文 肴 役 永
 右同斷 相模國三浦郡浦郷村
 一永貳百五拾文 肴 江戸運送冥加永

右同斷 同國鎌倉郡下倉田村
 一永九拾八文六分 門 松 代
 右同斷 一永三百七拾五同 良 字 竹 運 上
 右同斷 同國同郡上田村
 一永三拾八文 荏 代 永
 右同斷 武藏國久良岐郡 村々
 一永三貫文 相模國三浦郡 渡 船 運 上
 合 米七升三合
 永三百貳拾六貫八百貳拾文壹分
 右者松平八郎磨様上知武藏相模國村々細川越中守御預
 所被仰付當四月中齋藤嘉兵衛様より郷村諸書物受取候
 ニ付取調候處書面之通御座候當寅年之儀ハ私領引付之
 通取立之相納同年御勘定元ニ組仕上候様御證文可被下
 候尤來卯年御料並送吟味相伺候様可仕候依之奉伺候以
 上(本文亦指令を見ず蓋前項
 同一と見做して可ならん)
 嘉永七寅年 細川越中守内 福田源兵衛
 御勘定所

十月十三日幕府は米船に準し下田箱館に蘭船の寄港を許したる旨を達す

〔尊攘錄皇武令、癸丑以降秘録〕

大目 付に

此度北亞墨利加合衆國下田箱館之兩港に船繫之儀被差許候ニ付而者阿蘭陀國之儀者從來通商御免之國柄ニ付以後航海來往之砌下田箱館之兩港に船を寄薪水食料其外船中闕乏之品を辨し並破船修復等惣而亞墨利加同様御差許有之尤交易之儀ハ是迄之通長崎表ニ相限候間同所之規定愈堅可相守旨在留甲比丹に申渡候間此段爲心得向々ニ可被達候

十月(十三日の日附は癸丑以降秘録に據る)

十月十八日水戸齊昭書を我藩主齊護に與へて晉問の意を通す

〔神庫文書印入密書輯錄三百六十五印〕

久々御無音之所文候如何ニ候哉不贖之國產表時間之意候也

十月十八日

細川 殿

尙々時候御厩可被成候防夷之事務徒々令苦心候何る良策可有之承度存候不一

水 戸 隠 士

十月下旬幕吏川路聖謨等露國使節應接の爲めに來崎の報あり本藩横井平四郎内使として長崎に赴く

〔小楠遺稿〕

七年甲寅九月魯國の使節國書を携て長崎ニ來る幕吏川路某其ノ應接の爲めに來崎の事を聞き川路嘗て先生と舊知ある

を以て是容藩主に薦めて内使を命す十月下旬院長崎に赴く小河一敏(豊後開港の人事より先生を信す國體本に來る依て相隨行す然るに魯艦は再來の期を約して出港し川路西下せず因て先生港尹水野某に面せんと請ふ聽かず乃ち己むを得ず夷屏應接大意を著し大要外人ニ對するに義論禮節を失ふ可らず領國は我國祖宗の意に非ず今日の事開鎖共に正理公道を以て事に従ふべきを云ふ其論正大堂々當る可らざるの勢あり長崎港尹に因て川路に送致せんことを請ふ港尹之れを受く其送致せしや如何を知らず是れ蓋し開國の論を唱へんとするの端始なり

夷虜應接大意

我國の萬國に勝れ世界にて君子國とも稱せらるゝは天地の心を躰し仁義を重んずるを以て也されは亞墨利加魯西亞の使節に應接するも只此天地仁義の大道を貫くの條理を得るに有り此條理貫かされは和すれば國難を損ひ戰は破れ二ツのもの、の勢眞に顯然たるは更に又云に不及事也凡我國の外夷に處するの國是たるや有道の國は通信を許し無道の國は拒絶するの二ツ也有道無道を分たす實理一切皆拒絶するは天地公共の實理に暗して遂に信義を萬國に失ふに至るもの必然の理也然るに其有道と云るは唯我國に信義を失なはざる國のみを言ふことにあらずして自餘の國に於而も又信義を守り侵犯暴惡の所行なく天地の心に背かざるの國を云ふことにして此等の國ありて我に通信交易を望むに我是を絶て拒絶するの道理あるべきや我祖宗此理を明らかに玉ひ唐蘭の二國既に交易を許さるゝと云へ共萬國此理に暗してアメリカの書翰にも饋國を以我國是の道也と述たるは全く我國是の大道を知らざる故也只外國のみならず我邦人も又領國を以て國難也とのみをもひ信義の萬國に貫くと貫さるとの天地仁義を宗とする國是の大道を知らざるよりして我の信義を失ひ彼か忿怒の心を起さしめ大に國難を誤るに到て又如何んそ是を救ふの術あるべきや然は今彼に答には有道を許し無道を絶ち國是の大本として一切領國するの道にはあらざる事を明に示し然して後彼の渡來のさま通信通商の望を許さざれば軍艦を以て來り迫るの由を述且は妄に浦賀に乘入様々の無禮を働き一切我法度を守らざるの無禮無道を責如此の國は痛く禁絶するの大法なる事を論し聞せんは彼國叩頭して是を陳謝し前非を改め通信通商を乞ふこと必然也

安 政 元 年

六二一

に無禮をなしたに改ると云へとも其實なくして其辭のみなるよしを以て又是を拒絶し果して我信義に服し罪を改めんとならば渡來其信義世界萬國に貫徹する時を待て通信通商を議せんとならば彼何の言葉ありてか兵事を發する事を得んや是に於ても彼罪に不服絶て兵事を起るときは彼曲我直必死を以て戦わんに百勝既に顯然たり何の懼るゝ事か是あらんや魯西亞の陳する所未知と云へ共察する處アメリカとは情を異にすへし如何に異にするといへとも是に答んに先我アメリカを拒絶するの大義理を述若我を援けん杯との詞ありとも深く力を他國に借るの道にあらざる事を論す時ハ彼必其國の有道信義アメリカの類にあらざる事をのへて通信を乞へし於是我又彼に答んには我國既にアメリカに事有て彼或は軍艦を以て來らば痛く血戦し其罪惡を懲さんとするの時なり然るに今魯西亞と通せは世界萬國我國を不勇と唱ん事必然の勢なり是我國の深く恥る所なれば今に至りて通信通商共に許すへきの日にあらざる事を求んとならば後年其時ありて是を議する事あるへしと答んに彼又何の辭ありて再陳する事のあるへきや凡天地の間は只是道理のあるあり道理を以て論さんには夷狄禽獸といへとも服せざる事不能也今の世にあたり外虜に接する事を談するもの大抵四等あり我宴安に溺れ被威強に屈し和議を唱ふるものを最下等とす諸國の舊習に泥み理非を分たす一切に外國を拒絶して必戦せんとするは宴安に溺るゝの徒に増るといへとも天地自然の道理を不知して必敗を取るの徒也又彼が無禮を惡み彼と戦んと欲すれとも我國貳百五十年の泰平に天下之士氣類靡して皆驕兵たるを憂へ暫く屈して彼と和し其間暇を以士氣を張り國を強して後彼と戦わんとのみ思ふは彼是の國情を詳かにし利害の實を得たるに似たりと云へとも其實は天地の大義に暗きのみならず利害に於ても亦決して其見る處の如くなる事不能なり廟堂假初にも彼と和する心ある時は天下の人心彈益情弛に趣士氣何れの日戰振起すへき器械に到りても決して整の日あるへからず三令五申其益無きのみならず天下遂に瓦解士崩の勢をなす事必然なり然れば今日に當りて必戰の計を決して幕府列國材傑の人を擧用るの道最第一の緊要とす其人擧る時は其政改り天下の人心大義の有事を知り士氣一新するも瞬息の間に有て今日の驕兵忽變して精兵となる事猶手を復すに異ならず戰の勝敗は砲熳器械のみにあらずして正義の天地に貫と不貫と人心の振と不

振とにあり況や人心振時は器械砲熳も亦隨て實備するに於てをや百夷千蠻何の恐れかあらん是利害得失の見易きもの也故に我は戰闘必死を宗とし天地の大義を奉して彼に應接するの道今日の一義にあらすや我國毫も彼が強架を恐れず大義を明かにして彼を拒絶せは夷虜不戰して畏服せざる事能はざる也内を治め外を固くし軍艦守備を整へ或は通信通商のさまの事は別に論する旨ありて爰に混せず今只彼に應接するの大義を述るのみ也其述る所といへとも偏に應接の大綱領にして其條目に到りては機に臨み變に應し細領を擴充して其節に當るは全く其人に有り爰に於て應接の人材尤選ハさるへからず夫天地有生の仁心を宗とする國は我も又是をいれ不信不義の國は天地神明と共に是を威罰するの大義を海外萬國に示し内天下の士氣を振起して器械砲熳を以全く備るに至りては萬國醜虜我正義に服従せざる事能はざるもの何の疑があるへきそや聊鄙意を述て見る人に見せんと云ふ

嘉永七寅年十月下浣

横井時存識

十月某日藩主齊護水戸齊昭に返書を贈る

〔神庫文書人印密書輯録五百十一印〕

水戸前中納言様

被成下尊翰奉拜誦候御安泰被成御座日出度御儀奉存候隨而時候爲御尋御國許之佳魚被爲拜受誠以御懇慮之御儀係次第奉存候御請爲可申上如斯御座候以上

十月 日

細川越中守

猶以御端書被仰下候趣御惻篤之儀係次第奉存候防夷之事務被成御配慮候由乍尊重譽御世話之御事奉存候良策茂御座候ハ、申上候様被仰下候頃日御沙汰之趣付而愚意老蒙迄申上候後猶更思惟茂仕候得共格別申上候程之儀無御座候様御策略を奉仰事ニ御座候且又私領分海岸不少近來異船方々乘廻候模様ニ而之渡來可仕場所多長崎天草等之様子次第ニ之人

安政元年

六二三

數度差出可申御當地並國許之手當遠國を懸ケ給是防禦筋甚以心配仕候方付而心得ニ相成候御賢慮之筋も御爲在候ハ、御示教被成下候様奉希候以上

十月廿七日日本藩末家細川利用は旗山臺場に砲四門を増加したることを報せしむ

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

一旗山御臺場に鉄炮洲方左之通御居増相成試みも相濟候由右者 公義御臺場ニ無之候間御届ニ及間敷存候段青地列方右一同申越候付同意之旨及返事

(以下モト朱書)

覺

一壹挺 五百目玉御筒
一壹挺 三百目玉御筒
但拜借御筒御座候 六貫目玉筒

一壹挺 三貫目玉筒
一壹挺 百目玉筒
右之通旗山御臺場に備置申候此段御届申上候以上
細川能登守内
十月廿七日 永谷信 左衛門

十一月三日在府本藩目附須佐美九郎兵衛は備場詰人繰仕法替のことを相州詰留守居青地源右衛門等に通報す

〔御備場記録〕

今度御備場御人繰御仕法替被仰付候間當冬交代等別紙寫之通相成候間爲御含差越申候以上

十一月三日

青地源右衛門殿

須佐美九郎兵衛

吉田平之助殿

御備場詰當冬之交代方左之通

御中小姓頭

一田中八郎兵衛

但松山權兵衛と交代

一御物頭四人

但津田源八平野萬之進當冬出立田中龜之助上月十郎右衛門林九八郎と交代來早春筑紫彌一左衛門生駒九左衛門出立

野田彌三左衛門松本甚十郎と交代

一組付御中小姓二十人外ニ組脇一人

但着之上松山權兵衛組と交代

一大筒手百二十五人外ニ代見等方引廻拾人

但着之上志賀何右衛門列三人之師役門弟共交代尤獨禮以下在御家人等迄被仰付子弟之分度詰中ハ諸役人段之場ニ而

被召仕管候

一外様足輕八拾人

但此節之登之御物頭銘々組引付ニ不及江戸詰込輪番之内方被召仕管候

一定府御物頭列一人

但異船渡來之節碇泊之ヶ所に檢使として外ニ副使一人平士方被差出候管

一右同平士拾七人

但右同斷之節斥候船二艘番船五艘一人完御臺場四ヶ所へ一人完番船ハ晝夜交代として一人過此過之手前之副士ニ被

安政元年

召仕管

付札 本行二稜ハ公義御役人等に應接等之爲ニ詰方被仰付管ニ候事

右之通候事以上

十一月

十一月四日東海南海兩道の地大に震ふ下田海嘯あり碇泊の露艦大に破損す

豆州下田湊ニ碇船罷在候魯西亞船去ル四日之津波ニ而及破損候ニ付大砲其外武器類不殘指上置致修補候上出帆之儀申出候由御聞届ニ相成候由就而之別段警衛向ニ不及候得共爲取締士分之者四五人足輕少々殘置其餘之引拂可申旨同所奉行相達候付右之振合ニ取計外人數一昨八日場所引拂申候此段御届申上候以上

十一月十日

水野出羽守

〔異國船渡來一件〕

一石地震之節大坂參居候ヲロシヤ船ハ下田に來居彼所ニテ難船ニ逢破損致候ニ付荷物之日本船ニ而余程揚取繕之爲浦賀方に廻候筈之處中途ニ而水船ニ相成積リ沈没して海底ニ陥リ候由因小田原當リ何とか申海邊ニ異人ハ上陸致し居船作事願出出來之上歸國致候筈之由其後亞墨利加船入津之節彼理魯西亞之大將に面會致しヘルリ彼船將を甚々恭敬致し種々贈り物等致候由

〔癸丑以降秘録〕

十一月四日

大地震東海道筋四國等別而強く御國ハ五日書七ツ過也同七日四ツ比ニモユル小ユリハ度々也津浪も有之未曾有之珍事也

〔神庫文書〕

藤堂和泉守

〔上書〕領分地震ニ而大破貳万兩拜借

安政元年

御沙汰書之内

十月六日

藤堂和泉守

領分地震ニ而城内住居向其外及大破家中町郷共悉破損ニ付拜借之儀被相願可爲難儀旨被 思召候當時御事多ニ候得共出格之譯を以金二万兩拜借被仰付之

松平越中守

領分地震ニ而居城破損其上領内川々堤損所等度不少候付拜借之儀被相願可爲難儀旨被 思召候當時御事多ニ候得共出格之譯を以金五千兩拜借被仰付之

十一月七日

土方備中守

領分地震ニ而陣屋向破損其外山堤崩潰家等度不少可爲難儀旨被 思召當時御事多ニ候得共出格之譯を以金千兩拜借被仰付之

十二月七日

石川主殿頭

安政元年

六二七

領分地震ニ而居城内外櫓多門其外家中町郷共悉大破ニ付拜借之儀被相願可爲難儀ト被 思召候當時御事多ニ之候得共出格之譯を以金三千兩拜借被 仰付之

加藤越中守

同文言居城其外家中町郷共悉破損ニ付金二千兩

本多伊豫守

名代中野監物

同文言居城所々破損ニ付家中町郷共悉大破ニ付金千五百兩

太田攝津守

十二月十八日

領分地震ニ而居城所々破損其外家中町郷共悉大破之趣可爲難儀ト被 思召候當時御事多候得共出格之譯を以金六千兩拜借被 仰付之

松平丹後守

十二月廿六日

名代本多大膳

領分地震ニ而陣屋向並家中町郷共破損ニ付拜借之儀被相願可爲難儀ト被 思召候當時御事多ニ之候得共出格之譯を以金千兩拜借被 仰付之

水野出羽守

十二月廿七日

領分地震ニ付藏住居向を始城内外並家中町家共悉破損其外領内損所等度不少候付拜借之儀被相願可爲難儀ト被 思召

候當時御事多ニ之候得共出格之譯を以金三千兩拜借被 仰付之

稻垣攝津守

同文言居城破損其外領内損所度不少候付金貳千兩拜借被 仰付之

亀井隠岐守

先達而居城住居向其外燒失ニ付拜借之儀被相願可爲難儀ト被 思召候當時御事多ニ之候得共出格之譯を以金二千兩拜借被 仰付之

十一月四日日本藩義に相州警衛の任に當りし長岡監物以下に特別心附として夫々金員を給與す

〔相州御備場御用一件〕

貴殿儀相州御備場惣帥被 仰付去冬至急ニ御出府餘計之御人數を度被引連候付而之雜費度多ク有之候付別紙を以金千兩格別御心附として被下置旨候條左様可被有御心得候以上

御用番

十一月十四日

長岡監物殿

三淵志津摩組

木下伊織

沼田勘解由

右者去冬至急ニ出府被 仰付餘計之人數を度引連ニ付而之雜費度多ク有之候付別段を以伊織に金百兩勘解由に同四百五拾兩格別御心附として被下置旨候條此段可爲御達候以上

御用番

月日

藪三左衛門殿

安政元年

相州御備場詰御人數之内大身衆之同勢茂多夫ニ應失費茂強ク有之候處並々之旅詰之振廻ニ而ハ當リ兼可申哉之趣依内
意委細別冊御勘定所ニラヘ之通ニ而一旦機密間ニ茂通議有之見込之趣最前取ニラヘ別冊ニ相添居候通御座候追詰決議
之趣日安之通可被 仰付哉左候得之左之通

一金ニハ五百三拾壹兩余

四千五百石振廻之御足米渡等之内ハ一式造用渡引残り分

監 物 殿

外ニ
金千兩

御知行高半役ニ同七千五百石之内四千五百石振廻丈ケ引残り三千石丈ケ之格別御心附

一金ニハ貳百貳拾兩余

千石振廻之御足米渡等之内ハ一式造用渡引残り分

沼 田 勘 解 山

外ニ
金四百五拾兩

御知行高半役ニハ貳千五百石之内千石振廻丈ケ引残り千五百石丈ケ之格別御心附

一金ニハ貳百貳拾兩余

千石振廻之御足米渡等之内ハ一式造用引残り分

木 下 伊 織

外ニ
金百兩

御知行高半役ニハ千三百五拾石之内千石振廻丈ケ引残り三百五拾石丈ケ之格別御心附

右之通可被下置哉尤是迄御見合茂無之儀ニ付一應被奉達

御内聽候上夫々可被及御達哉

但沼田ハ於江戸五百兩御振替木下之貳百五拾兩御振替之稜有之候付本行之内ハ直ニ立用之ニラヘも有之候得共先本
文被下方之儀被及御達候上御振替分上納之儀之別途ニ御達有之方ニ可有御座哉

一右之外大身之面々茂有之候得共左之通

右者三千石振廻ニ而差引被 仰付御知行高半役ハ茂五百石丈ケ張出居候付格別御心附ニ不及ニ御座候
三 淵 志 津 康

右者御知行高丈ケ之振廻ニ付勿論御取扱ニ及不申候
長 岡 銚 太 郎
松 山 權 兵 衛

右者三百石振廻ニ而連人等振廻相當ニ相見申候間御知行高半役之論ニ之及不申候
小 坂 九 郎 助
横 山 藤 七

右如何程ニ可有御座哉
機 密 間

十一月五日及ひ七日肥後豊後の地大に震ふ

〔安政元年機密間日記〕

十一月廿五日御用番松平伊賀守様ニ御使者御留守居を以被差出候

御書付寫

私領内肥後國豊後國去ル五日申中刻同七日辰下刻近十年無之大地震有之潰家倒家其後破損所等夥數人畜之死亡茂有之

安 政 元 年

其後復追々震申候委細之儀ハ未々相分段國許カ申越候付先右之趣御届仕候以上

十一月廿五日

細川越中守

十二月九日日本藩觀音崎砲壇の備砲を増加したることを幕府に申告す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

十一月九日朝左之御方様に御留守居代三宅九郎兵衛持參御取次を以差上御落手
海岸御用番 六十ホント 壹挺

阿部伊勢守様に

二十四ホント

貳挺

越中守持場相模國觀音崎御臺場に居附有之候御筒之間

右之段申上候様申付候以上

貳挺

々々自分備之筒左之通増居仕候右ニ付有來之土居五道

所々二尺程切明申候

細川越中守家來

八十ホント

十一月九日

福田源兵衛

十一月九日長藩前田孫右衛門は蘭人汽船繰縦法直傳習の件につき在府同藩坪井九右衛門に通報す

〔防長回天史〕〔長藩政府員前田孫右衛門同藩上戸在勤坪井九右衛門に密する書〕

一筆致啓達候然に御出足前被仰聞候松島瑞益原書爲修行長崎被差越其餘心掛の面々有之願出候はゞ可被差越との御事に御座候處先は唯今にては別紙の人数被差差置居候此條は盡期も無之事に付御役座御乞合の上何分の御断引可有之との評議に相成候間追て此段御手當方より可申參と存候處其以後餘り願出る者無之至極鬱々たる事にて御座候瑞益事は蘭人直入門之御願相成候處程能御開濟相成蘭館出入被差免申候跡之部も右同様御願相成可然と評議仕候扱又漢氣

船乘前蘭人直傳習一件間段座積石の連中よりも追々間繕ひ仕らせ候處肥後並肥筑の御三家よりも追々御人数被差越直傳習の御手入相成蘭館出入被差免候由之處追々被聞召候様御手入一件の御物入誠に莫大の事に候得共左程御造作を被入候所説も無之積古方餘程不運ひの様子に相聞尤肥後筑前より被差越候御人数は不人才の様子にて積古不運之事も有之哉に相聞肥後人共は餘りの不運と立腹致候て就中人數引取候様に相聞申候何分肥前には手揃に罷越居候故隨分積古も運び候由に御座候追々瑞益より申越候趣にては肥筑並肥後御三家直傳習の御都合に相成候て此御方直傳習不被仰付候ては外聞も如何敷第一御國體も立不申候段追々申越是も至極尤の事無餘儀事に御座候且脇々は御願相成候ても御断相成候得共肥筑富肥後此御方の儀は肝要御手當御蒙りの事に付隨分御願相成候得ば可被差免との事御奉行所内噂も有之由申越候下(十一月九日)

十一月十日日本藩は相州沿岸警備の任にあるを以て諸道宿驛人馬制規の外使用の特許を幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

御生播磨守様に

越中守參勤歸國之節道中供連人数荷物等前々と疏當時成丈者相減候得共御定の糺人馬高ニ而之相濟不申無據相對届或之通人馬ニ而取賄來申候今度相模國御備場御用被仰付候付而之國許より多人數呼寄時々交代等爲仕候得共内輪聯合之儀御座候付越中守同勢之内ニ度相加召連夫ニ應荷物等茂相増殊ニ以來鐵炮を茂爲持候付而之供立人数茂相増其外玉藥等段々重荷茂有之候事ニ候得之糺人馬彌以及不足其上遠國海陸を懸致旅行候付何分差略茂出來兼申候相對届之宿驛ニ寄致急持兼自然と道中差支通人馬ニ而之彌多人數ニ相成所ニ寄止宿差支用支等之節者別而及混雜申候兼而寄察之儀等無之様末々迄堅申付置候得共混雜之砌若不法之儀共仕出御難題筋引起候而之甚以恐入候付被は無餘儀筋合を以以來參勤歸國之節伊勢路東海道旅行當日人足百人馬百疋御定賃錢を以糺立不苦様被成下前後二日は是迄之通五十人五十疋糺

安政元年

立候様仕度右者此御格別之譯を以何分ニ茂御開濟被下中山道並美濃路之儀者都而右之半減を以繼立候様仕度此段奉伺候以上

十一月十日

細川越中守内
福田源兵衛

正月廿六日如左付札を用被指越候由依田類右衛門持參致口達候書面之趣是迄前後兩日増遣も右之候上之儀ニ付此上増遣之儀之難水届候

卯正月

〔全書〕

越中守相模國御備場御用被仰付候御國許より多人數罷越候付而過人馬繼立之儀去冬御開濟被成下候右御備場に相詰候人數並御當地に引付置候者共茂遣々交代爲仕候處多人數之上高持之者之召仕多或之頭々組方引連致旅行不申候而之難相成分産有之重荷等被是御定之人馬高ニ而之差支候間御備場御用中別段之譯を以以來伊勢路東海道人足五十人馬五十疋繼立不苦様被成下度右者御備場詰並御當地詰共國許之人數參着次第綜合爲致交代候得共道中一同ニ相混候儀茂有之夫等之時分ニ彌以過人馬ニ相成差支候事ニ付毎年三月四月五月七月八月九月此六ヶ月ニ限右之人馬高平常往反共御開濟被下候様且又中山道並美濃路之儀者都而右之半減を以繼立不苦様可被成下候

一近海に異船渡來様次第ニ之國許より別段ニ人數差越候儀茂可有御座處前以奉伺候間合無之至急ニ斷參人馬遣茂多自然繼立及遅々候而之御備場御用差支候ニ付右様之節者去冬御開濟之通伊勢路東海道人足百五十人馬五十疋程繼立不苦様兼而御開濟被成可被下候尤臨其期至急ニ奉伺候ハ、早速御開濟ニも相成可申候得共御差國之趣夫々宿驛に御沙汰不相廻内者過人馬差出不申候付行懸り及差支當感仕候既當春國許より多人數罷越候付而過人馬繼立之儀去十二月奉伺御開濟之御差國者被成下候得共譯々ニ者急ニ御沙汰相廻届不申候故其内最初ニ參懸り候者共者繼立段々差支甚以及迷惑

候程之儀ニ付何卒前文之通御開濟被下譯々ニ茂兼而御沙汰被成可被下候様仕度勿論右者臨時急遣之節之手當計ニ而且又平常之繼人馬高ニ差加候譯々者無御座候

右之通格別之譯を以何分ニ茂被濟下候様此段奉伺候以上

十一月十日

細川越中守内
福田源兵衛

正月廿六日付札を用被指越

書面初々條六ヶ月ニ限り人足五十人馬五十疋宛繼立之儀難承届ニテ條目異船渡來ニ付別段人數出張之節人足一日五十人馬五十疋繼立方兼而宿々ニ達之儀之前以難承届候間其時ニ可申立儀と可被心得候

卯正月

十一月十三日我藩は警備に關せざる兩支藩の任務を除かれたき旨を幕府に申告す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

十一月七日如何被仰出候付同十三日左之御方様御勝手は神谷矢柄(中)持參以御用人差上御落手

海岸御用番

阿部伊勢守様は

越中守相模國御備場御用被仰付候付出馬仕候節者末家細川能登守細川山城守儀越中守手ニ差加召連申候尤兼而御備場に兩家の人數茂見計越中守手當之内ニ相加差遣可申段當三月中上兩家之人數茂差遣置候付外御役等相勤候而者人數引足不申候間御備場御用中者外御役當之儀御差除防禦一途ニ被仰付被下候様有御座度此段申上置候様申付候以上

細川越中守家來

十一月十三日

福田源兵衛

安政元年

六三五

十一月十六日幕府は松平相模守外數名に武州本牧及び品海臺場の警衛を命す

〔癸丑以降秘録〕

十一月十六日

松平相模守

名代 松平淡路守

異國船爲防禦御殿山下御臺場御取述ニ付同所御警衛被仰付武州本牧御警衛之儀被成御免候

松平出羽守

異國船渡來之節武州本牧御警衛被仰付之

酒井左衛門尉

名代 松平主殿頭

異國船爲防禦御臺場御取述ニ付御警衛被仰付五之御臺場其方へ御預ケ被遊候依之増上寺表門通關但馬守屋敷之内三千坪爲陣屋被下之

眞田信濃守

名代 松平大藏少輔

右同文六之御臺場其方へ御預被遊候依之本芝堂丁目間部下總守屋敷家作共爲陣屋被下之

關但馬守

名代 森伊豆守

増上寺表門通屋敷海岸防禦御用ニ付上爲代地之神明前森越中守屋敷之内五千坪余被下爲引料銀三百枚被下之

十一月十六日日本藩江戸留守居福田源兵衛は幕吏鶴殿甚左衛門に就きて銃器携帶關門通過の規定に關し伺書を提出す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

嘉永七年十一月十六日御目付（鶴殿甚左衛門）様は左之通御留守居方調ニ而書付差出候由之處同廿日御差圖相濟候云々

箱根

今切

横川

福島

右者越中守家來其身所持之鐵炮を爲持國許に罷下候節右御關所々々如何様之振合ニ而通行可仕哉且大筒小筒並挺數ニ寄御差別可有御座哉將又行列外ニ袋入之儘爲持又ハ箱ニ入荷物ニ而持せ候儀可有御座處袋入之儘爲持候と荷物ニ而持せ候とハ是又御差別可有御座哉心得方承知仕度此段奉伺候以上

細川越中守内

福田源兵衛

〔幕府指令〕

十一月十六日

書面之通之箱根今切碓氷御關所才領之者斷ニ而差支無之尤碓氷之五十挺以上方家老之證文ニ而相通候福島御關所者證文裏印可相願事ニ候且又大筒小筒並袋入荷造等之差別無之候

十一月十八日幕府酒井修理大夫松平時之助外四名に京都警衛を命す
〔癸丑以降秘録〕

安政元年

六三七

十一月十八日

近來異國船度々渡來ニ付京都表御警衛向之儀彌御大切ニ被思召候依之其方儀京都御警衛被仰付候松平時之助も被仰付候間諸事可被申合候并伊掃部頭へも申談御警衛向之儀厚く可被心掛候

酒井修理大夫
名代 高木主水正

松平時之助
名代 柳澤攝津守

同文言酒井修理大夫も被仰付候間諸事可被申合候

本多隱岐守
名代 本多下總守

異國船渡來之節京都七口之御固被仰付候青山下野守稻葉長門守永井遠江守も被仰付候間申合可被勤候時宜ニ候而之相互ニ援兵をも差出御警衛向厚可被心掛候委細之儀之所司代へ可被承候尤火消之儀ハ只今迄之通可被心得候

青山下野守
稻葉長門守

永井遠江守
名代 永井若狭守

同文言本多隱岐守も被仰付候間申合可被勤候

十一月廿七日在府本藩奉行荒木甚四郎は浦賀在勤目附役須佐美九郎兵衛に對し相州備場番船等乗組人員の變更に關し通牒す

〔御備場記録〕

一 御人繰左之通御治定之事

御番船等乗組御人繰之儀ニ付而別紙まらへ之書付一通吉田平之助が相達候付藏人殿初入披見候處被存寄無之候付御手元ニ差進候條田中八郎兵衛に得斗御示談有之青地源右衛門右平之助にも御申談夫々可被有御取計旨候以上

十一月廿七日

荒木甚四郎

須佐美九郎兵衛殿

今度御仕法替ニ付御人繰見込
鴨居受

定府

士席 五人

水主差配等之内

十人

右同

同

士席 五人

交代船五艘

水主差配等右同斷

但異船五六艘も渡來候節ハ本文之五艘前後ニ見計被差出候儀ハ最寄浦賀與力申談相決居候通ニ御座候處若異船相増渡來候而も右之五艘ニテ別段手當ニ及中間敷哉之趣再應與力に申談候處五六艘が異船相増五艘之番船ニ而手薄ニ相見候ハ、御相備も大概十艘位之御手當ニ之相成居候由ニ付外ニ同様之御手當ニ相成候方可然と申談相決候付五艘ニ而若及不足候節ハ定府がハ手足不申候付田中八郎兵衛申談猶五艘之御手當ハ御中小姓が乗組大津表が被差出候而ハ

安政元年

何程ニ可有御座哉

一 檢使船壹艘

定府

御物頭列 一人

水主差配等之内 三人

但水主差配等本文之通乗せ組可申慮不足ニおよひ候付其分ハ御物頭申談別段外様足輕方二人水主差配等之内方一人乗せ組候様可仕候

檢使御物頭代

定府

士席 一人

水主差配等之内

三人

但本檢使病中或ハ異船追々ニ渡來いたし又ハ二ヶ所ニ碇泊等いたし候節ハ一人ニ而及不足候付本文之通ニ差出候様被仰付置度奉存候

此手附水主差配等乗せ組之儀右同斷

定府

士席 二人宛

船手組

壹人宛

一 物見船貳艘

但最前ハ士席壹人獨禮已下之内一人宛見込取調置候得共今度獨禮以下不被差越候付本文之通

一 御臺場四ヶ所

但江戸表御調前

定府

士席 壹人宛

一 鴨居御陣屋ニ而是迄之檢使物見番船繰出等諸事松山權兵衛取計居候處此節同人出立跡宇田九之丞檢使罷出候へハ右之人舁無之御物頭野田彌三左衛門松本甚十郎儀之御固所に代り合出張いたし模様ニ寄候而之二手一同罷出候儀茂可有之候間九之丞儀ハ御陣屋に居殘番船等繰出之儀受持候様被 仰付置檢使に之定府平士之内方御物頭代之場ニ而前文之通兩人御手當被 仰付置候而ハ何程ニ可有御座哉

一 右之繰合せニ候得之定府都合二十一人不被差越候而ハ御人賦相整不申當時之處ニ候得之全三人及不足候付別段三人不被差越候而之御人繰出來兼候得共左候へハ御出方ニ相増候付前文御臺場に一人宛都合四人被差出候御調之處御臺場之儀ハ兼而浦賀表に及御内懸合置候通與力杯被差出候得之定府方罷出候ニ之及申間敷哉見込申候付御臺場之方に之水主差配等之内物馴候者一人宛與力用辨旁差出定府之面々ハ被差省前文之通賦合せ候得之別段御出方ニ茂不係御人賦出來仕候

一 水主差配船手組之内都合二十八人番船等ニ乗せ組可申慮鴨居走水最寄ニ之都合十五人外居不申候付不足分ハ前文之通御物頭申談外様足輕四人手當仕猶不足分急場之手當ハ但書之通差繰其餘之大津表方差出候管ニ御座候右ハ水主差配船手組等不足分別段所柄ニ而被召抱候へハ年々余計之御扶持方御出方増ニ相成候付前文之通申談候

一 外様足輕之儀御固人數等八十人之調ニ御座候處右之外御留守居方御郡代間加人物書都合七人外様足輕方被召仕來候付右御軍役八十人迄ニ而ハ及不足候付右加人物書七人之内御郡代間加人物書四人ハ大津表御物頭手元ニ而繰合出來仕候付御留守居方加人物書三人ハ是迄之通別段江戸表方被差越候様有御座度候事

安政元年

十二月五日幕府は安政と改元せられたる旨を達す

〔嘉永七年江戸機密間日記〕

十二月五日惣出仕有之從京都被仰進年號改元被仰出候段御用番松平和泉守様被仰渡年號文字大目付柳生播磨守様方藤堂和泉守様に御渡有之候由にて御願達ニ相成御勤筋之御書付之和泉守様御留守居方廻達御座候事

安	政
---	---

右之通御書方達有之候事

〔安政二年御書附並諸御觸達〕

年號安政と改元之由舊臘五日於 御城被 仰渡候依之御國中可相觸旨從江戸被 仰下候條奉得其意組支配方に茂可被相觸候尤此觸狀可有判形候以上

正月十三日

惣名充

右之通候條被奉得其意此觸狀可有判形候以上

正月十四日

御目附中遠名判

朽木内匠判
小笠原備前判

十二月八日在府本藩老臣は警備地監察に令し守備兵交代の爲め召致せし中小姓組に軍令狀及び注意條規を示達せしむ

〔相州御備場御用一件〕

御備場詰之面々に拜聞被仰付管の御法令書並心得方之儀ニ付別紙之書付共二通差遣候條田中八郎兵衛に相渡支配方且大筒手之面々に拜見爲致候様可被申聞候以上（別紙之書付は長岡殿太郎等に示せるものと同意なるを以之を略す）

十二月八日

溝口藏人
小笠原備前
有吉頼母

須佐美九郎兵衛殿

十二月十七日本藩砲術師範等に對し相州御備地に於ては西洋流砲術一方たるべき旨を達す

〔相州御備場御用一件〕

御家老衆方被申達儀有之候間明日書之内御殿に可有御出旨以上

十二月十六日

荒木甚四郎

志賀何右衛門殿
財津勝之助殿
池邊次郎助殿
池部彌一郎殿
大島久平殿

安政元年

口達

六四四
炮術師役

相州表御臺場居付有之候大砲西洋法打方被仰付儀付而被仰出之趣等別紙書付二通相渡候條無伏願申談御備場詰砲術手之面々へも厚可被示合候以上

十二月十七日

覺

相州表御臺場大小御筒之儀去夏以來非常之御手當筋一付而者火急ニ製造被仰付其御村井流門人詰合多ク其後財津勝之助池部彌一郎出府被仰付右二流出來被仰付其後出府之諸流之最早御筒數も大概相揃候付儀之擬數出來被仰付候事ニ候惣御國ニ而之諸流合一被仰付候得共此御許之儀ハ不被得止右之通ニ候間諸流之内ニ之迷惑之向も可有之候得共去年來莫太之御出方筋ニ付此上諸流之御筒出來之儀ハ逆も御手ニ被及儀ニ無之候付御臺場居付有之御筒請持候而々其御筒之打樣等得斗承り合せ當時迄請持之面々よりも無伏願可被申談候諸流是迄打試筒之有之候得共大砲之當時迄無之事ニ付素より習熟可有之様も無之西洋流之儀之既ニ試打樣も有之從公義も別紙此別紙上有之候ハ公義御書付控ニアリ寫之通被仰出置候事ニ付大砲之儀ハ西洋並外國現實ニ試候日新之要法專ニ修行有之度右付而之尊慮之旨被爲在當時迄諸流打試候丈ケ之玉目臺等之流儀相守可申候得共大砲ニ至候而之相州詰之面々一致ニ相心得西洋流を研究いたし習熟いたし候様被仰出候條奉敬承蛇御用ニ相立候様可被心懸候事以上

十二月

十二月十七日日本藩管轄地増加の件につき更に幕府の速決を申請す

〔相摸國御備場御用付而諸御願等〕

牧野備前守様ニ

越中守相摸國御備場御用付而相模武藏國之内御預所被仰付候處右御預所高ニ而人夫不足付而増御預所之儀當閏七月委細奉願置候得共未御沙汰無御座候異國船何時渡來茂難量人夫及不足御用差支之恐御座候處右ニ付數村ニ而自然急ニ御調難相成儀ニ茂御坐候ハ、少々相減候而なりとも先増御預所仰付被下候様何分急速御沙汰御座候様仕度奉願候此段申上候様申付候以上（本文申請に依り同月廿四日を以て管轄地を増加せられたり）

十二月十七日

細川越中守家來

神谷矢柄

十二月廿日幕府令して銃砲射撃演習を獎勵す
〔尊攘錄皇武令〕

伊勢守様御渡

大日付に

御府内鐵砲積古之儀ニ付而ハ追々御世話も有之去ル戊午場所ニ寄四季打並月延之儀被仰出候然處砲術之儀御引立有之候付而ハ出格之思召を以御舉場近邊並是迄四季打難相成場所も今般改而一統四季打積古被仰出候間彌無怠慢修業可被致候尤御曲輪内之儀之只今迄之通可被心得候
右之儀萬石以上以下不洩様可被相觸候

十二月（廿日の日附は續）
（徳川實記に據る）

十二月廿日日本藩警備地監察須佐美九郎兵衛は同地詰留守居青地源右衛門吉田平之助兩名に對し異船渡來の節に於ける諸通達規則を通牒す

安政元年

〔御備場記録〕

一御奉行より左之通申來候事

異國船渡來之節諸達有之儀ニ付別紙一通差越候條御支配方にも可有御達候以上

十二月廿日

須佐美九郎兵衛

青地源右衛門殿

吉田平之助殿

異國船渡來之節諸達規則

一浦賀御用達と異國船渡來之段鳴居御物頭に致注進候得之檢使斥候船究通乘出斥候船一艘之乗返御中小姓頭に達御中小姓頭と御役所に達御物頭並組中飯支配等に差達可有之事

但御役所より兩御末家方御陣屋御留守居御郡代に達御郡代方村々に觸可申事

一右同渡來之儀御留守居と御役所に達有之候得之御役所より御中小姓頭並御郡代に達御中小姓頭方之前條之通達御郡代方之村々に右同斷

但御中小姓頭方之諸手賦相濟候段御役所に達可有之事

一御預所海邊異船乗通候職又之碇泊いたし候節之鳥ヶ崎觀音崎嶺島等之御臺場或其懸村々方致注進可申事

但御番所方之御中小姓頭に達御中小姓頭と御役所に達村方方之御郡代に達御郡代方御役所に達御役所方前條之ヶ所々々に達可申事以上

注進狀案文

今何月何日何刻頃何國船と相見候又ハ何國船 異船何艘何様之印を立又ハ何方沖乘通申候又ハ致候 此段御注進仕候以上

何月何日何刻

何方御番所

十二月廿四日幕府は更に武藏國久良岐郡の内十六個村を加へて本藩の主管に屬せしむ
〔相摸國御備場御用付而諸御願御同等〕

十二月廿四日牧野備前守様より今日中御呼出ニ付御留守居代小島伊左衛門參上之處別紙御書付御用を以被成御渡候

細川越中守

相摸國御備場御用被相動候付武藏國之内高貳千五百石餘増御預所被御付候間政事向私領同様可被取計候委細之儀之御勘定奉行可被談候

〔全書〕

一御勘定組頭高橋平作様方十二月廿六日四時大手御番所後御勘定所に御呼出ニ付罷出候處 國部善之尤 武藏國之内増御預所御高帳一卷御勘定組頭小高登一郎様方御渡ニ付寫一卷福田源兵衛方差上有之

ワマニ 細川越中守

御預所	御預所	御預所
一高百五拾七石壹斗八升四合	一高六百六拾九石九斗七升四合	太田村
一高五斗三升三合	一高七拾壹石貳斗三升	堀之内村
一高四百貳拾四石八斗六升三合	一高千三拾八石三斗七升七合	吉田新田
一高四拾六石三斗六升九合五勺	一高百六拾四石五斗四升三合	引越村
一高壹斗八升五合	一高壹斗貳升五合	同所新田
	一高壹石壹升貳合	井土谷村新田
	一高三斗六升七合五勺	弘明寺村新田
	一高八升	最戸村新田

安政元年

一高三斗五合
 一高壹石四斗壹升
 一高九升
 高合貳千五百七拾六石六斗四升八合
 右者此度武藏國之内書面之通其預所ニ相成候間得其意
 齊藤嘉兵衛ニ相達從當寅年物成郷村請取之御仕置可被
 申付候存寄之儀於右之者重面可相伺候以上
 安政元寅年十二月

中里村新田
 下大岡村新田
 上大岡村新田

勝次郎印
 岡利喜次郎印
 村興三郎
 塚藤助印
 立岩太郎
 水筑後守
 田伊豫守印
 川左衛門尉
 木加賀守
 松河内守印
 石土佐守印

十二月廿六日在府本藩奉行荒木甚四郎は田中八郎兵衛に對し來正月早々より相州備場に於て西洋砲術稽古開始の旨を傳達す
 〔相州御備場御用一件〕

口上之覺

當四月相州御備場御請取相成御臺場にて諸師役御請取被申上候通ニ御座候處此節諸師役引廻之面々猿島親音崎之し

引替被仰付候然處右兩所ニハ大概西洋流御備付ニ相成候通ニ御座候處西洋流之儀之近世開申候事ニ付いまた不被致然和素より自分流儀ノ心得之儀之申迄も無之候得共右新流之儀ニ付別而被致心配候間幸池部彌一郎同人門弟庄村助右衛門庄林曾太郎と出府茂被仰付置候事ニ付右之面々之内當分御陣屋に被差置悉皆傳授申受度被奉存候右者第一非常之儀も難計其上近來公邊御役人様方御見分御出ニ相成申候通ニ而自然發炮等御所望相成聯ニ而も不取廻等之儀有之候而ハ一已迄之儀ニ無之難相濟事共ニ而一時も此儘難押移次第御座候間右願之通早々被仰付被下候様との儀一同願出被申候右之次第御座候間何卒願之通被仰付候様於私も奉願候此段可然様奉願候以上

十二月
 相達候處御書面之趣尤相聞候付池部彌一郎儀來正月早々御備場に被差遣旨候條左様御心得可有候以上
 十二月廿六日
 田中八郎兵衛殿
 荒木甚四郎

安政二卯年正月四日長藩吉田寅次郎幽囚中思友詩を作りて懷を述べ我藩宮部鼎藏佐々淳次郎永鳥三平を推重す

〔松陰先生遺著所載松陰詩集〕

思友詩 寬按平翁信濃佐久間象山蓋生長門金子重輔也田城子宮部鼎藏永子永鳥
 三平佐子佐々淳次郎共肥後人金子變姓名稱鑑不松太郎佐佐後改高原
 墨奴慶神州、巨艦通武昌、廟議重勞民、月性云忍成城下盟、高日開時事、憤激發爲狂、上知雖難企、聊欲究八紘、平翁眞吾師、期我以非常、滋生眞吾友、聞之急治裝、西方田城子、別魂欲飛揚、寶劍脫相贈、重之以歌章、皇猷豈不顯、思之勿暫忘、佐子忠貞士、氣節瀟如霜、血淚收不得、泣聲雜泉瀨、分手不忍去、解衣加我裳、雄豪獨永子、勵吾進取情、難忘不敢泣、言短意偏長、月性云勝笑出方輿圖、指點送吾行、三子誠憂國、望我或有成、岐路可嚶語、話々徹中

安政二年

腸、法網密不漏、幾辱味其名、悲夫拙秀才、期望負友生、罪斷送故國、幽囚坐圖圜、渡生罹篤疾、彌留半歲強、平翁
 信野裡、山河三千里、憂在云平翁遊生前教各條二句至 夜寒四無人、愁思正茫茫、憂在云李都尉廟議查難測、衷情深巨量、
 就枕軟不寐、神飄天一方、月性云人間古今未嘗有送別紀出分明句々抗愴言々悲憤語讀則何傷○又云其誤事亦與利阿同一款然彼一
 垂云末一句 敗解体此則生歸父母邦以養十八回之猛豨可與利阿同日輪哉讀則以刺客望我兄者可謂不知人呵々○憂
 神韻雙絕

正月十六日藩主齊護領内の沿海防禦及び震災善後策の必要を陳へて幕府に歸藩の暇を請ふ

〔安政二年日記〕

私儀去年國許に之御暇順年ニ候處相模國御備場御用被仰付去寅年參勤當卯年御暇之割台ニ被仰付一昨年より三ヶ年直
 ニ在府罷在候然處領分海岸多近年異國船方々乘廻海岸等相親候付而ハ可致渡來場所不少不安意之個處々々も有之一昨
 年來ハ長崎に魯西亞英吉利渡來いたし候事ニ候得者自然領海に渡來茂難量防禦筋強以嚴重にいたし置不申候而ハ難相
 成其上去春亞墨利加渡來之模様次第ニ御打拂ニ可相成と萬事差置國許方家來共大勢呼登炮器等急速之手當ニ候得ハ
 入費を茂聊厭不申只々速成を第一ニ申付候莫太之入財且者何角差構不申呼登候跡練等夫々ニ仕法不申付候而ハ難相成
 自國之手當不行届候而ハ以之外之儀ニ付右等之手當筋早々及差圖申度早春御暇可奉願存立候得とも御備場御用被仰付
 置候付成丈例御暇之時節迄在府罷在相勤可申と相心得見合居候處去十一月國許大地震ニ而窮民取救損所之修補等大造
 之事ニ有之加之前文海岸之手當御備場御用打混不一方事ニ付早々罷下諸般之手當及差圖不申候而ハ難立行段國許家老
 共より頻ニ申越候政事向之儀ニ候得者何分其儘ニ難差置御座候間何卒當二月下旬國許に之御暇被下置候様奉願候勿論
 御備場手當筋ハ萬端同氏右京大夫並御當地に相詰居候家老共に委細申含置候様可仕候間重疊可然様奉願候以上
 正月十六日 細川 越中 守
 (即夕付札指令)

願之通二月下旬御暇被下ニ而可有之候

(二月廿七日隨意出發すべき旨の幕令あり)

正月十八日幕吏川路聖謨水野忠徳岩瀬忠震下田取締方調査を命せらる是日川路の役宅に於て洋書の翻譯を開始す

〔異國船渡來一件〕

嘉永六年以後

御勘定奉行

一月十八日

川路左衛門尉

水野筑後守

御目付

岩瀬修理

右於新番所前溜伊勢守申渡左之書取三通渡之

魯西亞墨利加共條約爲取替茂相濟候ニ付而之此後之處下田表御取締向第一肝要之事ニ有之此上ハ不絶異船茂參り可申
 遊歩等之節當時ハ支配向手足り不申處より品々不締之事茂有之哉ニ相聞候此上ハ万一奸商愚民等彼方取引之小利其貪
 り或情ニ浸潤致候様相成候而之後來之御國忠御爲甚不可然事ニ候尤下田表御取締筋之儀此程猶又下田奉行に相達候趣
 茂有之候得共今般ハ全起立之儀ニ有之同所御取締之嚴寬ハ實ニ國家治亂之岐路ニ候間改而其方共に御委任被成候間篤
 ト申談早々彼地に茂罷越下田奉行に茂萬端聊無伏藏遂示談速ニ彼地御取締永世之規則嚴重相立候様可被取計尤彼地に
 罷越御取締被取計候節ハ一々伺ニ不及御爲筋ト見込候儀ハ相談之上速ニ夫々取計可被申候事
 覺

此度下田に被相越候御用之節魯西亞官吏之儀彼方に申談何きニ茂官吏ハ不差置候様精々厚可被申談委細之儀ハ猶口上
 ニ而可申候事
 覺

異國應接懸筒井肥前守川路左衛門尉岩瀬修理手附之者共追而調所御取建右之候迄當分之内其方御役宅内調所に罷出暨書願譯等之儀取扱應接懸之而々茂折々見廻候儀茂可有之候間可被得其意候事

右之通川路左衛門尉に相達候間可被得貴意候事

正月十九日日本藩參府往返に當り藩主追従の者に携帶せしむべき銃器の數を増加せんことを幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

左之御方様に正月十九日朝神谷矢柄御勝手にて持參以御用人差上御落手

御非番

阿部伊勢守様に

越中守參勤歸國之道中供立之内ニ鐵炮爲持嫡子右京大夫去春參府之節より爲持候様可仕段一昨年十一月中上候處不苦旨御差圖有之右者供立内之事ニ付前以證文等差出中御關所前之供方之内を以相斷罷通候様仕度右之趣御關所に御沙汰被成置被下候様去正月奉願候處箱根今切兩御關所に御達ニ相成候段若御差圖御座候依之右京大夫參府之道中先拾挺爲持中候然處異國船防禦必要之器ニ付拾挺ニ而之手薄ニ有之既去春旅行之時分ニ神奈川沖に亞墨利加船中ニ而別而心配仕候先達而之大阪邊に茂異船乘入右之越中守往返之船路ニ茂右之以往之處猶更氣遣敷依之當年歸國之節より挺數相増都合三拾挺供立之内ニ爲持候様可仕候右之趣兩御關所に猶御沙汰被成置被下候様奉願候此段中上候様申付候以上

細川越中守家來

神 谷 矢 柄

正月十九日

伊勢守様が二月十三日今日中御勝手にて御呼出ニ付御留守居代小島伊左衛門參上之處左之御書取以御用人被成御渡候内意之趣不苦候尤御留守居に相達候追而平穩ニ相成候節ハ先規之通心得可申事

正月某日本藩は相州沿岸警備に關し兵士の往返に當り宿驛人馬の制限外使用を許可せられたき旨を幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

細川越中守相州表御預所御用ニ付右懸り役人共同所並領分熊本江戸表共往來仕候節人馬遣之儀御定之家中遣高之内を以取賄候得共交替時節等ニハ猶更及差支候間右御用ニ而役人共人馬遣之儀之別段東海道筋廿五人廿五疋脇往還之十三人十三疋迄且海道筋川支之時節等差支候節之美濃路中山道共拾三人拾三疋宛御定賃錢を以繼立候様仕度奉願候尤右之内可成文省略可仕心得ニ御座候

一右御用ニ付書狀往來之狀箱前段之道筋御定之賃錢を以相對宿村繼ニ取計申度奉村候右之趣江戸より東海道筋熊本迄並程ヶ谷より金澤通戸塚藤澤より鎌倉通相州御領所陣屋迄美濃路中山道とも宿村に御達被成下候様仕度奉存候
右之段奉伺候以上

細川越中守内

清 田 新 兵 衛

安政二卯年正月

御勘定所

御付札

書面御預所御用ニ付別段人馬遣之儀承置候尤私領方と不混様人馬遣高相届並書狀御定之賃拂を以繼送之儀宿村に申渡置候間宿繼御用向ニ不紛全相對と心得都而不取締之儀無之様可被取計候

卯二月

二月九日日本藩は我藩主の參府往返に使用すへき宿驛人馬の數を増加せられたきを幕府に申請す

安 政 二 年

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

二月九日御留守居より届上有之實ハ御生様御用人迄以紙面差越有之たる賦

大目付柳生播磨守様に

越中守參勤歸國之道申連人荷物共成丈相減候得共御定之繼人馬ニ而ハ相濟不申相對届或之通人馬ニ而取賄來候處相模國御備場御用被仰付候付而ハ連人荷物茂相増繼人馬彌以及不足品々難澁之筋御座候付以來參勤歸國之節伊勢路東海道旅行當日人足百人馬百疋御定賃錢を以繼立不苦様被成下前後二日之是迄之通五十人五十疋繼立中山道並美濃路之儀之都而右之半減を以繼立候様仕度段奉伺候處是迄前後兩日増遣茂有之儀ニ付此上増遣之儀ハ御間届難相成趣御付札を以御差圖被成下候右ニ付猶又申上候儀恐多候得共松平肥前守殿松平美濃守殿ニ之御隣境之長崎御用御受持ニ而ハ御當地御上下之道中過人馬繼立御間届ニ相成候由越中守儀之遙遠國より海陸數百里を隔相州表之御用相勤候事ニ候得之右御兩家より之人數武器等之持越も違候譯ニ付旁以往來共人馬高多入用ニ御座候間何分ニ茂前文之通繼立不苦様御間濟被成下度此段猶又奉伺候以上

細川越中守内

神 谷 矢 柄

二月九日

二月廿四日如左用付札御差圖有之候由御留守居被差出

書面旅行當日繼人馬増遣之儀再應申立ニ候得共近來宿村困窮之上東海道筋地震津浪之災害を受宿助郷共難澁之折柄ニ付先前より濟來候増遣之分ハ格別新規申立を以増遣之儀ハ難承届候間前後兩日之増遣を以何様ニも取賄候様可被致候

卯二月

二月十四日長岡監物昨秋閏七月水藩會澤安贈る所の書信に復して時務を論し且つ其主齊昭に宮本武藏の書を呈す

〔小池文書〕(小池友徳氏所藏、田尻佐氏所贈ノ寫本ニ據ル)

會澤 惣齋 様

御 直 披

長 岡 監 物

去秋閏月十六日之尊翰相達悉奉拜誦候先以彌御清康可被成御起居恭賀候河潮事茂海陸滯なく歸郷いたし候尊藩ニ罷出居候中ハ彼是御教示被成下於下拙も深く悉奉存候唐歌二首御投被下感吟仕候管簾座薪之四字追々御示教老先生之御精神此字に形レ實感銘備夫も志を立申候去夏歸郷後ハ彌以天下之形勢不可言筋ニ至り昨冬之地震誠に非常之變ニ而廟堂之諸君子も少しハ驚懼之心も被懷候と相考居申候へ共今以依然たる事ニ候得之行末如何と案勞仕候今日戰爭を忘れ候天下之凡俗ハ論するに不足たまノ兵を論するも末を追而本を忘れ甚しきニ至而ハ西洋の陣法ニならひ砲技を以勝を制せんと心懸候抔尤愚之至ニて御座候鉄砲固り可然共勝を制するハ劍鎗之血戰ニ可有之其劍鎗も又不可頼矣之挺を以秦楚之堅甲利兵を撻し士氣を激勵仕候こそ今日之急務と奉存候如何實ニ可仰ハ物有本末事有終始知所先後則近道とハへる聖經ニても治と云亂と云此本末前後の序を明らニせざればハ正牆面而立るが如しとも可申歟殊ニ末ニ而流行候末世之風習寧儉寧威と説給ふ寧之一字を以深く聖人之心を可味見事共ニハ有之間敷哉御示諭希申候小子も今一度ハ東行戸藤之兩大人ニ茂拜謁御高諭を蒙り度至願ニ候得共天下血を流之時至らしてハ再謁心ニ任せず遺憾之至リニ御座候も當春津田山三郎猶出府仕候此節ハ親ニ附候而罷登り暫ハ江戸ニ在留之筈ニ御座候此者ハ戸藤兩君不相替御世話ニ罷成可申候先ハ去秋之御禮答且御安否を御伺度如此ニ御座候猶期後音候頓首謹言

二月十四日

尚々自今天下之形勢御杞憂之程ハ兎角難申候へ共天定人ニ勝とハ乍申御國難一時ニ氷解し老君ニて再御登城等被爲在候ニ至り候儀又意外之事ニ候へ之御老境責而夫等之儀を以御心を被慰天下之爲御自愛奉懇祈候以上

安 政 二 年

尊老君上益御機嫌ニ可被爲入奉恐悅候天下之事跡今日ニ至候ニ付而ハ乍恐奉言上度義御座候得共何分胸中之意味紙上ニ難盡只々文筆ニ拙きを今更憤り候迄ニ御座候西國之てニ居候而ハ誠ニ耳遠く廟堂之模様ハ固り天下之形勢茂一切不相分日夜苦心仕候而已ニ御座候追々之御懇慮之末御禮之寸志迄ニ菊池家之千本鋪献上仕度段ハ昨年得貴意候通ニ而
其後段々吟味いたし候へ共きづ物多く今日迄押移申候餘り奉恐入候間右鋪ハ追而精々相おらひ相應之品手ニ入候上ニ而可奉差上候間此節ハ敵藩ニ以前前^{新カマ}神免武藏と申候嗣道之達人居申候此者之儀ハ定而御聞及も可有之普通之武者ニハ無之非常の眼識ある者よて此者雪舟流之畫を心得畫名も有之者ニ御座候右之畫所持罷在候を乍恐奉入尊覽ニ若し御意ニ相叶候ハ、直ニ献上仕度尊見迄差出申候間宜敷御執成奉願候

會 澤 君

長 岡

二月廿日在府本藩當局は長肥二藩をして隔年交替相州沿岸警備の任に當らしめんとの議ありと聞き豫め其不便の點を指摘し執務上經濟上且つ警備上最憂慮すへきものなることを幕府に内申す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

阿部伊勢守様ニ

相模國海岸御備場之儀長肥兩手請持被仰付置臺場數ヶ所有之候を御模様替ニ相成外々ハ御取拂觀音崎一ヶ所ニ御引直御筒等御備増ニ相成同所を長肥兩手ニ而隔年交代之請持ニ可相成なご海邊下方ニ而相唱候や之由勿論下賤之申口故全浮説ニハ可有御座候得共自然ハ御實用國力疲弊御厭之譯を以右様之御内調茂御座候ハ、重疊難有御趣意と奉恐察兎角を難申上筋ニ御座候へ共隔年交代ニ而ハ差寄受取渡等之手數品々及混雜第一ハ國風人質等異り別而田舎者之偏情他藩ニ對候而ハ猶更勢を張聊之事より申分等引起不慮之儀出來可申哉も難量甚以懸念仕候且兩手之火炮等一所ニ居置他

邦製造之軍器取扱試打等被是斟酌之綾茂有之實用之修業茂出來中間敷觀音崎御臺場ハ是迄越中守持場ニ而同所近村ハ御預所ニ有之長州之御預所ハ觀音崎とハ引離居候故彼方御受持之節たりとも急場之役夫等ハ此方之御預所より遣方ニ相成不申候而ハ間ニ合不申他家之役夫を此方之役人等世話致し遅引不足間違等は非少々宛之申分出來双方より不快を挾其上村方氣受抑揚筋等ニも相係可申候兼而御預所手數向之儀ハ殊外繁多ニ有之役人共仕馴不申差支勝ニ而迷惑困窮仕候而ハ手數減之譯を以御物成石代上納等之儀歎願をも申上置候程之事ニ御座候へハ此上兩手相混種々様々煩碎之手數をも相増候而ハ御備場手數取扱筋迄も届兼候様ニ共相成候而ハ以之外之儀ニ御座候且又兩手交代被仰付候得之備人數一ヶ年越相詰候委ニ候得共役人共並内海に異船碇泊等之節御預所海岸所々固之人數は矢張是迄之通備置不申候而ハ相成中間敷左候得ハ漸御臺場詰之人數大炮手丈一年越之詰ニ相當申候近境より之懸持と遠遠國より差越置候上長詰爲致候而ハ別而難遣仕候付是迄も惣人數一ヶ年宛ニ詰替申付候付年々往來之造用給扶持等相渡候事ニ候へハ是以餘計之違目ニハ相當不申候惣體家中之者旅詰付而ハ別段ニ給扶持等増遣一ヶ年越ニ相詰候共矢張旅詰定渡之規格ニ候へハ隔年交代ニ相成候共右大炮手往來片道丈之造用相減候形ニ而其外格別甘之筋ニハ至兼申候彼是前件之通ニ而ハ却而御實用國力御厭等之御趣意ニも相戻可申候間萬一風聞之通之御内調茂御座候ハ、兩手交代受持之儀ハ何分御猶豫被成下候様有御座度奉存候未何等之御沙汰筋茂無之下方申口を以差量申上候儀重疊恐多奉存候得共御委任を茂被成置候御場所手當筋之事ニ付共儘ニも難打過勿論右等之御調茂御座候ハ、難遣之筋等無之様夫々御仕法茂可被仰付譯とハ奉存候得共自然乾御沙汰御座候上兎哉角申上候様ニ茂有之候而ハ猶以奉恐入候間此段極御内々申上置候事

右者平之助を阿部様御側役之向に典禮を被引付置候付其人跡に二月廿七日夕於茅場丁萬七亭出會平之助方内々遣置候由

二月廿六日本藩相州預所物成石代金納の儀は石壹兩本米本永に限り金納とし其他小物成諸運上高等はすべて免除ありたき旨を幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

二月廿六日阿部様御家來之内に々指出置候由御書方清書共二月廿四日吉田に遣

越中守御預所御物成石代金納引請ニ被成下候様委細御内意奉願置其通被仰付儀ニも御座候ハ、近年米價下落ニおよび猶此上ニ茂引下候様相成候而之豊凶之無差別石壹兩之割合を以引受金納仕其上御普請々所々々等茂一切自勘ニ相辨取計候儀ニ候ヘハ旁以平素猶豫之備無御座候而ハ往々行届兼候間何卒石壹兩上納之儀ハ本米本永ニ限金納被仰付其外小物成諸運上高懸り等ハ一切御見切を以年々免除被成下候様奉願左候得ハ御影を以不足之年柄ニ差加取賄彼是別而難有奉存候最前書面ニ不委候付乍恐此段書取を以中上候重疊宜様奉希候事

三月三日幕府は朝命を奉じ海防の爲めに諸國寺院の梵鐘を毀ちて銃砲を鑄造すべき旨を布達す

〔尊攘錄皇武令〕

海岸防禦之爲此度諸國寺院之梵鐘本寺之外古來之名器及び當節時之鐘ニ相用候分相除其餘イ可鑄換大炮小銃之旨從京都被仰進候海防之儀専ら御世話有之候折柄 假慮之趣御感戴被遊候事ニ候間一同厚相心得海防筋之儀彌可相勵旨被仰出候尤右之趣諸寺院ハ寺社奉行より申渡候間被得其意取計方等委細之儀は追而可被相達候

三月

大 目 付に

海岸防禦之爲此度諸國寺院之梵鐘を以可鑄換大炮小銃之旨被仰出候右者武備御充實之御趣意ニ候間此外銅鐵ハ勿論鎗鉛硝石いづれも必備之品ニ付右等ニ而無之候而も相濟候品を右類ニ而相製候儀自今不相成事ニ候且又梵鐘をも鑄換被仰出候程之儀ニ付銅鐵を以新規ニ佛像等鑄造致し候儀難相成候佛器之儀も木製又之陶器ニても相濟候分之以來銅鐵を以製造之儀可爲無用候

右之通可被相觸候

三月

三月六日藩主齊護は防禦上の得失を考量し猿島の防備を撤して野島小柴等附近の警備を嚴にすべき旨を幕府に稟申す

阿部伊勢守様

越中守相模國御備場御用被仰付候付同處御臺場を初海岸等防禦筋精々入念手當申付家老初度々致見分候處向地富津と相對居候付異國船富津之暗障を避猿島之方ニ寄致通船候得之内海咽喉第一之要地ニ而彌以嚴重之備無之候而之難成場處ニ候得共異船段々乗馴富津之沖合中央を乘通候付炮丸杯ニ而打留候便ニハ相成不申其上地方よりハ十八町餘相離候孤島ニ而少々之風ニも海路至而波高ニ有之船之乘前甚惡敷既守衛之者共交代之時分及難船執茂游上り死亡ニハ至り不申候得共度々致難儀候程之事ニ付自然異船御打拂之砌風波有之候ハ、地方より急ニ取救茂出來兼可申殊更井水も一ヶ處外無之夫茂潮氣強飲水ニハ相成不申而飲食等を初地方々差贈候間地方之通助無之候而ハ暫も持忒候儀無覺束難遊之處御座候勿論小島ニ而草木とても聊計故異人目茂懸不申沖合乘通候ハ、徒ニ番衛致候而已ニ候得共防禦之備有之更ニ見遣ニもいたし不申若押寄候節如前文風波等ニ而地方々難取救とて捨置候儀ハ不相成如何之苦戰をもちたし是非相教可申候得共孤島之爲多之人力を費候様ニも罷成候而ハ却而渠ハ勢を増候形ニ成行旁以益少損可多哉夏島沖之儀ハ異船渡來之度毎ニ往來共一旦ハ必致碇泊金澤入江ニハ端船ニ而漕入候事茂有之候付彼邊に亂入等々たし候而ハ格別之切處も無之故尤氣遣敷所柄ニ有之同處海邊野島小柴邊ハ越中守持場ニ而船着之場處多場廣ニも有之臺場等取立可申地理とハ相見不申至而遠淺候得ハ端船等ニ而處々ニ乘寄上陸之便能御座候間模寄之海邊に輕便之野戰筒等相備置異人及亂妨候節ハ便宜之ヶ處ニ繰出打拂候ハ、猿島之孤島致守衛候より利方可宜と奉存候右之不容易儀ニ御座候得共得失之見込前文之通御座候付一應御内意申上候野島小柴邊ハ陣屋元々山道難處四里餘相隔海路之便利も不宜急速之出張ハ難相

安 政 二 年

成候間異船渡來之節方角ニ應人數差出相固可申猿島之儀之右申上候通ニ付御墨置ニも相成野島小柴邊之手當ニ差加候得之此方一際手厚ニ相成候間彼是右之趣申上奉伺候様申付候以上(本文に對しては何等指示を見ず)

細川越中守家來

三月六日

神谷矢柄

三月七日藩主齊護江戸を發して歸國の途に就く

安政二年

〔御書附並諸御觸達〕

太守様益御機嫌能當月七日江戸被遊

御發駕候段御到來有之奉恐悅候此段支配方に茂可被達候以上

三月十九日

朽木内匠
小笠原備前

御目附 衆中

三月十八日佛船一艘長崎に來る

〔癸丑以降秘録〕

三月十八日、佛郎西火輪船壹艘長崎ニ來ル

三月十九日英船一艘長崎に來る

〔癸丑以降秘録〕

三月十九日英吉利船壹艘同斷(長崎ニ來ル意)佛郎子貳艘英吉利三艘近々ニ可來由

三月廿一日日本藩政府は大船製造水戰の儀は當時不可能のことに屬するを以て募命を辭すへしと

の旨を在府老臣に通達す

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候先達而阿部伊勢守様大船製造之儀ニ付御書付御渡ニ相成候由ニ而九郎右衛門迄御内狀之趣付而八同人
方一ト通得御意候通ニ而段々席中申談候處當時異賊ニ對船軍ニ及候共決而必勝之見込無之段之申迄も無之渠ハ大船驅
引自在放炮之術ニ練磨いたし居日本船之不調法ニ而ハ逆茂對戰六ヶ敷事ニ付大船製作申儀ハ定而異國之船ニ習候而
製造之御趣意ニ可有之處とへ出來いたし候而も乗方ニ熟不申候而ハ用立申間敷年數も經候而萬事熟練いたし候ハ、
必勝之見込茂付可申候得とも終度乗候事無之異船を造只今渠ト對戰ト申儀之時も無キ次第ト被考申候とへ製造被仰
付ニいたし候而も三艘五艘ニ而可相濟様も無之蒸氣船様之船三十艘已上ハ出來不仕候而ハ合戰難成夫も乗方熟不申候
而ハ用立不申又出來之方ニいたし候へハ一艘ニても余計之御出方之處去夏已來御出來之密計凡貳拾万兩餘ニも及御練
合先ハ危急存亡之秋とも可申様ニ成行居候折柄只今大船製造之儀ハ一艘ありとも見込付兼御米運送船之儀ハ矢張是迄
之通ニ而被差置候とも子細無之事ニ付海岸防禦陸地合戰之儀ハい様とも御請可被仰上候得とも大船製造水戰之儀ニ
今當分之處ハ御請難被仰上追而之御銀練次第ニ之蒸氣船様之大船製造被仰付乗方も手ニ入船數も大略相揃候節ニ至リ
候ハ、御請も相成可申候得とも夫迄之處ハ右之綾を以御斷切ニ相成申方可有之と咄合可申候條得斗被仰談御同意ニ
御座候ハ、右之趣を以尊慮御伺不被爲在思召候ハ、御斷之儀宜敷御申談可有之候已上

安政元年三月廿一日

御中 老
御家 老

有吉頼母殿

安政二年

溝 口 藏 人 殿
小 笠 原 備 前 殿

此通昨申來候處追而之模様も可有之と押付置候爲見合記置候事

三月廿二日英佛の船艦數艘長崎に集る

〔癸丑以降秘録〕

三月廿二日佛郎西英吉利船來都合六艘歟ニ相成候英夷ハ數艘渡來之上何歟可申出由ニ而未タ夷情不分由ニ而御奉行所ニ而も混雜之由英夷渡來之主意ハ昨年取極候約條書双方貴官調印之物取替として渡來之旨乍去此方ニハ未タ江戸表を下らず候故追而渡來いたし候様御沙汰之處七月末八月始比ニ渡來可致申出候由、

四月二日猶林方差出候密書中

佛夷頗大意當時ろしやへ對しエグレース、フランス戰爭中ニ候へ之此近海へ鯨漁いたし候フランス之船々へロシヤ船之襲を我等之勤務として防禦いたし候就而風波を凌ぎ或ハ破損修復之爲日本へ一港を求逃避之場といたし度相願候 一我右開港之仕組を日本政府と談合いたし候任ニ相當且又通商信義を結候爲性急ニ計を成セハ却而肝要之害とふらんを恐れ候事故何卒外通信之國と同様之振合ニ御免許相願候旨（略） 已上四月二日長崎來密書

三月廿七日幕府蝦夷地の警衛を仙臺秋田の二藩に命ず

〔癸丑以降秘録〕

三月廿七日水戸様書寫

松 平 陸 奥 守

名代 田村右京大夫

此度東西蝦夷地西在乙部村東在木古内村迄島々一圓上知被仰出向後箱館奉行御預所ニ被仰付候付其方儀蝦夷地之警固

仰被付候佐竹右京大夫も被仰付候間諸事可被申合候且又津輕越中守南部美濃守者兼而被仰付置候條是又可申合候尤箱館表松前蝦夷地御警衛向をも可被相心得候

佐 竹 右 京 大 夫

右同文言松平陸奥守へも被仰付候間諸事可被申合候

松 平 陸 奥 守

蝦夷地へ勤番人數差渡置候様可被致人數場所等委細之儀者箱館奉行可被談候

三月廿八日米國測量船ウキンセンス號下田に來り書を幕府に呈して本邦近海測量の許可を請ふ

〔相州御備場御用一件〕

曆數千八百五十五年第五月十四日アメリカ船ウキンセンス號下田於て

貴國に交易渡航之場所ニ有之候暗礁并島々ヲ測量之爲ニケ年以前北アメリカ合衆國ハ五艘之船ヲ仕出候儀之日本政府ニ於て御承知相考候今我等日本に來り當時南太平洋ニ有之候我領國と唐國と之間ニ於て交易専ら盛也依之我國之船々右兩國之間ニ有る日本海を通行せされハ不相叶義地圖を以知るへし右海路中ニ有之難所を量り地圖ニ顯さしれハ交易安全といハ難し我國之交易船日本島々之周圍ニ有る難所之害を受るきニ其難所ヲ秘するハ好親之君ニ於て願ふ所なる歟若我渡航之者とも難所不案内之時之破船多ク無辜として死する者多ク將タ衆人無余儀日本人ハ賓客之取扱受るきニ至り其失費多かるるし前條之次第ニ寄渡航之通路測量之日本人ニ茂且我國之爲ニ茂希るき之事ニ顯然あり右測量ニ日本人手傳ハるし度アメリカ合衆國と之條約中第十條ニ我國之船危難ニ逢ふ時之日本港に乘入るき許容あり萬民悉ク條約ヲ解議する時規定もする一二之事件免許ハ是ニ屬する庶々都而許も所も然されハ其許容全ららずやいふるし親しき國之船沈没燒失損失イ或ハ乗組之者餓渴ニ及ふ時ニ當り近隣之湊ニ可參免彼ニ湊之形勢秘するハ信義ニあらす虚偽ニ近し條約表無相違分明ニ解得たる所ハ前文願之義既ニ日本人ニ於て許容有之事ハ假令條約

中より右之廉無之共兩國互ニ懇切ニ扶助せらるべき暗礁を秘シ置交易障且大國民人之許多之命ニ茂拘り候ヲ日本人ニ於テ願ふるべきに在る間鋪と被存候若難所且避るべき通路ヲ辨知する其拒む時は交易之障且許多之人命ニも拘り候其願ふ道理也學門之爲我等之測量ハ日本人ニ障害ふく我等ニ於テハ尤肝要之事也歐羅巴并合衆國之政府之其濶ヲ圖面ニ載セ板ニ興し是れ外國ニ商ふ也是決而害ある事ふし都而便利多ク渡航之者扶助之爲潮ある所ニ之濶杭ヲ建て且危難之岩ニ之燈及居へ是れ目當す是則仁心政道之爲も處也」軍船は圖ふく共其海路ヲ知也其故は舛ニ大炮を備へ先達而難所ヲ探り夜中ニ之火之手便ニテ通路ヲ違さる様ニもる也軍船敵國之濶ヲ測量するニ平常暗夜及良とす商船ニ於テハ左ニ示して地圖ヲ便りヤシ其助ニテ渡航す我謹而願ふは日本政府日本海測量ヲ許容せん事及我前文中置候外志望無之若日本政府日本人ヲ指遣も事あらハ太慶至也且其人我所業之證とありて是れ學ヒ繪圖及可傳我願望ハ止れ得ざる事情條約之趣意和親之本旨且公然と許シたる通路之難所ヲ測量するニ人々免恕受るべき自然之道理ニ基きし事明らかなるを稀ニ渡海する遠隔之島之海邊及平常測量も是ニ目前無余義事ニ茂あらされ共船々其海路ヲ迷ひ漂流するを安全とる爲也日本之島々我航海ニ害障及爲し且危難ありし後之初而此測量之事ヲ希ふ也測量交易ニ先せんもるべき猶豫暫しハ尋事之規則ニ違ふ事日本政府之辨知もる處也」我願之趣意許容あるべきは相違あるまじきヤ被存候若許容ふれば時之合衆國之ブレシデントニ於テ日本政府之好意あるヤは思はざる事顯然あり我茂高貴之人と談判之爲下田に渡來り我等條約中許容之廉ヲ土地之重立さる人ニ談らたし我等之行狀正しく恭敬也重立さる人の障或は無益之仲人ある時は條約第四ケ條ヲ違背もる者ニ等しく日本帝并合衆國ブレシデントの敵とせらるし

南太平洋北ニ於テ合衆國測量船主頭

ジヨン・ロツデイル

日本 執權 に

右之通和解仕候以上

卯三月

堀 金 之 助
志 筑 辰 一 郎

以別紙申達候相州表御人數交代之儀付而ハ先便申達置候通ニ付定而人柄茂夫々被及御達候儀ヤ相考申候然處當春阿墨利幹船致渡來日本一圓測量之儀別紙和解書之通申出候處其節御返答之趣不快ニ存し八月比數拾艘ニ而猶又致渡來是非々々測量願出候との儀專風判有之候内下田表御用御頼之與力近藤良次方内々注進之趣別紙寫之通ニ候ハハ頓斗形茂ふき事ニ茂有之間敷哉左候へハ究而江戸内海に入津可致し申見込茂有之當時之御人數ニ而ハ些不安意之氣味も有之候得共警致渡來候而も早速兵端を開候と申様成儀可有之様も無之定而數度再應御應對有之如何躰ニ茂納り兼候上之儀と相考候間少ハ横道ニ構候而も可然哉之處丁度交代之時分ニ付其御地を益前後迄ニ被差立着之上暫之處腹番ニいたし置候而ハ何程ニ可有御座哉尤右之譯ニ而出立引上と申候而ハ不取留事柄方仰山ニ相成人氣之動搖も係り可申候間表分ハ相州御臺場之鉄炮之多西洋法ニ而不手馴業ニ付着之上暫ハ是迄之面々申談稽古無之候而ハ難相濟候間出立日限被引上杯との趣を以被及御内意候而も可然哉夫等之境ハ如何様共兎角穩ニ御取扱候様存候右之趣ハ少ニ而茂早ク知レ候方御都合可宜其上外ニ茂段々申達候御用筋重り居候付旁雇飛脚差立候事ニ御座候以上

六月十八日

木 村 次 郎 左 衛 門
溝 口 藏 人

御 家 老 中、 御 中 老 宛

付札 昨年浦賀御奉行松平伊豫守様御内話ニ元龜天正比之人氣ニ復不申候而ハ容易ニ兵端御開有之間敷との事ニ候得ハ可成丈ハ平穩之御取扱と相見一旦内海に乘入候而ハ城下之盟と相成候付不得止兵端を被開候勢ニ茂相成可申哉因而下田表ニ而如何様卒御良策可有之候間先内海に乘入候儀之有之間敷哉と被考候へ共幸交代ニ差臨居候付引揚登り之儀御相談仕候付人氣動搖等無之様精々御含御取扱候様存候

安 政 二 年

六六五

(本朱書) 委細被仰越御付紙之趣共夫々致承知下田與力方内々注進之趣寫等被差越受取申候御紙上之通墨船數十艘渡來もいたし候へハ當時詰込にてハ御手薄ニ付御中小姓之十八日炮術手之來ル廿日迄ニ致出立候筈御座候尤御教示之通ケ様之譯ニ而出立引上申候而之人氣之動搖ニも係り候事ニ付御中小姓之方ハ御臺場々々之模様替可申哉之趣付而差急出立大筒手之方ニ之御臺場に居付ニ相成居候ハ西洋流之大炮ニ付暫ハ是迄之詰込詰合得斗咄合無之候而ハ都合惡敷且御臺場之模様も替可申趣ニ付而引上ケ出立申儀を相合候事ニ御座候間左様御聞置候様存候兎角種々之事絶不申何賦御心配之程致深察候被差越候別俗ハ留置被候已上

七月八日

(御用御頼近藤良次報告)

一此程渡來ハたし候亞國測量船五ヶ月相立再渡致し候由之事

但右再渡之趣意之日本海一圓測量之義願望ニ有之右時日之八月比ニ有之候

一亞國軍艦數拾艘渡來致し候由右之同國願之趣御取用ひ無之歟御取扱振不宜候へハ爭端を開候由之手筈ニ有之旨魯人之咄ニ有之不取留事ニ之候得共如何哉

一今般渡來之亞船之乗組人數拾三人船之貳本之しらゝ而スクー子ル船ニ有之乗組之ものハ不殘商人ニ而獨逸國生之由先般渡來之測量船運送船ニ相用候船之方證書も有之右之小筒等數挺積入參り商賣致し度との申出候廿一日入港廿六日出帆魯人不殘本國に連越候趣ニ而戸田に罷越候尤右船乗組之内荷主壹人下官壹人荷物品之陸上ケ致し柿崎村玉泉寺に歸帆迄罷在候事

但至而平穩ニ而別心有之候様子ニ之無之事

右之趣不取留風聞位之事ニ候得共御耳ニ入申候鎖末之事ニ之候得共兼而申上置候通決而御他言御無用万一御洩相成候而ハ實以悲怖之至くれ、厚御含置可被下候尙追々模様可申上候以上

五月廿八日

三月廿九日幕府監察大久保右近將監等相州に於ける本藩警備地を巡視す

〔相模國御備場御用一件〕

一同(三) 廿九日右近將監御列浦賀より陸地大津に御越同所に此方様被指出置候押送船ニ御乗組猿島に御渡御見分發炮も御所望ニ而打方相濟猶御乗船富津之方に御乗り廻り夫々旗山に御着船御見分十石崎一通り御見分觀音崎に御越發炮御所望ニ而大炮打方相濟龜ヶ崎島ヶ崎御見分島ヶ崎ニ而ハ行軍筒打方御見分無御帶相濟御船頭は右近將監様方金子二百疋被下候右御見分相濟候付右近將監様並御徒目付組頭に御使者とふく孫右衛門罷出御禮申上御船頭に被下物之御禮茂申述候段同人方申越候由財津市兵衛方四月十三日仕出之御用狀五月九日御國に相達候事

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候先月廿九日御日付大久保右近將監様御徒目付田中勘左衛門様其外御手付之御方々等相州御備場御臺場々々御巡見有之發炮を茂御所望ニ相成諸事無御帶相濟申候則別紙坂梨潤左衛門書取一通差進申候此段以御序可被達尊聽候以上

四月十三日

三淵志津摩
溝口藏人

御家老宛
御中老宛

去月廿九日當御臺場御見置として御越被成候御役人衆左之通

安政二年

六六七

御目付

大久保右近將監様

御徒目付組頭

田中勘左衛門様

大久保様御手附

勝麟太郎

御徒目付

新見 蟻藏

御小人目附

金田豊三郎

堀江六五郎

高橋令之助

山本覺太郎

兼松龜次郎

右廿九日朝六時浦賀御立ニ而大津濱より御乗船猿島に御渡御臺場御覽之上支無之候ハ、發炮御覽有之度由ニ付卯ノ先ニ而西洋流之小炮打方ニ取懸候處其比漁船多候付初メ之無玉ニ而致打方候様被仰聞後一二發之玉込ニ而打方仕申候左候而富津方御乘廻ニ而旗山御上り右御臺場一と通被成御覽走水村ニ而書御休十石御臺場被成御覽右兩所之發炮ニ及不申觀音崎ニ而御自分方御居付之筒迄致打方候様被仰聞右手之土手に御登り被成田中様以下之外手に御立被成候付皆様に海縁を上申候左候て六挺之御筒一同ニ致矢込右手十八封度より順々ニ打候而貳發宛ニ而相濟申候夫より兼て申上置候付御船藏之御圍筒等御立寄御覽被成龜ヶ崎之一通之御覽ニ而鳥ヶ崎ニ而茂公義之御筒之儀之御噂茂無御座於同所行軍筒打方御覽之儀之前以申上置候付八挺押並へ一同致早打申候右終而手捌宜敷致感心候と被仰聞又柵門外ニ御送り申上候處いつ方茂差はまり宜相見候歸府之上可致言上と大久保様直ニ被仰聞候

四月二日

坂梨潤左衛門

〔全書〕

以別紙申達候先月廿九日御目付大久保右近將監様御初相州御備場御臺場々々御巡見相濟候段之別紙他筆を以申達候通候最前廿九日ニ之向地御見分有之浦賀に御歸之上此方様御臺場御見分可有之御日取之追而相究候との趣ニ候處廿八日夕刻ニ至御模様打替明廿九日此方様御臺場御見分有之筈之段申來且朝六時之御立ニ而一番ニ猿島御覽と申事之夜中ニ相分第一御順路之儀最初之御模様と大ニ致相違人夫船手等之手賦不一方混雜ニ而夫々相調候節之東白ニ相成彼是いたし居候内大久保様御列猿島に御着船有之御番所は之鳥渡御休ニ夫より島内卯ノ崎ニおゐて發炮御所望有之候處餘り急迫之事故大ニ手縫いたし玉藥之類茂其場揃兼候様之儀有之打方隙取些御不都合ニ有之候由併其餘之御臺場ニ而之御出前夫々手賦相調居候付聊申分無之別而觀音崎之儀打方御所望と直様八挺之大炮一同ニ致矢込順々ニ打放誠ニ夥敷勞ニ而坤軸茂碎候程ニ有之是之餘程思食ニ入候由鳥崎行軍臺之儀茂八挺押並矢繼早ニ打立其節甚手都合宜不怪御感心被成候由右ニケ所之儀之重疊愉快之至ニ候得共猿島之手縫如何ニ茂殘念至極ニ御座候乍去前條之通餘り急迫ニ有之候間強而仕手方々責候儀茂難相成可致様茂無之候右之趣委敷御尋等被爲在候も難計候間爲御心組申達候事に御座候以上

四月十三日

三淵志津摩

溝口藏人

長岡 佐渡様
 有吉 頼母様
 平野九郎右衛門様
 大木 舍人様
 松井 典禮様
 小笠原 備前様
 朽木 内匠様

安政二年

六六九

尙々御役人衆方御見分之節申述候口上振當藏人相州に罷越候節別紙寫之通り相渡置候付此節於向々書面之趣申演候處
大ニ都合宜遠敵打留出來兼候見込ニ而輕便之筒被備置候儀杯ハ尤之儀ニ思召候旨被仰聞候由ニ候以上

三月某日本藩相州警備地防禦用砲器彈藥及ひ附屬物品の調査書を該擔當者より提出せしむ
〔相州御備場御用一件〕

大炮并附屬御道具帳（安政二年三月調）

- 覺
- 一り印長三貫目御筒 壹挺
- 但臺一式並附屬小道具共 壹ツ
- 一象眼儀 壹對
- 一拭竿掛 拾棹
- 一玉藥元箱 貳ツ
- 一同小出箱 貳ツ
- 一水桶 拾挺
- 但棒共 拾挺
- 一合一百目御筒 拾挺
- 但臺一式並附屬小道具共 拾挺
- 一玉藥元箱 拾挺
- 一脊負玉藥箱 三拾

- 一吹込木火入箱 拾五
- 一水桶 貳荷
- 一水入箱 拾ヲ
- 一口藥入 貳拾ウ
- 一焙硝斗 大小貳拾ウ
- 一焙硝じよふこ 拾ヲ
- 一火繩挾 貳拾本
- 一右同斷掛 拾ヲ
- 一鑊鍋 貳ツ
- 一手箸 壹膳
- 一鐵槌 壹ツ
- 右池邊次郎助受持ニ而出來仕候分
- 一す印短六貫目御筒

- 但臺一式並附屬小道具共 壹荷
- 一水桶 壹ツ
- 一諸道具箱 貳ツ
- 一玉藥箱 壹ツ
- 一火繩雨覆 二ツ
- 一口藥入 拾挺
- 一百目筒 拾挺
- 但車臺一式並附屬小道具共 拾ヲ
- 一火繩筒 拾ヲ
- 一火繩筒挾 貳拾貳
- 一口藥入 三拾荷
- 一玉藥箱 拾ヲ
- 但棒共 拾ヲ
- 一吹込入 拾ヲ
- 一貳拾五匁合 拾ヲ
- 一五匁合 同
- 一火繩雨覆 同
- 一吹込挾 拾本
- 右志賀何右衛門受持ニ而出來仕候分

- 一よ印長三貫目筒 壹挺
- 但矢倉臺一式小道具共 拾挺
- 一百目野戰筒 拾挺
- 但車臺一式小道具共 拾ヲ
- 一玉藥箱 拾ヲ
- 但三貫目附 三拾
- 一同 拾五
- 但野戰附脊負 拾五
- 一小箱 壹ツ
- 但右同斷 貳荷
- 一玄蕃桶 壹ツ
- 一小田子 貳荷
- 一三貫目小出藥筒 壹ツ
- 一遣火入皮袋 壹ツ
- 一火繩挾 貳本
- 一早火挾 貳本
- 一百目筒掛棒 貳拾本
- 一火繩挾 貳拾本
- 一火繩雨覆 拾ヲ

一道火入皮袋 拾ヲ
 一藥斗合 貳拾ッ
 但五匁入拾匁入
 右大島久平受持ニ而出來仕候分
 一八拾斤御筒 壹挺
 但矢倉臺一式小道具共
 一六十斤御筒 壹挺
 但矢倉臺一式小道具共
 一貳拾四斤御筒 貳挺
 但右同斷
 一拾八斤御筒 貳挺
 但右同斷
 一拾五搦御筒 壹挺
 但車臺一式小道具共
 一拾貳搦御筒 貳挺
 但右同斷
 一六斤御筒 六挺
 但右同斷
 一貳百目野戰筒 貳挺

但右同斷
 一ボック 大小貳組
 但綱共
 一雨火繩入 貳ッ
 一早合胴亂 貳ッ
 一三ッ引出道具入箱 三ッ
 一道火入袋 貳ッ
 一溜塗長持 貳棹
 一白木三ッ割蓋玉箱 拾五
 一玉藥入白木元箱 五拾ヲ
 一三ッ引出道具箱 五ッ
 一玉藥兩懸 壹組
 一唐銅湯煎鍋 壹組
 一火藥桶 六ッ
 一火藥運ビ赤銅筒 六ッ
 一道火入革袋 貳ッ
 一象眼儀 貳ッ
 一道火拔 壹ッ
 但箱入

一皮道火袋 三ッ
 一ブリッキ道火入 壹ッ
 一火繩挾 七本
 一元火挾 五本
 一革胴亂 八ッ
 一同小 五ッ
 一元火入ブリッキ 五ッ
 一口藥入皮胴亂 五ッ
 一火繩雨覆 五ッ
 一鐵火繩挾 貳本
 一火藥粉藥入 貳ッ
 一鑄鍋 壹本
 一八拾斤毛カルカ 壹本
 一同藥込ヒ 同
 一六拾斤毛カルカ 同
 一同藥込ヒ 同
 一貳拾四斤毛カルカ 貳本
 一同藥込ヒ 同
 一拾八斤毛カルカ 同

一同藥込ヒ 同
 一拾五搦毛輕筒 壹本
 一拾貳搦毛輕筒 貳本
 一六斤右同 拾貳本
 右池部彌一郎受持ニ而出來仕候分
 一拾貳貫目御筒 壹挺
 但臺一式附屬小道具共
 一八貫目御筒 壹挺
 但身筒計
 一六貫目筒 四挺
 但臺一式附屬小道具共
 一長六貫目御筒 壹挺
 但右同斷
 一四貫目御筒 壹挺
 但右同斷
 一長三貫目御筒 貳挺
 但右同斷
 一短三貫目御筒 四挺
 但右同斷

一五百目御筒

六挺

但内五挺應變臺一式小道具共

一壹挺車臺一式小道具共

一三百目御筒

六挺

但内四挺應變臺一式小道具共

一貳挺車臺一式小道具共

一七拾目行軍筒

五拾挺

但臺一式小道具共

一指持玉藥箱

拾貳

但引出し付

一玉藥箱

五拾荷

但脊負棒共

一大カクラサン

壹組

但綱共

一カクラサン

五組

但右同斷

一地車

貳輛

一四寸七步五厘毛輕筒

一五寸貳步五厘同

拾本

一四寸三步同

拾貳本

一六寸貳步同

一五寸七步同

一三寸貳步同

一三寸六步同

一貳寸壹步同

一貳寸四分同

一壹寸貳步同

一壹寸三步同

右財津勝之助受持ニ出來仕候分

一水箱

百貳ツ

一玉藥脊負

一口藥入

三拾荷

一火繩挾

一大炮火繩挾

百貳拾壹

一種火入

一玉箱

五拾本

一大玉箱

一拾硝震イ箱

百四拾ツ

貳拾壹

壹ツ

但棒共

一水田子大手桶

拾壹荷

但釣鐵物附棒共

一片手桶

四拾壹

一柄杓

一小玄蕃輕筒桶

拾壹

但棒共

一用水桶

三拾ツ

一番手桶

一釣瓶鐵物共

拾貳

一番手桶

一右乘臺

六拾七

一桶

一玉桶

拾壹

一大小桶

一丸桶

四ツ

一拾硝桶

但大サ壹尺八寸高サ右同蓋共

貳ツ

一油桶

三ツ

一長持

一小長持

五拾九棹

一拾硝箱

四棹

但内貳拾ウ桐

一大玉入仕切付長持

一簞筒

三棹

但拾六引出し付

一道具箱

壹ツ

一玉藥元箱

但小箱入組

三ツ

一半長持

一玉藥元箱

大小六ツ

但小箱入組内三棹金御紋

一三ツ割蓋玉箱

五棹

一合藥通イ箱

一四ツ入玉箱

貳拾八棹

一吹込さし箱

一小出玉入箱

七拾

一大玄蕃桶

拾ヲ

一拾硝箱

貳拾壹

一吹込さし箱

一小出玉入箱

七拾四

一大玄蕃桶

百ツ

一拾硝箱

貳拾四組

一吹込さし箱

一小出玉入箱

貳拾四

一大玄蕃桶

百ツ

一拾硝箱

貳拾四組

一 大砲雜巾手桶 六ツ
 一 同雜巾小桶 拾ヲ
 一 洗桶 貳ツ
 一 水桶蓋臺共 壹ツ
 一 焙硝通桶蓋付 三ツ
 一 硝石清煮桶丸蓋附 九ツ
 一 大半切桶 貳ツ
 一 但高サ壹尺三寸五步大サ三尺三寸蓋付ニして 六本
 一 硝石煮桶 但大サ貳尺三寸高サ貳尺四寸五步蓋付 九拾九張
 一 高張提灯 百六拾三張
 一 弓張提灯 拾七ツ
 一 腰差提灯 八荷
 一 高張弓張人籠
 右池部彌一郎財津勝之助受持ニ而出來仕候處混雜之砌
 ニ而取分ケ出來兼候付一同に認メ置申候附紙之稜々外
 不殘相州に被差送候尤此内損等茂御座候得共其儀者相
 分り不申候事
 一 貳貫目御筒 壹挺

但應變臺一式小道具共 壹挺
 一 六貫目ホウイツスル 壹挺
 一 但車臺一式小道具共 壹挺
 一 三百目野戰御筒 拾六挺
 一 但右同斷
 一 一百目行軍御筒
 一 但臺一式小道具共 壹挺
 一 五百目野戰御筒
 一 但車臺一式小道具共 貳拾棒
 一 カラナアド入箱 拾棒
 一 但桐油共
 一 フラント入箱 五棒
 一 但右同斷
 一 長持
 一 但右同斷
 一 貳本カルカ 貳拾本
 一 三百目右同 壹本
 一 唐銅湯煎鍋 貳組
 一 一步指 壹挺

但箱入 壹ツ
 一 一百目玉拔 壹ツ
 一 拾匁玉取 貳拾本
 一 行軍玉取 四ツ
 一 水桶 五棒
 一 三百目入小長持 貳挺
 一 但桐油共
 一 象眼儀 壹挺
 一 但箱入
 一 兩隨器 拾組
 一 ガンドウ提灯 八ツ
 一 壹具手袋 四ツ
 一 焙硝入小箱 壹ツ
 一 同 五荷
 一 ハスフル
 一 兩掛ケ 八ツ
 一 但桐油付
 一 玉藥箱 八ツ

但桐油付 貳ツ
 一 合藥通箱
 一 但桐油付 四張
 一 御紋付高張 拾五張
 一 同小丸 壹ツ
 一 フイゴ 七ツ
 一 但外箱共
 一 上戸大中小 五本
 一 火繩挾 四本
 一 シュントロス挾 壹ツ
 一 唐銅藥研 貳ツ
 一 下振^{輪カ} 壹ツ
 一 眞中曲尺 拾連^カ 貳拾八
 一 鑄鍋 四拾本
 一 行軍早子^{合カ}
 一 メリヤス
 一 舟印
 一 大萬力ドンメカラフト
 一 石臼 壹ツ

- 一 簞座 百貳拾枚
- 一 飯入ツト 同
- 一 行軍貳番手御印 壹ツ
- 一 望遠鏡 錦岳作 壹ツ
- 一 ヨウカク燈籠 三ツ
- 但外箱入
- 一 陸砲全書 壹部
- 一 ロクロ 壹組
- 但道具共 壹ツ
- 一 全方儀 壹ツ
- 但外箱入
- 一 カケヤ(大槌) 六丁
- 一 諸籠手 八拾貳組
- 一 象眼儀 壹ツ
- 一 陣田子 壹荷
- 一 吸筒 貳拾ツ
- 一 陣鍋 三ツ
- 一 小筒口藥入 拾ツ
- 一 遠丁目印吹貫 壹ツ

- 一 征矢 貳百本
- 一 ブリツキ 貳千七百枚
- 一 革袋 貳ツ
- 一 火繩 貳百拾曲
- 一 星幕 貳ツ
- 一 ガンドウ提灯 八ツ
- 一 壹具鞆 三拾八組
- 一 唐銅藥研 壹組
- 一 大水箱 六ツ
- 一 でふ戸 貳ツ
- 一 水箱 拾六
- 一 フイゴ 貳ツ
- 但外箱共
- 一 行軍脊負兩懸 拾七荷
- 一 口藥入 拾六
- 一 火繩箱 三拾貳本
- 一 種火入 三拾貳
- 一 火吹込箱 六ツ
- 一 玉藥元箱 大小六樟

但小箱入組
 一 道火拔 壹ツ
 但箱入
 右ハ江戸詰御用懸り受持ニ而一昨秋以來出來仕候分御
 側手御備ニ相成居候事
 右之通御座候昨春出來仕候御道具之儀財津勝之助池部

彌一郎兩人受持ニ而一同ニ申付急場之砌一々取分出來
 兼今ニ至候而之猶更御帳面ニ打交居見分ケ兼候儀茂有
 之其分之一同ニ認メ置申候細工道具並細工所に被付置
 候品々打方用小道具之分之省キ置申候尤混雜之砌相洩
 茂可有御座哉凡右之通御道具共出來仕候以上

四月九日在府本藩重臣は藩主在藩申若し事變あらば世子出馬の令あらんことを慮り豫め其準備
 を整へんが爲め物頭以下の代任を命す

〔相州御備場御用一件〕

- 御物頭代 長 鹽 庄 兵衛
- 御側御物頭代 金森七郎右衛門
- 御先手物見 片山喜三郎
- 御昇支配 佐々陸助
- 御鐵炮副頭代 中山平助
- 御長柄頭代 小野呈左衛門
- 森 森 庫 太
- 加來三左衛門
- 內藤平左衛門
- 高原小右衛門

- 御歩頭代 大石長右衛門
- 御持筒頭代 津田太納
- 御中小姓組脇代 宮脇市左衛門
- 住江格之允
- 平野太郎四郎
- 竹村彌右衛門
- 右者相州御備場御請持付而當御留守中万々一若殿様被
 遊御出馬候得者右之通代役等ニ而被差出旨同(月)九日
 及達候由
- 右之通江戸より申來候事

四月十四日幕府は下田奉行及び川路聖謨水野忠徳岩瀬忠震等に對し米船の近海測量を拒絶すべきことを命ず

〔嘉永六年以後 異國船渡來一件〕

卯四月十四日伊勢守殿御渡

下田奉行に

亞墨利加船が申立候日本海測量願之趣急速之波汰ニ者難相成候間彼方申立之通出帆爲致候追而右承候云々渡來ハ立し候共測量之儀ハ從來御國內之者ニ而も制禁之儀ニ付容易ニ御聞届難相成行々際限茂無之事故五ヶ月及過候逆挨拶可有御譯ニ之至り兼候間種々及談論此儀能々爲辨候様可被取計候事
但亞墨利加戸田に相廻候儀決而難相成候間其趣ニ可被取計候事

川路左衛門尉

水野筑後守に

岩瀬修理

同文言

右之通下田奉行に相達候付而之右ニ其地在勤之事故諸事無伏藏下田奉行遂談判御爲宜敷様可被取計候事

下田奉行に

亞墨利加船渡中測量之儀別紙之通り相達ニ付而之當節川路左衛門尉水野筑後守岩瀬修理其地ニ罷在候事故諸事無伏藏遂談判御爲宜様可被取計旨相達候間得其意可被談候事
右之通相達候事

四月十四日日本藩留守居助勤吉田平之助は幕吏の尋問に依り警備地守兵の數を記載し幕府徒目附組頭田中勘左衛門に提出す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

今度御目付大久保右近將監様御備場御見分之節同所詰惣人數附取調差出候様御徒目付組頭田中勘左衛門殿より被中間候付右御人數付之儀私持參仕浦賀御奉行様に御願立ニ相成段々御取扱を以御人數御省略ニ相成候趣口上を添差出候様御内意ニ付昨夕勘左衛門殿宅に持參仕委細御取扱之次第等口達仕此儀之御老中様に茂御聞濟之上御差圖ニ相成候哉之御模様ニ之御座候得共根元御内々より奉願候儀ニ付若又表立御差障之筋等出來候様御座候而ハ甚奉恐入候事ニ付此段ハ極密御内意仕置候間何卒御含被置可然御取捨被成下候様自然之節之江戸表並御國許に茂御手當被成置候儀を茂巨細申述書付差出申候處右之趣ハ粗承知ニ茂相成居先平穩之御取扱中ハ國力疲弊不致様との御趣意御尤之事ニ付委細被相含程能可申達と之噂ニ御座候將又兩御末家御受場大筒手之儀當時交代中段々病中故障等茂有之人数及不足差寄書面通ニ而之如何敷相見候得共兩家ともニ下地人少ニ而何分急ニ繰合難波之筋有之勿論追々と之相應ニ詰方被申付答ニ而專共手當ハ致し居候得共右之次第ニ而暫延引茂可仕哉詰合現人數迄取調不關御達仕置候間此段茂宜御含被置被下候様申入候處是又被致承知夫々申達可被置と之事ニ御座候此段御内意仕置候事

四月十五日

吉田平之助

御備場詰凡之人数

一馬廻組脇

壹人

一番頭

一馬廻

四拾貳人

一奉行 目付兼

一大筒手引廻

拾人

一物頭

一大筒打手

百貳拾五人

一留守居 郡奉行兼

壹人

一右筆

壹人

安政二年

六八一

- 一 奉行方根締役 壹人
- 一 郡方吟味役 壹人
- 一 勘定方根締役 壹人
- 一 醫師 五人
- 一 徒目付 九人
- 一 徒役人 三拾貳人
- 一 船手組並水主差配役等 九拾壹人
- 一 足輕 百四人
- 一 昇之者 四人
- 一 中間 六拾貳人
- 末家細川能登守細川山城守より
- 御備場に差出置候人數
- 一 物頭 壹人
- 一 馬廻 七人

- 一 徒士 五人
- 一 足輕小頭 壹人
- 一 足輕並雜人共 貳拾壹人
- 右能登守分
- 一 物頭 一人
- 一 馬廻 五人
- 一 小役人 貳人
- 一 足輕小頭 貳人
- 一 足輕 拾三人
- 右山城守分
- 右惣人數上下合六百七拾五人
- 右之通御座候以上
- 四月

四月十六日藩主齊護熊本に歸着す

〔安政二年御書附並諸御觸達〕

太守様益御機嫌能去ル十一日小倉に被遊御着明後十六日六時之御供揃ニ而植木御發駕熊本被遊 御着旨被 仰出候段 御到來有之奉恐悅候此段御支配方に御知せ之事

四月十四日

〔本藩年表〕

三月七日江戸御立四月十六日御着當御下國ヨリ鉄炮三十挺御持セニ成ル

四月廿五日幕府は仙臺外五藩に蝦夷地の警衛を命ず

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候仙臺様佐竹様蝦夷地御受持被蒙仰候儀之先達寫差進候通候處此節右御兩家並津輕様南部様松前様御受場等之儀別紙寫之通御沙汰ニ相成候由誠ニ廣太之土地ニ而夫たけ御人數も多分ニ無之候而ハ難相成第一仙臺様御受場之内エトロフ杯之五百里程も可有之左候而日本方十度計も北ニ寄至而寒深ニ有之佐竹様御受場北蝦夷之地も素々同様寒深ニ而風氣ニ不馴者一ケ年も相詰候得之病を生し十人ニ五人位ハ及死亡候との唱も有之右之御方々様最前被蒙仰候御即下當時ニ至迄只々御當惑ニ而いまた御半之打立ヲも出来被兼候と御留守居類役之内ハ咄候様子ニ御座候何卒人氣ニ杯障り不申様祈申候

此方様初發被爲蒙仰候節之實ニ無理成御取扱々末々迄も奉恨候處處ニ較候へハ相州御受持ハ百分之一とも可申哉左候へハ少々之御出方を以稽古打位之事ハ被仰付ニ而茂可然と咄合候事ニ御座候此段爲可申達如是御座候以上

五月十三日

木村次郎左衛門
三淵志津摩
溝口藏人

御家老中宛
御中老宛

安政二年

(以下本朱書)

以別紙申達候仙臺様佐竹様蝦夷地御受持付而ハ先達寫被差越候通候處此節右御兩家様並津輕様南部様松前様御受持等之儀被蒙仰之趣別紙寫被差越委細被仰知候趣致承知仙臺様初御當惑之段致深察候御紙上之通右御方々様ニ御座候得之此方様相州表御備之儀之結構之次第ニ付少々之御出方を以稽古打位之儀ハ如何様とも練合候儀御同意ニ存候事ニ御座候以上

六月廿三日

御 中 老 連 名
御 家 老

溝 口 殿
木 村 殿

〔全書〕

一松平陸奥守様に

東蝦夷地シラナイよりシントコ迄之内島々とも一圓持場之事

一ユウワツ

元陣屋取建人數差置候様可被致候

一子モロ

出張陣屋取建人數差出候様可被致候

一エトロフ島

前同斷

一クナシリ

前同斷

右者阿部伊勢守殿御差圖ニ付申達候間可被得其意候

卯四月

一佐竹右京大夫様に

覺

西蝦夷地ヲカムイ岬より北海岸通りシントコ迄惣躰並

北蝦夷地其外島々共一圓持場之事

一マシケ

元陣屋取建人數差置候様可被致候

一ワウヤ

出張陣屋取建夏分北蝦夷地應援可被相心得候

一北蝦夷地

前同斷三月ハ八月迄人數相詰冬分之マシケ元陣屋に引

移候様可被致候

右者阿部伊勢守殿御差圖ニ付申達候間可被得其意候

卯四月

一津輕越中守様に

覺

箱館表御警衛並江差在乙部村ハ西蝦夷地ヲカムイ岬迄

持場之事

一箱館

千代ヶ臺

元陣屋取建人數差置同所ハエサン岬迄持場之積可被相

心得候

一西蝦夷地

スツ、

安 政 二 年

出張陣屋取建人數差置西蝦夷地惣躰之援兵相心得候様

可被致候

右者阿部伊勢守殿御差圖ニ付申達候由可被得其意候

卯四月

一南部美濃守様に

覺

箱館表出岬御警衛専用ニ相心得エサン岬より東蝦夷地

ホロヘツ迄海岸惣躰持場

一箱館

宇水元より野地頭迄之曠野之内元陣屋取建人數差置候

様可被致候

一東蝦夷地

エトモ

出張陣屋取建人數差置東蝦夷惣躰之援兵ト相心得候様

可被致候

右者阿部伊勢守殿御差圖ニ付申達候條可被得其意候

卯四月

一松平伊豆守様に

覺

六八五

箱館表御警衛場所之儀ハ七重濱より木古村迄持場之積

右者阿部伊勢守殿御差圖ニ付申達候條可被得其意候

之事

卯四月

一有川村

右御城中之口に家來呼出箱館奉行支配組頭河津三郎太

元陣屋取述人數差置候様可被致候

郎申渡候事

四月廿五日本藩管轄地より納入すへき米金の制規を變更し貢米は壹石代金壹兩に換算し納金は錢壹貫文中三百文を扣除し納附するの制に改められたき旨を幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

越中守相模國御備場御用被仰付相模武藏國之内御預所被仰付候付而ハ國許急連ニ大勢之人數呼寄武器を初糧米之運送等ハ不及申急場之儀ニ付大砲備船等數多於御當地も製作申付別而造費も相當申候其外御場所之手入砲器居付陣屋修補等被是之出費茂不少いづも不案内之土地ニ候得ハ備向爲辨利無據於地方扶持人等茂數多召抱旁以莫太之入料ニ御座候乍然格別之御用相勤候事ニ付更哉角申上候譯ニハ無御座候得共御預所取扱方殊外紛雜之調筋ニ而諸事大ニ手間相懸天々役人をも相應置候處是迄越中守方ハ御預所無之候付一切相馴不申其上嚴密之御法則郡村ニ貢り候儀ハ猶更其向ニ應能取扱馴候者ニ無之候而ハ難相辨候處國許邊土之事而已仕馴御預所向之仕法全體不知案内ニ候ハハ何茂相馴不申既ニ御物成諸上納伺御届等之振合相違被是ニ而時節後レ相成候事も有之重キ御用柄役人共甚以恐入當感罷在候殊ニ備向之儀茂數多之人數諸手配筋並浦船水主人足賄等之手當ニ至迄夫々急連之用意多端之事ニ而大造之手數茂相應り兼而役人共世話行届居不申候而ハ急場間欠ニ相成可申處前文之通地場御用繁劇ニ相混萬一御備場之要務届兼候様ニ茂成行候而ハ以之外之儀重疊懸念仕候且又松平大和守様御領中追々異船渡來數十日滯船仕始末御人數差出候付而ハ村々人別夫役ニ罷出銘々其日々々之食料等ハ被渡下候得共何をも家庭を取費數十日詰切居候事ニ付老幼家内之養育相立不申

相應ニ跡扶持をも被渡下被是聊宛とハ乍申數千人ニ渡り候而ハ御領主方之入費茂莫太之事ニ相成左候而茂於村方ハ農業漁業共ニ肝要之時節を失自然此以後も右様之儀有之候ハ、遂ニハ必至度零落ニ陥り不得止事他所奉公日雇稼等ニ罷出離散之者不少様相成其未荒地を茂出來仕候而ハ重御年貢を始備手夫役等ニ至迄必定差支可申尤御先領ニ而ハ御城下附村々より別段助夫等茂爲有之様子ニ而乍難澁も免哉角取續申候得共遠國懸隔仕居候而ハ夫等の取扱も出來兼申候付平素村方撫育行届衰弊ニ至不申様手當第一之事ニ御座候得共御預所ニ付而被下置候口米口永之儀ハ米壹俵ニ付大略壹俵永壹貫文ニ付三拾文宛之御規則ニ候ハハ誠ニ聊之儀ニ付手當ニ仕候程之儀も無御座越中守於手元ハ前文之通大砲製造等を始品々莫太之入費人數給扶持等之取賄八年々餘計之出金ニも係り此上之儀ハ何分自力ニ不申扱々當惑之次第ニ奉存候依之奉願候儀恐多奉存候得共御備場御用別段之譯を以以來毎歲御預所御物成石壹兩之割ニ而上納御差許被下永上納之儀も右ニ準壹貫文ニ永三百文之撫ニ被爲拜領此外小物成諸運上高懸り等浮物成分ハ惣而免除被仰付一手限ニ引付取計候様被成下候儀ハ被爲叶間敷哉左候得ハ右有餘を以村方扶助筋を始違作之節價上納之備ニ茂仕平素御手數之難澁も薄相成萬端無混雜簡易ニ相濟防禦筋專ニ相勤候様罷成別而難有奉存候然上八年々豊凶ニ不拘毎歲石壹兩之割合並永上納之儀も右ニ準相納郷村道橋水路堤樋新地石垣等之修補老養米被下候分等總而引請相辨候様可仕候一昨年以來國許大勢呼寄大砲玉藥備船糧米等之手當實ニ莫太之事ニ而此上ニも人數之儀ハ折々交代をも不申付候而ハ難相成遠國往返之造用給扶持等も不大方此後之入財ハ猶更難量只今分ニ而國力及疲弊候而ハ肝要之時節ニ至相勤可申哉ニ付種々工夫を擬何事も平常ハ簡易無造作ニ而相濟御手當筋專一ニ心懸自然之時御用ニ相立候様仕度奉存候間不得止事右之趣御内意申上候不容易儀ニ御座候得共何分出格之御評議を以可然様御沙汰被成下候様奉願候右ハ自然類推之御差障ニも相成可申哉ニ候へ共御相備御三家御預所ニ比候ハハ越中守御預所之儀高並よりハ大ニ相減人夫等も甚及不足申候其上川越様御請持之時分ハ御陣屋元より便利之近村五ヶ村程有之候を遠村ニ御引替被附置候付而ハ旁都合不宜急連之夫役差支候付以前之村方御引戻御預替被成下外ニ貳拾九ヶ村程加村をも被成下候様との趣奉願置候處預職武藏國之内ニ

而高二千五百石餘增御預所被仰付候へ共遠村殊ニ拾六ヶ村ニ而脇並よりハ甚相減居候事ニ付格別難澁之譯を以前文上納方願之儀何卒別途之御評議被成下候様仕度且又前文之通御預所手數之儀不一方繁劇ニ付而ハ於江戸表も別段役所取建受込申付置地元之儀ハ猶更多端之手數ニ頁り夫ニ應數多役人も相應置候得共兎角不案内ニ而捌兼誠以迷惑困窮之段役人共頻ニ歎訴仕候尤昨年之所ハ御預所被仰付初年之事ニ而私領引付ニ奉願置少ハ簡略ニ而相濟候得共當年よりハ御料並之取扱ニ相成候付諸般之手數繁多ニ相成彌以當惑仕居候付幾重ニも願之通被仰付被下候様奉希候此段申上候以上

(本文申請は十一月に至り再
申ありしも聽許を得ざりき)

細川越中守家來
四月廿五日

福田源兵衛

四月廿八日幕吏川路聖謨水野忠徳等相州沿岸の本藩警備地を巡視す

〔相模國御備場御用一件〕

去月廿八日川路左衛門尉様水野筑後守様御列浦賀御臺場等御見置之上御乗船 此方様御受場御臺場ニて爲御見分被成御戒鳥ヶ崎ニ而御上陸同所御居付之 公義御筒一通り御見分之上行軍筒八挺持出置候を被成御尋候付海防等之儀ハ兼而御渡被爲置候御書取之趣を以御返答仕海防之爲問之筒ニ備置輕辨取扱振等之儀ともニ一通申上候處支無之候ハ、仕態之様子等被成御覽度との儀ニ而引廻より簾を揚取扱振等仕形仕入御覽申候處誠ニ自在之仕懸ニ而初而被成御覽打方之模様等も一通り御尋ニ而眞玉ニ而中リ打早打等も修行仕未至而未熟ニハ御座候得共若御望ニも被爲在候ハ、何れも難有らり後日之勵共相成可申候間打方仕せ入御覽候儀も支不申段申上候處御急之事ニハ候得共珍敷仕懸之御筒故被成御覽度との事ニ而御番所に御案内仕直ニ一挺五發宛八挺一同中リ打之早打仕候處殊之外手揃能中りも宜被是御感心被成候段被仰聞候而應變早打之儀も修行仕候段申上候處迎之事ニ其儀も御所望被成度との御事ニ而其節ハ空炮ニ而應變早之操打仕候處皆様御番所御出浮ニ而被成御覽誠ニ手練之業ニ而入々被成御感心勇々敷事と被仰聞其外組頭衆勘

定業を初末々之御方迄も度々御尋ニ相成夫々龜ヶ崎御見分ハ御見合直ニ觀音崎に御出之御途中ニ而右行軍筒者御國ニ而いつ比出来候哉と被成御尋候付大概三十四年位ニも相成可申哉と覺申候段御答申上候處治世ニ相成至而之近製賊と被仰聞右筒打方いたし候而々之役名何と申候哉と御尋ニ而大筒手と唱遠敵ハ大炮ニ而相防間近ニ相成大炮手ニ及不申節右輕辨之筒を以手早ク打拂候備ニ仕置候段申上候處不怪嚴重之御備ニ而野戰筒ニ之屹ト宜辨利ニ相成可申候下田表杯ニも相備申度事と被仰左候而右之筒之江戸表ニも御備ニ相成居候哉と御尋ニ付江戸ニも段々備置大津陣屋許ニも少々ハ備置申候被是車臺等を加三百挺をも可有御座哉と御答申上其外西洋和流之大炮も數挺取寄置御通り筋之船藏ニ圍置申候間被成御覽候ハ、御案内可申上と申上候處可被成との事ニ而四戸前共ニ懸ニ被成御覽臺之様子等も委敷御尋ニ相成一休御功熟之様ニ相伺候處々所々々ニ而誠ニ 御大家様大造之御備驚入たる事共ニ而御國許方茂取寄ニ相成候哉と御尋ニ付請持被 仰付候即下急場之儀ニ付總而江戸表ニ而新規出来仕候此内ニハ側備之筒様打ニ取寄候茂有之追而之江戸表に差送候分も有之又龜ヶ崎鳥ヶ崎に茂此内居増之心得ニ而御内々浦賀御奉行様は相伺申候處右兩所之儀之些御様子も有之候付追而之事ニいたし置候様御内示之趣も有之候付御覽之通圍置申候段申上候此儀ハ前夕川路様御旅宿に相親候節御受場之儀付何ぞ被仰立置候儀歟又之存寄候筋も有之候ハ、何事ニよらず無腹臆於場所申達候様御用人を以被仰聞候付御臺場御模様替一件申上候都合ニも可相成り相含右之通申上置候事ニ御座候左候而觀音崎屯小屋ニ入居候合一臺之筒も被成御覽合一之譯御尋被成候而國許ニ而ハ和流重ニ而流儀も様々異り自然之節區々御座候而ハ不辨利ニ付何流ニ而茂無差支打方仕候様諸流一致し申談ニ而出来仕候筒ニ付合一七名付申候段申上候處夫之能御仕法ニて何卒西洋流ふとも合一ニいふし度ものと被仰觀音崎ニ而も大炮打方御所望ニ而二發宛打方有之候様度々ヒストン移兼候筒も御座候得共用意出来之場所を問拔ふく打候様示合置申候間各別問拔ニ之相成不申矢通ハ何を茂宜既ニ二三發ハ大船ニ而候得之丈夫ニ當り候様之矢筋も有之是又御感心之段被仰聞候葉子も同所ニ而差出申候處御請ニ相成夫々十石旗山之様順々御見分右ニヶ所之海岸之模様專ニ御見分發炮ハ御望無之同所ニ而川路様水野様御咄ニ何様觀音崎方

此方角第一之要地ニ而自然之節ハ洋中ニ軍艦之三四艘も御備ニ成候様有之候ハ、屹ト防ニも可相成との趣御後口より拜聞仕居能間合も御座候ハ、追々見込之趣等も中上度始終心懸居申候得共何方も御念キ且御同勢も多都合不宜候旗山より御乗船之節御同船奉願船中ニ而可申上ト相合居申候得共御兩所御銘々浦賀御用船ニ御乗組ニ而其儀も出来兼申候間於猿島卯ノ先御見分之節同所得失之儀を初御模様替ニ而被仰立置候趣難澁之次第共一通申上御願書寫も持参仕差出可申哉と相伺申候處兩條共ニ疾ク御承知ニ相成寫差出候ニハ不及富津隠洲之模様も委敷御尋ニ相成程圖面トハ以之外遠手廣々相見御願立之御主意も御尤思召候得共此所大切之場所ニ而如何卒工夫ハ有之間敷哉と被仰候付不案内ホラ越中守に被任置候御場所之儀ニ而何レ之節ニも御爲ニ可相成見込茂御座候ハ、可申上心得ニ而重役初追々見分も仕種々工夫を凝シ田戸之鼻を猿島迄築切之事も見立申候得共莫太之御入費之懸り候而猿島と富津之間二里程も相隔り於此所炮丸且人力ニ及候手段絶而無御座不得止孤猿之難澁御願申上置候事ニ御座候將又浦賀杯ニ而ハ軍艦數多御製造孤島助合之爲自然之節ハ沖中ニ浮臺場之御備相立候哉之風説も承申候處一手共相考候處ニ而ハ敵船ハ從來乘方自在を得乍恐 御國ニ而ハ船之造作より御不案内ト申尤乘方敵ニも勝候程ニ鍛練不仕候而ハ利方有之様も無御座彼是急ニ之御用立候時ニ至中間敷其上魯西亞杯之一國ニ而軍艦千艘も備居候哉之唱も有之候得之是非此所ニ而御防留之御仕法付候ハ、船數も敵ニ劣不申様無之候而ハ御勝利有御座間敷然ニ荒浪之場所ニ候得之兼而沖中ニ繫船ニ而御備被置候儀ハ難成總而東北手廣受居候所柄ニ而浦賀湊ふらてハ御圍も六ヶ敷左候而ハ引船ふらてハ自然之節急ニ出船も相調中間敷異船ハ迅速ニ入込數十艘之大船狭キ一方口之湊小船杯ニ而引出等船ニ應候様之御仕法何程ニ可被爲在哉と申上候處成程軍艦ハ水入深く帆ニ懸り不申内ハ不自由ニ而急ニハ引出等も出来兼可申被是先之難事ニ而困候との御噂ニ付何も奉願置候様々宜敷御評議被仰付被下候様奉願置申候且又猿島御登り懸當番更代之節難船之族も爲有之哉之様子ニ候處何方ニ而候哉と御尋ニ而大概島近クニ而舟かやり仕合と乗込之者共游少々心得居候付波高ニ而漸島に游着命之助り申候得共游不心得者又之冬分杯一入恐怖仕自然之節ハ援兵致之兵等差向候儀風波強候節ホト別而室勞仕候段申上候處 御

國ハ水陸各別連者之由ニ候得共外々ニ而ハ猶更困候取柄と被仰候付國許ニ而も水邊之者ハ游も執行仕候得共連在杯ニ住居仕候ものハ一向ニ心得不申候夫等も數多相詰居甚心遣仕候段申上候處香水茂不宜様子ニ相聞何方ニ井戸有之候哉と御尋ニ而井戸に御案内申上汲せ候而入御覽候處段々御濱中方疊紙之水吞等御取出御試被成程鹽氣有之と被仰候御方も有之又能鹽按排とも申人も有之其節ハ平常カも鹽氣薄方ニ而是ニハ些心配仕候尤冷ニ而ハ左迄之儀ハ無御座候へ共湯を煮又ハ飯ふと焚候而ハ大分鹽辛ク相成何分不被用候間兼而食用ハ總而地方運申候付風波數日ニおよび候得之追々糧物等難澁仕儀間々有之甚以迷惑仕候段申上候併猿島之儀ハ成丈御生し被成度御振合ニ相聞候間此條之御評議如何可有之候哉と相考申候事

五月朔日

吉 田 平 之 助

〔相州御備場御用一件〕

公義御役人衆御座場御見分有之候節申述候口上振左之通

御名受持之御座場々々遠敵防留候儀見込無之段之阿部伊勢守様は御届申上置候趣御座候間海岸防禦之手當専ら被申付候尤親音崎之儀之要地之御座場も奉存候間 公義御箇之外ニ大砲居付置申候付御案内可申上御模様次第ニハ打方茂仕可奉入御覽候其外御座場之 公義御居付之御箇迄ニ仕置持出置候臺乘輕便之筒異船之模様ニ應シ海岸に押し打拂或切所ニ而打留候覺悟御座候外ニ和流之大砲並船臺等之船藏ニ圍置異船ニ應し御座場ニも居付右船ニ茂乗せ組相防候筈ニ御座候御覽被成候ハ、御案内可申上候扱又海邊下賤之巷説ニ之此表御座場御仕法替ニ相成候哉ニ専ら相唱申候自然左様ニ茂御座候へハ筒臺等之便不便茂相替可申候付先右之通ニ仕置御模様ニ應製造被申付筈ニ御座候當時御座場に相詰居候者共之國許ニ而和流而已積古仕西洋法之此節御座場に相詰候後俄ニ積古仕居候付いまた不鍛練ニ御座候間不都合之儀も可有御座候此段之前以御願申上置候事 但猿島ニ而茂同様申上候事

一自然御船藏入打方御所望茂難計其節之左之通
此筒之試打仕候節少々損所出来仕急速獨立申付候管候へ共若説之趣茂御座候付御模様次第鑄造申付管御座候尤いつを
茂聊充之損所ニ付自然變ニ臨ミ候得之打方差支候程ニ之無之損所無之筒茂有之候間右之筒之打方仕御覽ニ入申儀茂支
無御座候

右之通申出和流之内打方差支無之御筒一二挺兼而手數等申談習練有之打方有之候様可被致置候

一觀音崎之方御巡見ニ候へハ子細無之候得とも猿島に直ニ御出有之候得之不都合ニ相成候付左之通

當島御臺場之儀之御覽被爲成候通旗山之出崎より猶又入江ニ引入富津之出崎と之喰違ニ相成中央乘通り候異船打留候
儀之何分見込無之地方二十丁余茂離居候孤島にて風波等之節之別而人數之進退出来兼候付奉願置候趣茂御座候尤遠敵
防留出来兼候儀之當島ニ茂限り不申外々之御臺場茂同様ニ付是又御届申上候趣御座候付海岸防禦之手當申付置候當時
ニ茂輕便之筒而已居付或之持出置專海岸之手當仕置候付御案内可仕御模様次第打方も仕可奉入御覽候
持出置候間右之御臺場内ニ合一臺野戰筒行軍筒應變臺等不殘持出飾付置候管之事

五月四日幕府阿部伊勢守本多越中守遠藤但馬守江川保之丞等の内海臺場建設大砲鑄造の功を賞
す

〔癸丑以降秘録〕

五月四日

金七枚

時服三

御代官

御鉄地方

内海新規御臺場之儀ハ不容易大業ニ候處其方父太郎左衛門に繩張御用被 仰付且又筒鑄立並車臺其外付屬之品等製

見習 江川 保之丞

造之儀をも御實備專務ニ深ク研究致シ格別入精相勤今度御成功相成候段莫大之骨折被思召候其方儀引續右御用相勤
候ニ付旁共方へ出格之拜領物被下之

時服十

同 六

御座間

阿部 伊勢守
本多 越中守

右内海御臺場御普請並大筒鑄立之御用相勤候ニ付於御前拜領之

八丈編五反

遠藤 但馬守

右同斷御用取扱候ニ付於奥拜領之

五月十一日幕府は軍制改革の上は講武場に於ける砲術槍劍水練等總て軍法を以て訓練すべく且
砲術は専ら西洋流を教授すべき旨を達す

講武場總裁
海防掛御目付

於講武場砲術槍劍水練等積古相連候得共御軍制御改正御治定之上之御軍法を以訓練被仰付候間唯今より其心得を以積
古相始候様可致候事

但砲術之儀之諸流打交積古致候而ハ訓練整兼可申候間於講武場西洋流一樣可被致候仍之教示方名前取調可被申間事

五月十一日

五月廿七日幕府は大砲射撃練習をなさんとする時は出願に及はず唯豫め海防掛目付に照會して
日限を指定すべき旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

松平伊賀守様御渡

大目付に

大森村並徳丸原ニおゐて大砲稽古之儀是迄願書差出願濟之上稽古いたし來候處已來ハ願書差出候ニ不及候間日限等之儀ハ前以海防掛目付に承合候而稽古候様可被致候尤萬石已上之面々爲見置相越候儀ハ前日迄ニ可被相届候但御旗本之面々並御家人子弟等師範之者稽古ニ付爲手傳相越候儀も不及届候間前日迄ニ御目付に可被相達候

〔癸丑以降秘録〕

目白臺御屋敷ニ而折々人數訓練員金太鼓も被用旨
右御伺濟ニ成ル

五月廿七日木藩相州警備地据付の大砲稽古は一挺一ヶ月一發の割合と定む

〔相州御備場御用一件〕

御臺場ニ而御居付之御筒稽古打之儀付而ハ追々及御取遣御出方積之書付も被差越委細御申越之趣相達候處共以前大島久平に見込承せ候處別紙引切書之通一ヶ月一挺五發コメ一ヶ月之御出方六百兩程ニ相成餘り過當ニ付素方左様ニ可被仰付様も無之依之段々被囑合治定之處ハ追而御國許方可申來候得共當時之形勢ニ而一切稽古打無之候而ハ御外聞も如何ニ付先ツ來月方御筒一挺一發宛之積ニ積古被仰付旨候條早々可有御達候則別紙荒方見積之書付も相添申候左候而稽古打之事ニ付大砲杯之別而空砲之方可然候間玉丈ク之御出方ハ藥ニ直又ハ打藥三斤茂入候御筒ハ壹發壹斤宛コメ二發も稽古いたし彼は一ヶ月之御失費拾兩を見當ニ内輪之繰合之いる様共引廻杯之見込次第との儀も御申談候様可申達置候以上 五月廿七日

〔此一行本朱書〕
本文之趣夫々承知いたし候段六月三日之日附ニ而返事來

井上嘉左衛門殿

辛川孫之丞

〔八上書〕

廣島

打人五拾人

一壹挺

十五挺

壹發分

一空丸貳貫五拾日

一割藥五百日

一打藥貳百六拾七匁

一貳挺

十貳挺

貳發分

一空丸貳貫五拾日

壹發壹貫貳拾五匁

一割藥七百目

壹發三百五拾日

一打藥四百目

壹發四百目

一六挺

六斤

六發分

一實丸四貫六百貳匁

壹發七百六拾七匁

安政二年

一打藥壹貫貳百目

壹發貳百目

一壹挺

一空丸貳貫五拾日

一割藥五百目

一打藥貳百六拾七匁

一壹挺

壹發分

一空丸百九拾五匁

一打藥百目

一貳挺

貳發分

一實丸三百九拾日

壹發百九拾五匁

一打藥貳百目

壹發百目

一壹挺

壹發分

一壹挺

壹發分

六九五

右同五百目

ホーキツスル

カノン三百目

大變三百目

一實丸三百貳拾五匁
一打藥百六拾日
一壹挺
壹發分
一實丸壹貫三百日
一打藥四百日
十五發
玉重
拾貳貫九百六拾貳匁
藥
四貫六百九拾四匁
貳貫九百八拾四匁
內
壹貫七百日
觀音崎
一壹挺
壹發分
一空丸六貫百七拾日
一割藥壹貫三百三拾五匁
一打藥壹貫六拾八匁

右同貳貫日
打藥
割藥
打人五拾人
八拾斤

一壹挺
壹發分
一空丸四貫八百貳拾日
一割藥壹貫日
一打藥八百日
一貳挺
貳發分
一實丸六貫貳百日
壹發三貫百日
一打藥貳貫百三拾六匁
壹發壹貫六拾八匁
一貳挺
貳發分
一實丸四貫六百日
壹發貳貫三百日
一打藥壹貫六百日
壹發八百日
六發
玉重

六拾斤
貳拾四斤
十八斤

貳拾壹貫七百九拾匁
藥
七貫九百三拾六匁
五貫六百壹匁
內
貳貫三百三拾五匁
鳥ヶ崎

打藥
割藥
打人貳拾五人

一玉六貫四百八拾壹匁
一藥貳貫三百四拾七匁
但當所ハ人數少候付玉藥共磯島之半高ニして行軍合一
等之御筒積古被仰付管候事
惣合

玉四拾壹貫貳百三拾三匁
但鐵鉛打混
六兩壹步計
藥三兩貳步計
金高
拾兩計

鐵足とも

一行軍筒打藥貳貫五百日
覺
安政二年

但人數百二十五人壹發貳拾日宛ニして本行之通
一同七貫五百日
但人數右三發宛ニして本行之通
○一同九拾貫日
但人數右同十二度三發宛ニして本行之通
一大炮打藥六貫八百日五分
但拾九挺一發宛ニして本行之通
一同貳拾貫四百壹匁五分
但右同三發宛ニして本行之通
一同三拾四貫貳匁五分
但右同五發宛ニして本行之通
○一同六拾八貫五匁
但右同五發宛兩度分本行之通
○印
合百五拾八貫五匁
斤ニして九百八拾七斤五合
代銀六貫九百拾貳匁五分
此金百拾五兩三朱と壹匁貳分五厘
一斤七匁之見込ニして

右之通ニ相見へ申候事

五月

覺

一金百拾五兩と五匁

但大炮兩度行軍筒十二度打方始硝代別紙積書之通

一同五拾七兩貳朱と三匁七分

但大炮兩度打方玉代本行之通

一同九兩壹步

但行軍筒百貳拾五發宛十二度分之躰足鉛百目宛之見

撫堂割五分減火繩代共

五月廿七日在府本藩老臣は非常準備金三萬兩積立の件を藩政府に通議す

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候爰許非常御備金之儀壹万兩外無之段之御熱知之通ニ御座候然處明石三郎七カ之内意ニ自然外異等之模様ニより候而ハ御出馬或之上々様御立除申事いつ可有之哉成難計因而猶此上貳万兩程も被差越置候ハ、假令遠路之御立除たり共御丈夫ニ可有之段申出候申談候處至極尤之内意ニ付孫之亟に茂申談是以同意ニ付及御相談申候御心配之儀ニ御座候得共御同意御座候ハ、いつま之御銀より被差登候様尤是ハ變ニ臨候節カ外ニ手ハ懸ケ不申事ニ付いつ方ニ被圍候も同様候間新ニ御出方と申ニ而ハ無御座候委細ハ孫之承三郎七より同僚中へ申向候付筋々より伺出可申宜敷御差圖可被下候被仰談之趣之御便ニ被仰知候様存候以上

五月廿七日

木村次郎左衛門

溝口藏人

御勝手方也

平野九郎左衛門殿

大木舍人殿

向々此許吟味方集承り合せ候處現金之千兩余ニ而各別心當ニ相成候程之儀も無之此段も御含ニ得貴意置之候以上被仰越通致承知右付而ハ明石三郎七此元出立前九郎右衛門見込之趣申出尤之儀ニ付同意いたし其御許ニ而得斗相伺候様及噲置候事ニ付御紙面之趣を以分疎御奉行及勘頭に茂申談候様致口達置候付いか様卒御銀繰申談伺出可申候間御安心ニ相成候様囑合候含ニ罷在候間左様御聞置候様存候以上

七月八日

二百御端書之趣具ニ致承知候已上

六月三日閣老阿部正弘は本藩留守居を召喚し琉球に於ける外人應接に關し薩藩の請求を納れ筒井政憲并戸覺弘等をして時宜に應し薩摩に赴き垂示せしむる所あらんとする旨を達す

〔相州御備場御用一件〕

筒井肥前守
井戸封馬守
川路左衛門尉
水野筑後守
伊澤美作守
鶴殿民部少輔

覺

松平薩摩守儀琉球國に英吉利西佛蘭西亞米利加船等渡來條約相濟候國茂有之候間取計振等都而皇國之御取扱ニ准し處置いたし不申候而之不都合ニ有之候間各及應接候條約其外之趣意委細承知いたし度旨申出無餘儀筋ニ相聞候間薩摩守案内次第彼方は相越異船御取扱向之儀一と通及演説候様可被致候其節琉球國之儀茂委細承り候而心得ニ茂可相成儀之申間候積可被相心得候事

六月四日水藩大津陣屋內學問所建設につき諸規定を立案す

〔相州御備場御用一件〕

大津於御陣屋內學問所御取建ニ相成毎月講釋被仰付旨ニ候處新規御取建と申ハ儘功ニ相成可申哉因面明御長屋之内手廣之所を見立別紙繪圖之通出來仕候若シ餘計一枚請込ニも相成候ハ、其節之模様も可有之先右之ヶ所可被仰付哉
一講日之儀ハ三ノ日ニして月二三度ニ御究可被置哉左候ハ、諸事相濟候上開講被仰付ニ而可有御座哉
一今迄文武世話役千原貞米村平之允へ被仰付置候付此節學文所之差押並御書物等も世話之直ニ同人列へ可被仰付哉
一講日出役之儀ハ御奉行御目附御中小姓頭御留守居列座有之其外御物頭以下之御役付ハ聽衆之口ニ座着ニ相成可申哉
一講日ノ之掃除且茶たこ盆等出入之世話いたし候者無之候付別段手傳一人ハ可被差出處此元ハ御長柄鉢之者請込
本行入用之品々之別段ニ不被渡下候而ハ御役所御記録之内分々遣候儀ハ相成兼候付別段ニ可被渡下哉
迎之無之候付先爲試御役所茶番ヲ兼動仕せ追而手ニ及不申節ハ御長柄ニ而も一人從江戸被差越候方ニも可有之哉
但右之ヶ所迄ハ御役所凡二丁程も可有之道具之持運等も有之候付下使一人ハ別段ニ可被差出處是以先御役所方下使
かくり合せを以可被召仕勤之模様ニ應し茶番下使に之少々御心付ニ而茂可被下置哉
右之通御究被置候而ハ如何程ニ可有御座哉

大津

御役所

本行御役々不殘列座之儀之些仰山ニ相見申候付已前龍口並白金ニおるて講釋被仰付節之様子及吟味申候處寛政度之御役々列座無之聽衆之帳面を差出置候へハ銘々ニ姓名を記候迄と相見天保之度々之御奉行御目付御用之透次第爲見繕列座有之白金之儀茂右ニ准御目附出席有之様御書付渡ニ相成居申候相州表之儀一様様子茂遣候付寛政度之見合を以取計ニ相成可然とも一日申談候得共左候而ハ餘り最安聽衆之鼓演水繪仕兼様ニ之有之間敷設彼表ハ御當地トハ違御役々下地御用案ト申儀も有之間敷先之講堂之小形とも可申様ニ願口嚴重ニ御仕懸ニ相成候ハ、一統も屹ト取縮自然ト學問ニ志候様ニ相成可申哉よつて土臺ハ御役々列座被置外御用ニ而欠席之節ハ其儘ニ而被差置候而ハ何程ニ可有御座哉其外之儀之本紙之通ニ而子細有之間敷奉存候

右之通まらへ備置ニ差出候處御役々不殘列座ト申候而ハ種々差障も出來可申哉ニ付天保度之例を以御奉行御目附迄出席之方可然と藏人殿被申間候付其趣高橋彌四郎相州詰御役所根 取當時出府也に機密間根取方申間書付差登候事

六月四日

六月五日水藩戸田忠大夫書を長岡監物に贈り天下の形勢薩藩の事情等を報す

〔先哲遺翰〕

芳思齋讀如貴教去夏御分袖以後茂遠路之御旅中御無難ニ御歸鞍之御義トハ存居候へ共御安否茂可相伺之所繁劇ニ取紛自然御疎遠ニ罷過候段何分御許有可被下候先以爾來御勇猛ニ御起居奉敬賀候野生義も無異ニ消光罷在候間乍憚御降心希候御示教之通去春得拜晤候茂嗚昔之心地ニ候へ共一とせのむかしと相成光陰如流世話之通ニ御座候ハ將又去冬之地震古今未曾有とも可申諸國之變報可恐可愼之時ニ御座候然し天下之形勢人心迄も改り可申兆ニも可相成哉と於此地茂有志ハ此變報却而福とふるべく哉杯一ハ憂一ハよみとひ候糸口ニもと存候ニ思ひきや可改形勢ニも不相成遂ニ只

安政二年

今と相成候而ハ異人之情實茂益御國を見すかし輕蔑ハたし候向之事産相聞え不堪浩歎候所幕府其邊ニ於ても氣を持候
 論之人無之計ニも無御座哉ニ相察候義も御座候へ共兎角に立消ニ相成候様之義も亦不少歟末々士氣モ振候様成形勢
 も不相見此上廟堂之決議如何可相成哉責而ハ斯々も存じ願候義も御座候へ共夫さへ不被行場合天下之御爲ニ過憂此
 事ニ御坐候乍然士豪不堅普請ハ如何程修理を加候而も不益ニ嗚候故先ツ士豪を堅固ニ居而後ニ難作をふそと申所ニ不
 相成候而ハ工匠亦跡戻を恐一圖ニ取掛り兼候場も可有之哉斯中候而も是も又空論ニ落入詰り一變生して後ニ無之而
 ハ有志愉快ハ難得義と被存候往々異人之爲ニ輕蔑ニ逢候義頭ニ相慕候ハ眼前ニ候へハ速速ハ不知何ぞ後年戰爭と可相
 成哉と存候間ふか、まと思ふ命當日此本此惠にむ久ふいさはなければなと、思ひ居候事ニ御座候扱又薩人鯨島云同
 國之古疾も甚以難症從素不容息候所君公大度智勇有之故先つ持廻し被居候義と致感服候義も有之夫れ故害ニも不被逢
 被居候事職と致想像候廉も不少候然し不堪感深事も御座候へ之同藩有志の徒も方今深く謀り遠く慮て要路ニ人を揚候
 工風第一之急務と愚慮ニ及候此所を不考情難忍急連ニ萬弊を除之意ニ而ハ縱令君公如何程英明ニ有之逆も有志意を
 休候時ハ如何程骨細心致候而も國家安泰ニ治り君公意を休候時を來候義無覺束事ニ存候實ニ可憐之甚ニ御座候間右
 藩中有志ニ儲成者ニ御察意も御坐候ハ、極密々々御諭ニも罷成候方と奉存候一體被添那らそ何くも同じ其國之弊害を
 除ニハ此手順之外ハ無之ハ勿論之事ニ候ニ付吳々爰ニ力を盡せ度ものと存候向又天下血を流之時ニ不相成候而ハ東行
 再會難成云云御尤ニ敬服候處於野生ハ左様計とも不被存候貴藩之御形情乍憚致想像候ニ御領民迄人望之歸來候者貴君
 ニ有之職と被存候義も御坐候間五六年を不經再御東行拜願宣話も可相成と密ニよあふひ樂ミ居候依而何職存分ニ而御
 下置も難計候へ共右等之義御含時を御待國家ニ御忠誠を御施之御仕成專要と奉存候去夏初而拜晤而已ニ御坐候へ
 共年來親ミ候中よ且も御親しき心地ニ候故無伏願愚意をも認メ候段はしからず御承知可被下候萬建期后昔御安否伺貴
 側旁草略亂毫失敬御用捨御推覽所希候頓首

六月五日

御親披

長 岡 君

貴 側

戸

川 井

六月七日幕府は時局に鑒みる所あり砲術練習の制限を寛にし西洋流の修業を獎勵す

〔尊攘錄皇武令〕

伊勢守様御渡

大 目 付に

鐵炮角場有之屋敷々々ニ而訓練積古之節空砲打放候玉日之儀是迄平常實丸積古之玉日ニ准し候得共以來百目玉迄積古
 之角場ニ而之壹貫日迄之空砲打放し不苦尤訓練積古ニ無之分ハ只今迄之通可被相心得候

二關八州ニおゐて砲術積古之儀是迄場所ニ寄四季打不相成候へ共術業御引立之ため此度御學場近邊迄も四季打被仰出候
 付向後關八州其外いつまニおゐても四季共積古不苦候間場所相應之業熟練可致候尤打場新規取立等相伺候儀之只今迄
 之通可被心得候

但村立四季打鐵炮之儀之是迄之通可心得候

右之趣可被相觸候

六月

阿部伊勢守様御渡

覺

別紙之趣萬石以上にも寄々爲心得可被達置候事

安 政 二 年

七〇三

大 目 付に

近來異國船度々渡來ニ付而ハ御備向別而嚴重ニ無之候而ハ難相成然慮外夷防禦之儀ハ銃陣專要之儀ニ付與方同心並御徒等西洋傳銃修行可致旨被仰出候右ニ付御筒等も追々張立被仰付候間出來次第御借渡可有之候條此節より其心得を以専ら訓練精出候様世話可被致候尤弓組之儀も右銃隊を相兼修行候様可被致候

右之通大御番頭御書院番頭百人組々頭御持之頭火消役御先手御徒頭並八王子千人頭に相達其段御鐵炮方にも相達候間可被得其意候尤向々にも爲心得可被達候

六月

六月十三日米船一艘下田に來る

〔相州御備場御用一件〕

六月十三日下田表に亞墨利加船一艘渡來之由江戸から申來此許に之不相分候付御支配組頭木多喜八郎様に同廿一日安田孫右衛門罷越右異船之模様御内密相伺候處此節渡來之船者至而小船十七人乗薪水所望之唱ニ而羅紗多と持越夫を揚此方之品物千兩分計求候山下田與方之内ハ浦賀與方に自分紙面ニ而申越候計ニ而表向浦賀御奉行様ニ申來候儀無之薪水所望之譯ニ而外ニ申出候儀無之候付應接もよく何之子細も無之候間不致懸念罷在可然たとへ此後交易御免ニ相成候共御打拂ふと、申譯ニハ相成不申浦賀御奉行様も御見込之由尤申立居候測量之儀茂強而致候儀ニ茂候得者差留候茂却而恐居候様相聞左候得之不怪御弱々様ニ茂相見候得共又左様ニ茂不參ふと、被仰聞候

右之節此方々差而伺茂不仕候ニ此方様御人數減之儀ハ浦賀御奉行様限ニ茂無之實之筋々御聞通之上及御相談御減被置自然之時之江戸に茂少々ハ御備も有之事ニ付決而御懸合ニハ及不申候尤外御三家様ハ御自分として御人數御減之様子ニ付江戸から申來候趣茂右之候間浦賀御役人等被差越御内々御吟味之上御三家之御人數ハ江戸に御申向ニ茂相成候哉之御味も被仰聞候

六月

六月十四日日本藩は幕府より豆州下田に砲壇を築き我管守に屬せしめんとするの風聞あるを以て令達の下るに先たち事狀を陳述して之が豫防に力む

〔相摸國御備場御用付而諸御願御伺等〕

〔阿部様へ去十四日持參例之通より差出候由〕

私儀下田表に用事有之罷越候處同所へ御臺場出來越中守に請持被仰付候との儀專下方風説承中候罷歸候上其趣重役共へ申聞候處御用相動候儀ハいつ方ニても同様之儀ニ而別而越中守家之儀ハ改而申上候ニも及不申格別之御大恩奉家居候へハ如何様成御所柄ニ而も被仰付次第御請申上候ニ而可有御座候然處下田之夷船來泊之港上陸をも被差免置候土地ニ御座候由惣體肥後表之儀ハ西國邊土之風習人質偏固ニ有之夷人杯ニ對候而ハ一入我意を張候弊害御座候而假令兼而申付置候而も事ニ隔變事等引起不申哉之恐者重役共ニおるても何分ニ茂心底ニ任不申候夷人に對穩ニ相心得被より名と致候儀等無之様との儀ハ御委敷御沙汰之趣茂御座候付右等之儀付而ハ昨年委曲浦賀御奉行様迄御願申上御内沙汰之趣茂被爲在候付相州表之儀ハ夫々仕法を付當時ハ能折合穩ニ御座候誠以何をも難有奉安心候追々奉伺候様々御差圖被成下候ハ、御臺場等も彌以嚴重ニ手當仕候心得ニ而大砲等も鑄造申付未居付不申置申候將又追々御願申上候空敷國力を費候儀ハ本意ニ無御座候得共現ニ天下之御爲と御座候得ハ假令國力を盡候共聊厭候儀無御座相州之儀ニ御座候ハ、御差圖次第土地柄相應之儀ハ相動彌以抽忠節候覺悟ニ御座候下田ニおるて前條之通ニ而偏固之者共萬々一戰爭之端も引起候而者一家之儀ニ無御座天下之動亂ニ係り候事ニ付兼而越中守ニおるて致心痛猶更重役共ハ深く奉恐入居候間右之内情乍恐御含被成下候様御取扱之程偏宜奉願候以上

細川越中守家來

吉 田 平 之 助

六月 安 政 二 年

六月十四日英船二艘佛船一艘箱館に入る尋て佛國提督キユイン箱館奉行竹内保徳と應接するに當り和親條約締結の爲め本國より軍艦を差遣すべき由を語る
〔相州御備場御用一件〕

〔此一行本朱書〕
卯六月晦日伊賀守殿立田録助を以上ル

〔此三字本朱書〕
六番印

佛蘭西船總督應接仕候儀申上候書付

竹内下野守

新藤沼藏
力石勝之助印
安間純之進印
海老原武治印
應接掛

一昨十四日異船三艘渡來仕候付支配調役下役其外指遣相糺候處内二艘之碇晴利船一艘ハ佛蘭西國軍船ニ而總督アトミ
ラール官ギユイン名乗組罷在薪水食料欠乏ニ付乞受且奉行ト面會いたし度旨申立候間翌十五日調役力石勝之助其外役
々差遣薪水食料ハ可給奉行面會之儀之指而用向も無之候ハ、相斷併面談不致候而之不相成儀ニ而も有之哉之旨申遣候
處右之兼而國帝方申付有之何國ニ罷越候而も其地々々奉行に面會いし候之畢竟其國を敬ひ候自國之禮式ニ而且面會
無之候而ハ自然隔意之姿ニも相聞候間可相成之面會いたし度其上御國とハ信義を茂取結度國帝所存ニ而既ニ江戸表に
使節船差立此頃之定而條約も可相整事ト存居候旨申立候由罷歸申聞候間右使節船差立方始末委細之儀心得居候哉否可
承糺存面會之儀承届候段猶申遣候處今日總督并兩船將上官共十人上陸御役所ニ於テ面會仕猶相糺候處條約取結之由

又御國に差向使節船之廣東に罷越無程江戸に罷出候積右使節よ之三ヶ月前出港ニ而面會仕候段且別船病人養生之爲上
陸御免之儀之深難有仕合御仁澤之趣之具ニ國帝に茂申遣あく然處魯西亞戰爭之爲近日別船一同出帆可致心組之處有病
人追々快氣ニ之候得共未二十人程本復いし兼勿論廿日程相立候へハ再渡仕候間猶夫迄差置吳候様懇願申出候間承届
候處厚感佩仕候趣申出候先達而同國シビル船將面會之節取扱振之儀外親睦相濟候國々共事持候間茶多葉粉益而已ニ而
菓子を茂不差出候得共總督之高官ニも有之且長崎表等ニ而之取扱振も相分兼候間一同に手輕之菓子差出申候右之最早
浦賀邊にも渡來之程之難叶候得共若哉御含ニ茂可相成哉と不取敢日記相添此段御届申上候以上

六月十六日

別書拜啓過日御内含迄申上候佛船江戸海に入船可致との趣御届等御下ケ無御座候付織部殿に申談尤日記之方之要用之
々所而已書扱貫則別紙兩通御廻シ申上候右ニ而御承知可被成下候尤右船之當春崎陽に相廻候舟ニ之無御座山當三月中
長崎に渡來願意申立候佛船も英異同様之取扱之御下知到着以前ニ同所を出帆之姿ニ相聞申候何歟油斷成兼申候御賢察
可被下候右申上度如斯御座候謹言

七月十六日

佛蘭西碇泊日記之内

六月十六日

一本上刻佛郎西アトミラル并シヒル船將ウキルギニ一船將上官共都合拾人御役所に被出候間下野守其外役々出席一ト通
挨拶之上應接左之通
一今日初而御面會いたし太慶候兼而國帝方被申付候故罷出候儀ニ而御當國と親睦定可而相濟事ト存候
一定約相整ふ上之五ニ相親むへし
一國帝方定約取結ひの爲使節差出當時廣東ニ罷在無程江戸表に相越右相濟候上ハ此所に茂罷出哉ニ存候間御懇意ニ被成

安政二年

七〇七

- 下度候
- 下野守
- 一いつ頃何所ニ而右使節ニ被逢候哉
- アドミラル
- 一三ヶ月前瑪瑙ニ而面會いたし候
- 下野守
- 一アドミラルニ之北海に被往候哉
- 北海に之不相越瑪瑙當所に相越中候

〔相州御備場御用一件〕

當六月十四日箱館表に致渡來候佛郎西軍艦總督アトミラル名キユイン人より申聞候由日本ト信義をも取結度國帝所存ニ而直ニ江戸表に使節船差向候由尤軍艦四五艘も可參趣最早本國ハ三月中ニ出帆之様子ニ相聞申候右之段承込候付爲御内令申置候兼而無御油斷御心得ニ相成候様被致度御内密申進候様豐前守被申付候段去ル十九日御用人保田茂左衛門梅原十次郎申來候付平之助儀直ニ浦賀御役所に罷出豐前守様は御逢相願船之模様且御備向心得方等之儀委細相伺候處此節之儀之箱館表に渡來之佛郎西船同所御同役様御手許に直ニ中立江戸表に茂相廻り候との趣先ハ取留候儀ニ付御四家共ニ御内沙汰ニ之相成候得共餘り渡來之時節も遅延ニ及び尤參懸廣東之様ニ相廻り候様子ニ之相聞候得共夫ニ致候而も隙取候付事實何程ニ可有之哉御不審之趣被仰聞候付既英吉利一同佛郎西茂長崎箱館兩港ニ入津御免之御模様ニ御座候處同所ニ而ハ場所柄等氣ニ入不申ニ而茂可有御座哉と相伺申候處當四月佛船一艘下田表に渡來薪水食糧等乞候由之處下田之亞墨理加に御免之場所ニ而其國ニハ長崎箱館之兩所を御免ニ相成候間差寄欠乏品當分之貯丈下田ニ而御渡ニ可相成其餘之儀之右長崎之兩所に參り申談候様御論ニ相成候由之處不怪相喜欠乏之品ハ亞墨利加に御免之場所ニ付下田ニ而ハ一切相斷直致出帆候様子ニ付三月本國方出帆之船茂其趣承知いたし候ハ、此表に相廻り候儀之見合も可致候得共遠行遊ニ相成候事ニ候得之一旦之參り可申哉左候ハ、下田ハアメリカカ開候港ニ付必定當所歟

江戸海に乘入可申御見込之由被成御時付若當御關所を乘通内海に乘込候前茂相見候ハ、伊豫守様御在番中之通是非當港に御懸留之御覺悟ニ茂被爲在候哉當手人數之儀も御蔭を以平常之手細ニ相成漸々居合穩ニ御座候處自然之儀も御座候得之餘り手薄ニ付來月始頃ハ國許方出立之人數も少々參着仕管御座候得共差寄急場之儀ハ江戸表方引付置候様ニも可仕哉何様一應御見込を奉伺重役共にも可申遣心得ニ御座候間諸事無御遠慮御内教之程奉願候段申上候處伊豫守様ハ當表限船懸留候儀御受申居候得共商船とハ遊手廣之海路迅速ニ乘込候を小舟とて容易ニ懸留應せ候様も無之其見込無之儀を假初ニ御請申上候而之役前難相濟候間一旦御役御斷之内意ニ茂及候處涯分を盡手ニ不及儀之御聞通ニ相成御自分御見込ニ被伺置候間不束なら御請仕居候事ニ付強而懸留と心得ニ之無之候此方様御請場御手當之儀も兵端を聞く唱ニ而罷越候ハ、別段之事ニ候得共穩ニ通信願之譯を以渡來之趣ニ相聞候得共豐内海に乘入候共無用之出費を被懸懸々御人數増等之手當致候ニ之不及矢張當時之儘ニ而警衛向等一致之中談肝要ニ被思召若又船之模様ニ應御人數不足ニ及び候ハ、御陣屋有限出張相守候様萬々一渠方理不盡ニ亂妨狼籍等におよび不得止戰爭之勢ニも相成候節之其期ニ臨御申談之筋も可有之強而大勢ニ而必勝と申ニ而も無之往昔カ小勢を以大敵を破候例茂聞々有之却而大勢ニて兼而之示合屆兼居候へハ手誼不覺を取候哉も難計候付御自分御組方初御手人數と申候而も誠穩之事ニ候得之於物場之指揮抑揚存分ニ行届一致いたし候様專ニ御心懸自然手ニ不及節之打死いたし汚名を取不申様覺悟いたし候外無之候間臨時異變之節ハ御請場も御同様申合置候様有之度仍而此方様御人數御手當之儀ニ付若いつ方よりそ問合等有之候ハ、豐前守に伺候處右之通御人數増等ニ不及段御差圖ニ相成候趣を以相答候様被仰聞候第一御懸念之儀之津輕御領分之様子杯御承知ニ相成候得之佛郎西人追々上陸役筋之制方茂不聞入自儘而已振擲四敷事ニ相聞自然當浦杯ニ參り碇泊いたし候ハ、必定所々に上陸不法相働可申右様之節現在看々其分ニいたし置候儀之御組方共ニ被對候而も何分難被忍一向ニ當時之御處置中ハ制方等無御構番兵杯不被差出候得之氣易事ニ候得共又左様之時ニ茂至兼番兵出張候上ハ嚴重ニ制方不致候而ハ其詮茂無之而已ふらず腫物を扱候様ニ而ハ却而災を醸し心遣不少其以番兵之心得六ヶ數何レ卒御差

分無之候而之取扱振大ニ困窮之次第ニ而此一條ニおゐて兼々御家勞深御心配之段被仰聞候付御懇切之御示厚御禮申上右之趣乍恐御尤至極奉存候既ニ當手之面々も田舎者之偏情別而我意を張候事ニ付兼而重役共初右等之論方其心配仕追々御歎願茂申上候通御座候處偏厚御含被成下御取扱之御儀を以前文之通當時之諸事居合茂付候方ニ而越中守初重役とも安心之場ニ至御恩庇如何計難有奉存候別而越中守家筋之儀之御大恩も有之事ニ付備向龜漏之儀等無之様追々申付越重役共も不爾示方も仕候儀ニ御座候へハ職之事も憚を不願奉伺諸事御差圖ニ隨辨分を盡出精仕當時少人數ニ御座候得共自然不意之變茂有之節之前々被仰聞候通不成ふらいつまも必死之働仕候覺悟ニ罷在兼而蒙力一致之示合專ニ心配仕居候儀ニ御座候然處近來承申候得之誠之若説ニ之可有御座候得共下田表之儀異船頭ニ入港いたし候付而ハ御座場等も御取立ニ相成専當手ニ請持替可沙被仰付哉之取沙汰折節越中守留守中之儀ニ茂有之重役とも一入心遣仕候當請場之儀ハ追々御懇篤之御示教を蒙り何事も御禮申上越中守越度之筋等無之様心底不爾奉伺御懇慮之御示教被成下安心仕居候處今更ニ至萬一請持替等被仰付候様にも御座候得之誠ニ十方を失ひ當惑之次第ニ付前文之情態等一通相認當請場之儀ニ御座候へハ縱令國力は盡候而も天下之御爲筋にも相成候儀之如何様にも相働可申趣伊勢守様御手元ニ歎願書も差出置候儀ニ御座候間何卒御含被爲置不相變御膝下ニ而御奉公仕候様ニ御取成之程奉願置候段申上候處自然之節之御覺悟之次第ハ至極御同意之事ニ而却而御人數少之方御示合も熱合御利方にも可相成哉ニ付隨分共一致之中合此上心配いたし候様御家之儀之公邊ハ茂御細切ニ而御自分ふとも御便ニ思召候事ニ候得之容易ニ御備場替等之儀有之間敷自然右縣之儀承込候ハ、兼而相合居及候丈之儀之御心配可被成候間必重役方は茂心遣無之様内々申向々々皆被仰聞候万端御家之儀之格別ニ御心配用誠御丁寧之段入ミノ被成御感服何事もク様無御馬藏御打明御禮合被成候様有之候得ハ實ニ天下之御爲筋甚以被成御太慶候間御秘録之事ニハ候得共心組ニ成候事も可有之候間極密ニ而津輕様が言上之様々被成御見せ候付内々ニ而寫取封印を以四五日中差返候様被仰懐申上御取出別冊御借渡ニ相成候間被是御懇志之趣等誠ニ身ニ餘り難有御事共殊更御秘録を御内密被爲拜見更角御厚禮盡申上仕合奉存候此段極内分重役共は茂申上

候ハ、如何計難有可奉存段更々御禮申上引取申候間別書差上申候以上

七月廿三日

吉田平之助

六月十五日在府本藩老臣は西洋新式砲術採用の必要を感じ砲術師範をして之を練習せしめんことを藩政府に通議す

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申建候相州御備場御居付之大小砲共多西洋法ニ而御座候處當時詰込之大筒手之執茂不案白ニ付當春以來池部彌一郎並門弟之内より茂指南被仰付候得共不手馴業ニ而寸斗不調法ニ有之既ニ先達而追々御役人様方御見分之節も現之手際は餘程氣之毒ニ御座候由此上當□も交代被仰付積古も出来兼候内猶又御役人様方御見分も被爲在候得ハ必至度差支可申殊ニ鐵炮之儀西洋法を致執練候様一昨年公義より御沙汰之趣有之候付而は當時江戸表右之砲術積古盛なる次第ハ三洲志津庵著之上御承知も可有之諸家様ハ月を運功熱ニ相成此方様御座場之大筒手右之通ニ而ハ第一御間ニも差障可申依之御國十家之師範執之門弟より相州詰被仰付候も少も子細無之様兼而積古之仕法を不被附置而ハ逆も往々被行申間敷と囁合居候内大筒製造御用付而詰越被仰付候師範之面々御當地にて現之積古致見聞執も熱心ニ候得共失費自力ニ難及見合居候様子ニ付失費丈々ハ上より被渡下方と申談其趣志實何右衛門財津勝之助大島久平池部彌一郎に及内意候處左候ハ、公義より被建置候西洋流御師範江川太郎左衛門様御跡目に致御入門可申然處江川様は御主人々々より御頼之外ハ一切御入門御許容無之様子ニ付御留守之儀ニハ御座候得共西洋流入門之儀は當春一と通御内聽ニ奉入置候儀も有之候間此許限直ニ御留守居を以御頼入之儀取計候筈御座候右之面々屹と致研究罷歸候上自他之門人無差別御座場御用と申唱ニ而廣く積古致し候様之御都合にも相成候ハ、逸被御國之爲ニ可相成候間右之内其身々々之存念次第ニは來春迄詰越も可被仰付と話合候事ニ御座候若御様子茂御座候ハ、早々被仰越候様存候以上（本文に對し藩政府は八月八日付を以て同意の旨を答ふ）

六月十五日

七二二
木村次郎左衛門
溝口藏人

家老宛
申

六月十八日在府本藩副奉行幸川孫之丞は本藩砲術師役四人江川家に入門の事を藩政府に報告す

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候江戸表西洋法砲術之儀公邊より嚴敷御倡立ニ相成候折柄第一相州御備場之儀多西洋流之御筒御居付ニ相成居候處池邊彌一郎門弟之外之執茂打方不調法ニ付御國之儀今少右之法開ケ候様有之度幸志賀何右衛門財津勝之助池部彌一郎大島久平儀御當地ニ相滞居候付四人共江川保之丞様に入門被仰付方可然と相決御願入之儀近々手數有之管御座候委細之儀ハ藏人殿次郎左衛門方自筆を以御家老申中被申向候由ニ付御親候而御承知候様存候以上

六月十八日

幸川孫之丞

御奉行衆申

〔全書〕

以別紙申達候於其御地組脇一郎右衛門方寸志差出候西洋流小筒五拾挺計御當地に取寄之儀付而ハ委細三淵志津摩出立前囃合置候付定而御承知有之早々被仰談候儀と相考候處今般志賀何右衛門列江川様に入門被仰付候付而ハ差寄小筒も入用ニ有之當時柄御大家様は右之御筒一挺茂無之と申候而之些面目を失候氣味も有之候間右之内ニ拾四五挺急便ニ被差越候様御奉行に御申談可被下候願目トントロ筒之方可然候且又當秋大筒手ハ財津次郎兵衛門第一手ニ而被差越候由機密間テ致承知候左候ハ、筒子財津庄左衛門儀も究而可被差越同人着之上ハ志賀列同様江川様に入門被仰付ト請致

研究候ハ、強以致然速乾ト御用ニ可相立見込居申候萬々一殘り人數之内ニも候ハ、一千ニ而被召仕候事ニ付定員外御範之場を以被差越候而茂子細有之間敷何様右之通心組居候間宜敷御囃合候様存候此段爲可申達如是御座候以上

六月十八日

木村次郎左衛門
溝口藏人

御家老宛
御申老申宛

〔本末書〕

委細被仰越通致承知西洋流小筒差登之儀ハ三淵より承り此節御紙上之通ニ付トントロ筒之方五拾挺程も急便ニ被差登之儀御奉行に及示談置候間左様御聞置候様存候財津次郎兵衛門第一手ニ而當秋差越候儀ハ別紙他筆を以申達候通ニ而同人筒子財津無之允儀も引廻ニ而差越候管ニ付着之上江川様に入門之儀ハ御見込ニ御取計候様被存候庄左衛門ト申ハ次郎兵衛養父ニ而是ハ先年病死いたし當時ハ次郎兵衛砲術指南いたし候様被仰付置候事ニ御座候以上

七月七日

六月十九日幕府參政遠藤胤統は本藩留守居を召喚し來る廿六日濱御庭に於てテレグラフの實驗をなすべき旨を告ぐ

〔相州御備場御用一件〕

御勘定奉行に
御目付

濱御庭に仕掛候テレカラーフ老申若年寄申爲見分來ル廿六日未明參着之積相心得其節御同所海手ニおゐて江川太郎左衛門弟子共船打並御徒方惣組建者之もの有次第且御水主之内建者之もの並榎木六郎左衛門始弟子共水泳見置可申候間

安政二年

此段向々可被速候事

六月廿二日越藩鈴木主稅書を長岡監物に贈り儀に監物の寄せたる好意に酬ゆ

〔子爵米田家文書〕

(上包) 長岡 監物様

尊右奉復

鈴木 主稅

平安

如月下旬之貴書仲夏下旬相建請讀仕候如命昨年ハ不圖得自緣乍暫御同府ニ相成殊ニ蒙御寵遇大幸之仕合千萬奉感銘候
 得共無程拜復拜謝之期茂無御座更ニ不堪遺憾奉存候先以去夏御判袂以來御長路御無難御歸鞍其後信御勇健被成御盛
 務候條恭賀之至奉存候次ニ僕儀依舊健食罷在候間乍御降座可被成下候儀御別後早速愚書拜呈可仕之處昨初秋御國元
 御用筋ニ而東都俄ニ發足歸着之後茂其紛冗乍無申譯御無首打過候内却而貴書被成下候ニ恐縮之仕合萬々多罪御海軍
 可被成下候如尊旨此御國元茂昨年ハ大火地震大雪種々非常之事共ニ而甚心配仕候乍然冬之地震も追々東海道筋等之様
 子承り候而之大ニ輕き方ニ而此上大悦仕事ニ御坐候御國表之爲指御事茂無御坐哉ニ粗傳承奉恐悅事ニ御坐候引續天變
 地妖愈々戰談之心地ニ御坐候將又東都之近況之津田氏又々被致出府候山ニ候得之定而具ニ御承知可被成昨年来諸夷追
 々渡來此節墨夷日本海測量之儀強固立其御難評之由極秘又此秋ニ之數拾艘來襲之風説此説ハ其源至同は愈輕茂猖獗
 之勢切齒之次第ニ御坐候見角大木眞之會積山ニ茂至り候御様子ニ而則福山侯ニ之御參府後寛々御親話茂被爲在種々
 御議論等御坐候處詰り之御同列達御始之御意味合共御六々數杯と申様成御模様ニ候山水老公之御様子茂委細承知不仕
 候得共御同事出府中之勢ニ御同様之御儀と奉恐察事ニ御坐候就而茂西城御立定之御事兼而御同意ニ而當節之御急務不
 過之御儀と奉存候得共尾公之時春以來御承知之御様子福侯茂前文之御模様いづ之筋より御開達ニ可相成哉見ニ角當
 惑至極之御時勢と奉恐察事ニ御坐候僕儀無御用筋有之御國元へ御慶しニ相成候得共尤方今御微益筋愚見茂候ハ、如
 何様ニ茂致し出府相願度心底ニ之御坐候得共未夫程之見込茂無御坐唯々憂慮罷在事ニ御坐候尙又御高論御教示千萬奉

仰長

尊御模様茂御苦心之御様子多々奉恐察候右ニ付世子君上之御事御紙表之御具ニ奉拜承候兼而御合御坐候御事ニハ
 御座候得共尙又申上置候様可仕候次ニ拙薄様子之先愈不惡方ニ御座候間御懸念被成下間敷候御落池邊氏出府之由兼々
 承り及候人物ニ御坐候處前文之次第ニ而不能接觸殘儀奉存候尙心緒萬端ニ御坐候得共不能拙毫先多罪申譯拜答兼草々
 如是御座候餘之奉期後音候恐惶頓首

六月廿二日 認

奇カマ

再啓時下炎威厚御保護奉護念候情又此後宮十六件茂去夏御別後一時甚不穩種々心配仕無難御附人島田氏ト打明々申談
 試候處此人存外無難顯示談有之右手續ニ而松井君へ茂罷出御熱談ニおよび大ニ都合宜荒方御落着ニ而僕儀ハ出立仕候
 事ニ御坐候處其後追々御模様宜々此節之御入典以來無之御落合ニ候由其筋より申越難有奉恐悅事ニ御坐候右ハ御在府
 中御配慮茂被成下候故乍序申上候端未乍失敬御賢息様方へ宜奉願候且又横井先生此節如何被致起居候哉乍恐御序を以
 宜御致儀奉願候中根吉田村田等へ御加書之趣中間候處何茂宜申上度旨中間候頓首
 折返し上ハ書

長岡 監物様 奉復御直展

鈴木 主稅

六月廿三日本藩砲術師役志賀何右衛門財津勝之助池部彌一郎大鳥久平江川太郎左衛門に入門す

〔相州御備場御用一件〕

以手紙啓上仕候然者其御家來兼砲術師入門之儀太郎左衛門承知被仕候間明後廿三日朝五半時御入來御座候様御通達可
 被下候右之段宜得貴意旨太郎左衛門申付如斯御座候以上

六月廿一日

安政 二年

細川 越中守様
御留守 居中様

江川太郎左衛門内
柏木 總藏
雨宮 新平

各儀西洋流砲術入門之儀付而御内意之書付相達置候處江川太郎左衛門様は入門被仰付ニ而其趣御留守居御使者を以被仰入候處御許宥有之明朝五半時被罷出候様申來候間麻上下着可有御出旨尤委細之儀ハ御書方可被承合候且又右之節御銘々御肴料三百疋朝鮮給一掃宛御持參之等候條御音信所御聞合御受取可有之候以上

六月廿二日

辛川 孫之丞

志賀 何右衛門殿
財津 勝之助殿
池部 彌一郎殿
大島 久平殿

覺

西洋流之砲術近來壯ニ被行猶御當地之有名知識之人甚不少趣ニ付私共可然節は自己之執心之趣意を以入門仕教導を受吟味仕候様御内意之趣ニ付申談承籍申候處先當時之御鉄炮方被仰付置候事ニ付江川保之丞様は入門仕度奉存候處御同人様ハ私ニ手寄を以申入候而後一切御断ニ相成御大名様方共主人々々より御頼ニ相成候得之門弟被成差免候由ニ付何卒從上表向入門被仰入被下候様被仰付度奉願候此段御内意申上候間可然様被成御達可被下候以上

六月

志賀 何右衛門
財津 勝之助
池部 彌一郎

大島 久平

右之通寄付相達候處入門之儀之當春御發駕前御内聽伺相濟居候ニ付入門被仰付方々此許限申談相決江川様は被仰入之儀御留守居申談候様御右筆頭は申問右内意之書付御奉行ハ相渡置候處左之通

江川太郎左衛門様御内より御留守居中に別紙之通申來候由ニ而被差出候間別紙進達仕候以上

六月廿二日

財満 市兵衛

辛川 孫之丞殿

被仰越通致承知別紙之趣志賀何右衛門列に夫々及達委細之儀之御書方承合候様との儀及達候條左様可有御心得候以上

六月廿六日蘭國汽船を幕府に献す之を觀光丸と名く

〔癸丑以降秘録〕

同(六)月廿六日和蘭商船長崎ニ來外ニ蒸氣船貳艘渡來堂艘ハ昨年御注文ニ付差出候旨昨年乘來候船ニ候由

〔異國船渡來一件〕

一阿蘭院に御頼之蒸氣船之急ニ出來兼右合之船一艘被方々獻上致ト申事ニ而當六月歐外蒸氣船共ニ貳艘入津致シヒストニ筒杯も持渡候由右乘方藝古廻相濟候由ニ而肥前薩摩筑前長州等々參り御國方及池邊齊太藝古乘被仰付門人太田墨岩太小佐井才八蘭醫藥由世叔川尻御船頭頭一人大工堂人職被仰付表向御達ハ於長崎御用右之との由也千里内ハ乘方支不申杯評判有之何程ニ候哉

六月廿七日吉田寅次郎書を宮部鼎藏に贈り懷を我藩の志士に馳せ誓て他日の飛躍を期す

安政 二年

七一七

〔野史家編 吉田松陰傳、松陰先生遺著〕

松本生(松山)持老兄與家兄伯教書、及諸君哭讀本生詩歌歸、轉致獄中、且讀且誦、欣慰無量、諸君詩歌、皆直白肺腑中流出、如親對諸君晤言、丸山之懇篤、佐々之義烈使人起敬、而今村之銳進、最爲可畏、獨永島君抱病彌留、實堪憂念、君素剛強、今乃如此、蓋憂憤鬱積之所發、幸致意慰籍焉、書尾有云、老兄近退爲一木偶人、鷲鳥將搏、必戢其翼、猛虎將嚼、必屈其體、是誠不可量也、至如寅則龍鳥權虎、亦復何說、天下之勢、滔滔日降、魯墨之病、已入膏肓、暗佛之疵、更剝皮肉、志士之目、未知所瞑也、近來魯虜與暗佛諸毒構難、是伐謀伐交、宜有奇策、而世人恬然、不知乘之、江河之降流、寧有涸竭哉、然立誠於天地而不求効於事功、存心於道義、而不較驗於成敗、則誠心之所貫徹、久而愈著、遠而愈明、願老兄爲諸君之先、乃爲一木偶人、其亦有見于此也歟、伊川終日端坐、如泥塑人、好學篤而然也、僕禁足不能履地、乃亦爲泥塑人、是則可嘆耳、但泥塑人、遇雨浸水、則潰敗不可復收、不及木偶人遠矣、然木偶人、受斧則割、見火則燬、非至焉者也、然則相誓爲石造人斯可也、所作三餘說、別錄以供一餐、謝佐々詩序、往年去貴藩時所作、時胸中多事、意不在文、今改竄併贈、幸轉致焉、松本生在貴藩、諸君待遇適當、不堪感愧、伯教書當詳及之、不宣、(野史家編吉田松陰傳ニハ一七日與宮部不宣、(附錄書)トアリテ次ノ日附姓名ナシ)

六月念七日

宮部 開藏 老兄 足下

宮 巨 拜

〔野史家編 吉田松陰傳〕

三餘說

昔輩過謂、讀書當以三餘、冬者歲之餘、夜者日之餘、陰雨者時之餘、然歲之有冬、日之有夜、時之有雨、皆天道之常未足以爲餘也、吾人賦來、亦得三餘以讀書、謂已失義於忠孝、尚仰食於家國、非是君父之餘恩邪、已幽身於陰房、尙

取照於戶隙、非是日月之餘光邪、性已狂悖、多犯大典、質又冠弱、數罹篤疾、有一于此、皆足以殺身、而方且仰餘恩取餘光、非是人生之餘命邪、凡此三餘者皆輩遇之所無、而吾獨得之、雖沒身足矣、抑輩遇或爲農、或爲官、徒得其三餘、猶足以傳於天下後世、况吾得我三餘、寧可量哉、

六月某日本藩江戶機密間に命し幕府及び諸藩の武備充實西洋流砲術誘掖の状況を調査報告せしむ

〔相州御備場御用一件〕

度志津摩融今様御持下被成候間江戶表武備御充實西洋流砲術御誘等公邊之御模様並此方様ニ而御取扱ニ相成候現之有様を取まらへ差出候様との旨ニ付左之通

但初而此節請を起候稜茂末條ニ取まらへ奉覽候

公邊並他所

一西洋流大砲製造之儀諸家様方及今以絶不申別而公義之御用意儀ハ先達而被仰出候寺院之釣鐘半鐘鑄碎之一條ニ而も相分居候處公義之御筒御製造と申候而ハ御役人様方究り之御出役等有之莫太之御物入御座候由ニ付都而水戸様御筒と申を以出来被仰付前中納言様御請込被爲蒙仰既ニ川口に反射爐を出来之管候處所柄不辨利之由ニ而於御國許御製造との事ニ候事

一西洋流砲術之儀江戶表にハ先年高島四郎太夫出府いゝし相誘候ニ付一旦ハ段々志候人も爲有之由候處をらて水野様御一件より不慮之事ニ成行四郎太夫ハ僅ニ死を被有御預被仰付右ニ手携候池部啓太並薩州様ニ而同學之由鳥井彦七と申者茂公義より御吟味被仰付候程之事ニ而夫限り右之流儀も頓斗寥落する有様ニ相成居候處其後於公邊深御研究有之候儀と被考一昨年墨奴來船之時分江戶表御膝下之面々ハ申ニ不及諸藩中茂砲術ハ西洋法を致熟練候様被仰出候付舊爐再

ひ懸上り其内江川太郎左衛門様下曾根金三郎様最執心ニ而多年之間深研究有之追々新渡之書籍茂手ニ入精を極微を盡候付同シ西洋流ニ而茂四郎太夫學及候術ハ古法ト相成當時江戶中之諸生藩中とも西洋ニ志候者ハ都而有三家手筋之門人之山尤薩州ハ已前琉球ニ西洋人致上陸杉を剪取候様子ニ付蒙而被差越候御人數出張候處夷賊共列を正し例之劍突筒を二段ニ備繰引いゝし候間一向ニ寄付出来兼候儀有之候由其御鉄炮ハ西洋ニ越候術無之申方ニ御議定有之段々御取起ニ相成居候内於長崎高島四郎太夫功熟之由ニ而前條鳥居彦七外ニ三人四郎太夫方入熱を茂いゝし其後彌以相開ケ當時ニ至り候而ハ西洋法を大隅守様御流儀ト唱和流ハ一切御用無之是迄師範之而々茂不殘有之術致研究候様被仰付左候而學校御取立御家中之子弟毎日々々致出席發炮之研究ハ申ニ不及箇並玉之鑄立且鹽硝拵等之儀茂其筋功者之者を三四人相交エ其餘之都而諸生より取扱追而致熟練候上相傳等ハ御殿に召被仰渡候段之事ニ而歳を逐盛ニ相成御當地ニ而茂薩州之御家中隨一之山御座候引續轉原様阿波様津輕様因州様備前様杯各別心懸其餘小大名御旗下等ハ數ふるニ不逞塚糟古之一條ハ大川筋より品川迄之御臺場を初大森目黒磯町方青山雜司ヶ谷目白臺里鴨木庄深川邊少し片寄り候ヶ所ハ毎日々々發炮之音響不申跡月當りより別而儀様ニ有之既ニ大島久平と追々手寄を以所々之糟古見物ニ罷越西洋之術ニおゐてハ申々難及我輩今迄諸生に授候所實ニ恥敷次第と申候茂承り候事

一西洋流調之儀江川様茂佐久間手筋ハ容易ニ他見を不許様子ニ付委敷存候者無御座尤其門下々々之諸家様ハ御野屋敷内杯ニ而えらへ有之最寄々々之相門ハ其處に打交り致糟古候山下曾根様ハ夫と違炮術之儀西洋法ニ越候術無之誰ニ而茂見習日本國中一刻茂早ク此術開ケ不申候而ハ難相成申御趣意ニ而少し傳手有之候得ハ勝手ニ見物不苦且御門下ニ而無之候共志有之尋候者ハ高弟之而々より茂奥儀之事迄無殘處嘯候由左候而毎月一六之日定日ニ而果鴨上井ヶ窪明屋敷ニ而糟古有之四十八人一隊ニ而毎度十一二隊有之惣人數六百人近ク夫丈々之人數或ハ三人並一列ニ押し或ハ六ツニ分々十二ニ分レ堅ニ押し進調ニ應り又ハ六隊宛二重ニ備繰引いゝし候茂有之種々様々之懸引都而太鼓之寬急ニ因り歩行之速遲有之六百人一足ニ歩ミ候様一揃ニ有之一人茂司を亂し候者無之取發炮之一條揃打ハ指揮いゝし候者より

一聲應候ト忽チ是又六百之鉄炮一度ニ放し大炮一發之響いゝし早打ハ前後三人並ニ而眞先ハ折敷ニ而放チ次ハ立打又其次ハ三三替々々筒を取替遣候付トへハ百間之間備居候へハ其百間丈々少し之間斷茂ふく始終發炮斷不申誠ニ神速ふる手際ニ而和流之炮家者といへとも驚歎いゝし候由之事

但本文調練ニ大炮交候節ハ近ク鼠山ニ而糟古有之由御座候且又右之外諸家様方ハ御野屋敷杯ニ而おもひノニ調練有之騎馬並筒を持候者之往來道路絶不申既ニ去る十五六日比ニ而阿部伊勢守様御初御役人様方四十騎計薩州様田町御屋敷之御臺場御見分有之御居付之大炮打方相濟候上西洋法調練茂御所望有之候由之事

一防禦筋之儀先ツ大川筋ハ品川迄數多之御臺場御殿山御警衛夫より木牧房州御備場且京都七口御固並松前箱館蝦夷地御警衛等之儀ハ御國に茂相分り居候略仕候事

一甲冑勢揃上覽之旨被仰出半藏御門内々竹橋御門迄之間ハ申ニ不及被近邊陣屋馬建等夥敷出来御書院御番頭十組御小姓組御番頭十組御軍役御定人數引連役道具並車臺大炮等御持せ去ル十八日十九日廿一日日數三日ニ分々勢揃有之一切他之見物ハ六ヶ敷仰山なる事ニ而爲有之由候事

右段々之通ニ而海岸防禦之御手當武器御充實發炮御誘之儀日を追月を逐彌以嚴敷相成候付而ハ深キ御廟算有之とんと平穩之御取扱迄ニ而ハ有之間敷ト申唱有之何様不慮之御用意ハ無之候而難叶儀ト乍恐奉存候事

已下御屋敷ニ而御取扱之決議

一外様足輕六匁筒打方糟古之儀近來毎月半ノ日目白臺於御屋敷御物頭見分茂有之候得共御當地西洋流調練之發炮ニ比候へハ手際雲泥之遠ニ而實ニ恥敷次第ニ有之依之練打糟古いたし度山御物頭々追々内意有之其上外様大名ニ之容易有之間敷候へ共公邊ニ而諸家調練御見分之儀起り居候由ニ付其心得無之候而ハ難叶旨蓮性院様ノ御内ニ御沙汰之趣茂有之萬々一左様之埒ニも至候而ハ兼而公邊より御頼切杯ト御役人様方追々御噂も有之候末いゝも面目を失候付目白臺御屋敷内ニ而相應之地面を見計地撫且切拂等いたし御物頭内意之通被仰付候方可然ト被仰談相決御伺書も被差出置候付

相濟次第結込之足輕都合二百人餘を四切ニいたし一ヶ月兩度計先ツ二巡稽古被仰付其上之儀ハ追而之模様ニ應猶被仰談之筈ニ候事

一相州御備場昨年四月御受取即下公義御居付之御筒打試申度且又陣屋並御預所海邊等ニ而家來之者稽古鉄炮大筒船打共四季無差別打試陣屋内外ニ而人數訓練具鐘太鼓等相用折々相試候様仕度旨御届相濟其趣相御受持長州様備前様並浦賀御奉行様ニ茂御知せ有之稽古之節ニ別段御案内を不被仰進段を茂御申向ニ相成長州様備前様ニ茂御同様申來候付稽古之度數並樂等之御出方筋とも大筒手ヲ取スらへ相違置追々相州詰御奉行高木敬太郎方に才足茂いたし候得共同所御役所之方中々繁雜ニ而右様之埒ニ至兼其上池邊彌一郎大島久平下地西洋流研究之門人茂相詰居候付左程差急ニ茂及中間敷との返答ニ而押移ニ相成居候内敬太郎方も病氣ニ相成右スらへ之書付も何方に粉込候哉藏人様ニ之御覽も不被成由然處相州表之稽古何も敷も打混一ヶ月年三百兩位ハ御出方ニ相成度由田中八郎兵衛方ニ追而内意有之候得共左様ニ之難被仰付可有御座哉スらし百五拾兩位ハ御張込ニ相成不申候而相濟中間敷ニ被仰談荒木甚四郎方下り之節御國許之御參談ニ持起有之候由之處近來江戸表發炮稽古之有様ハ手前顯置候通ニ有之殊ニ相州之方長州様備前様ハ前條御案内申來候後稽古定日々々不斷發炮之音いたし候處此方様御臺場ハ昨年御届濟後御役人方御見分之外之當時迄一度も現之稽古無之御外聞ニも係候付向後年々之御出方治定之處ハ御國許之儀を御待ニ相成差寄來月ニたりより相應ニ稽古被仰付度其儀之此元限御見切を以御差圖ニ相成候方ニ被仰談相決候事

但本文稽古度數並御出方等之儀之追而別途ニもスらへ奉伺答御座候事

一重士之儀之鎗を合せ候ものニ付夷賊上陸及亂妨候迄ハ手を束居候事ニ候處上陸之上茂日本同士之戰爭ニ違彼ハ手毎ニ小炮を携列を揃自在ニ致發炮候事ニ候ハ短兵ニ而ハ容易ニ難駈入候間重士之面々ニ茂兼而西洋之小炮を致訓練且一手駈引之訓練を茂いたし其場々々之模様次第或之小炮或之鎗ト申都合ニいたし置度由田中八郎兵衛方一圖之存念ニ而右小炮人數ニ應被渡下候様内意有之於御國御番方不獲ニ御筒新現出來一挺宛被渡下候見合も有之候間内意之通被仰付

方ニ可有之然處御當地ニ而右之筒出來被仰付候ハ一挺代金八兩程も懸り餘計之御出方ニ付先ツ眞筒ハ三挺計外ニ本筒拾四五挺程も此節被渡置夫ニ而稽古致せ追而於御國相臨市郎左衛門方寸志差出候御筒を五拾挺計御取寄之方ニ被仰談相決右眞筒木筒出來之儀之夫々其筋に被及御沙汰候事

但本文之筒ハ御國許カ早々被差登候様有之度扱又右御筒ハ御番方同様和様之小筒ニ而可然ト申説も可有之候へ共田中方差入誘有之既ニ玉藥等自身出方を以昨年來稽古有之候程之事ト而一統も所角振立候本ノマ人氣萬一西洋法之筒至極便利なる儀之前後ニも申述候通ニ付旁本文之通且田中方自勘出方之玉藥料ハ追而取スらへ被渡下候方ニ被仰談候事

一御備之儀一昨年來江戸表御有合之御人數を以手摺之書付等ニ至迄スらへ出來居候得共年ニ寄右御人數之多少茂有之且御兩殿様共御在府又ハ太守様計御在府若殿様計御在府ト申處ニ而も段々異同有之候付右異同有之様ニハ條下々々ニ細書いたし年々持通ニ而相濟候様一定之スらへ被仰付御役々代勤等入柄持り候分迄其年々被及御達候方ニ被仰談相決其段軍師堀内彈右衛門に被及御沙汰候事

但大筒手ハ定府之面々迄ニ被仰付年々持通之筈候事

此以下志津摩殿御持參御省々候事

以下此節發議

一西洋流炮術之儀公邊より專御誘有之候上手前ニも申述候通先祖已來流儀を繼居候炮家者サへ御當地之稽古一見いシ候得ハ忽チ我術之拙キ愧慚悔いシ其方ニ志し候位之事ニ候へハ此末習俗之奇を好ミ新を爭イ一旦之流行杯ニ走りテあて立消仕候類トハ大ニ違可申スとへハ植痘之儀御國に初り候時分或ハ誹謗いシ或ハ半信半疑ニ而現ニ植候者ハ至而稀ニ御座候處段々相開ケ昨今ニ至り候而ハテ全國舉而植候様相成必竟植痘いシ候上猶眞痘を病候者ハ現實百人ニ九十九人迄ハ無之ニ其百中之一人ニ相當り追而致眞痘候而茂最前之植痘害ニ相成候儀ハ無之處方自然ニ右之通ト相見鉄炮之儀茂現在ニ其術ニ不及處有之候ハ、皆人志候儀尤之譯ス而其内若不可然ト存候積茂有之節ハ忽チ捨候而

何之害茂無之左候へハ昨年カハ今年前月よりハ當月ニ歳を逐月を逐次第志候人相増候儀ハ當前之道理ニ而積り炮術ハ西洋之一法ニ歸し可申との咄も承り申候然處御國之儀ハ池部啓太儀高島四郎太夫門弟ニ而其術相應ニ致出來候付二十ヶ年前師範ニ御取起被仰付其御薩州ハ各別他之御藩中并江戸表ニ而茂右之術を唱候儀ハとんと承及不申先ハ諸藩之魁共可申處當時師範十家之内池部家之外ハ格別研究いゝ候向無之萬一夷賊戰爭之時ニいゝ尤要之炮術他に劣り候様之儀茂有之候而ハ折角先立開ケ候詮茂無之第一ハ今迄之御武名ニ茂差障り可申既ニ當年相州に相詰候在御家人等ハ都而西洋流不案内之者共迄ニ而池部彌一郎并門弟之内より致指南候様被付打様等ハ一ト通覺候由候得共所謂盜之繩之方言ニ而此間御目付様方御見分之節ニ茂手際不宜誠以口惜敷次第ニ御坐候追而大筒手詰代即下御見分茂被爲在候ハ、必至度行當り可申夫も一時之流行等之事柄ニ候得ハ不調法之方却而大國之躰を得候得共鉄炮之儀ハ根元西洋諸州之發明ニ而日本に傳來いゝ候而茂三百年ニハ及申間敷其内家ノ之考ニ而各別便利之炮器茂可有之候得共太平中之窮理ハ難免西洋ハ夫と違士豪炮術之根元ニ而有之候上窮理ニ窮理を極め便利を盡し候術ニ候得ハ當今新渡之書籍ハ師家より奥儀之傳書を授り候茂同様ニ而二百年前傳り候古法并自家考之術而已固執いゝ候新渡之法を拒み候譯ハ有之間敷何様日本有り來弓馬劍槍之類を以敵對いゝ候ハ、格別苟茂鉄炮用候ハ、西洋之術を致研究不申候而ハ難相成道理有之依之相州表御仕法替付而茂一萬兩計ハ御出方相減石一兩之方御願濟ニ相成候得ハ是茂二三千兩ハ御當分出來いゝ候由且又御備場御用付而市在之寸志茂多分ニ有之右様之内より別段御出方を茂東西とも今一際西洋流炮術を御取起被仰付候而ハ何程ニ可有御座哉

一右之通士豪之御純意を御取究ニ相成候儀ハ素より御國御通儀ニ而無之而之難相成候處差寄一昨年來大炮御製造之跡ニらへ且鑄直等付而志賀何右衛門大島久平池邊彌一郎今以御當地に滞在在孰茂西洋流執心ニ而所々功熟之向を尋研究有之候得共入門之儀ハ出方茂有之事ニ付難易押移ニ相成居候由ニ御座候故甚以残念之至ニ付三人共上より御出方を以一人ハ江川様一人ハ下曾根様一人ハ佐久間手筋と三方ニ分ケ入門被仰付猶内輪ハ無伏藏彼之短を捨是之長を取互ニ致何程ニ可有御座哉

但本文之通御決議ニ相成候ハ、一刻も早ク入門之儀被及御内意度奉存候

一右之三人致熟練追而御國に被差下候上西洋流之儀ハ公義より御沙汰之趣有之且八年々相州詰ニも被仕召候事ニ付旁十家之師範合一被仰付平日之稽古并見分等茂打込ニ而相互無伏藏申談致研究候様尤銘々流儀之稽古ハ是迄之通と申雖ニ而被仰出之振を以御沙汰ニ相成候ハ、究而相競修行いゝし三四年之内ニハ屹と其驗相見相州詰之儀孰之門弟より被差越候而も聊差障無之様相成可申如何程ニ可有御座哉

一江戸定詰之内上席ニ而候ハ、別而宜敷獨禮以下ニ而茂各別西洋法執心ニ而往々屹と器と成人物を覺人御撰被成是又入門被仰付藝術相應ニ相成候上定府之子弟引廻被仰付追而孰達茂いゝ候ハ、右之師役被仰付身分ハ句讀師并同様稽古之節々上席之御取扱と中ものニ被仰付大勢之子弟御屋敷一手ニ而修行出來候様候ハ、是又三四年之後ハ屹と御爲ニ相成就而ハ他之開茂可宜如何程ニ可有之哉

右之四稜之別而分を越候議論ニ而重疊恐多奉存候得共御當地に罷越近來現之ゝ杯茂直と致見聞且功熟家之咄茂承り候而ハ唯々此方様之儀遺憾不少殊ニ相州表詰方茂有之候得ハ速茂今分ニ而ハ難相濟積り西洋法之儀如何様とも御仕法を被附旁愚案難默止申上試候事

江戸

機 密 間

(本朱書) 右發議之内入門之一條此元限御決ニ相成候處其外稜々ニも至極御同意候得とも此節志津摩殿不計御持參ニ相成候而

ハ御國許ニ而差障等有之却而被行兼候様とも相成候而ハ残念成ものニ付御持參ハ相省キ追而下廻を以御國機密間に差廻模様を見合持出候様申遣候方可然との事ニ付六月十八日之やとハ便ニ遣候事

但御用狀ニも一通不當不障申遣候様との旨ニ付則御自筆之通候事

六月某日在府本藩土坂梨澗左衛門下田見聞録を提出す

〔京都雜聞録〕

覺

私儀去々月豆州下田表に罷越彼方之様子見聞仕候趣左之通ニ御座候

一三月下旬亞墨利伽軍船一艘蒸氣船一艘下田に入津仕候之四月十五日比逆帆仕たる由御座候此節之蒸氣船之ねじ仕懸ニ而車之見へ不申共申又之内車ニ而外ニ之見不申由申候

一私儀四月十七日下田町に着仕候處其前日參候由ニ而商船一艘致礙泊居申候此船之長廿間餘も有之小船ニ而乗組七十人計之由炮門等も無之乗組商人ニ而觀度帶居不申候右船當春參候比魯西亞船致難船沼津沖ニ而沈候付魯人之沼津之寺院ニ被差置同勢之内右商船を借候而一旦魯西亞に罷越此節乘返候由ニ御座候右船乗組人より魯人ニ貸候付而之墨人之下田町方十町程隔居候柿崎と申處之玉泉寺に被差置候間寺之様子茂見申候處門番等被差置外人之入込等被禁候右之固之小田原様沼津様に被仰付置候處近來懸川様に被仰付沼津様之被成御免候由御人數之僅之農家に致幕張十人計茂相詰居候様ニ相見申候其外一切御固相見不申候邊に大砲四五挺仕懸有之候壹貫目已下之御筒と見受申候

一通商交易之御免無之闕乏之品之被下候由ニ而御役所假屋致出來居申候得共當時迄之食料石炭等之拜領之不願出由尤闕乏之品と申名目ニ而瀬戸物漆塗之木具類屏風等之物之被下候由ニ而此節二千兩丈拜領仕十八日ニ船積いたし候を直と見申候右品之下田株商人より御役所に差出夷人より墨之金を御役所に相納候得之商人に之日本金ニ而被下候由品物之直

段世間之取沙汰之壹貫文之品之貳貫文ニ成候と申候得共所之商人之壹貫貳三百文ニ成候と申候右商船之四月廿日出帆仕候下田湊之皆出拂申候

一右商船ニ土佐之漂流人寅右衛門と申者乘參申候此者之墨之衣服を致着用居申候墨ニ妻子有之候付本邦に之歸不申由定而願濟ニ而右之通いたし居候哉委敷儀相分り不申候

一墨人魯人之衣服少々之異り居可申候得共大様之差而相替不申様相見申候いつもも丈高ク健ニ相見申候

一下田町津波後大ニ荒居候而穢之假屋致出來居御役人衆之多ク寺院に御滯留有之候御出役左之通

御目附	岩 瀬 修 理 様	右同	都 筑 駿 河 守 様
御勘定御奉行	川 路 左 衛 門 尉 様	右同	井 上 信 濃 守 様
右同	水 野 筑 後 守 様	與力組頭	伊 佐 新 次 郎 様
下田御奉行	井 澤 美 作 守 様	右同	松 村 忠 四 郎 様

右之外以下之御役々數人御出役之由ニ御座候

右之通御出役ニ而御仕置有之儀ニ付諸事御取締筋嚴重ニ有之由ニ御座候夷人上陸御免等之儀茂下田之地理天城と申長十三里幅六里之輪廻大木生茂り候御林山取圍居候得之所詮廻歷出來候場所共相見不申共上上陸之夷人に之一切取構不申又穢之品たり共不受不與候様被仰付津村之所柄能相守り候由ニ而夷人も乙名敷有之且外人下田に入込候儀之容易ニ難相成新規ニ關所等茂御取立有之由ニ御座候

卯六月

坂 梨 澗 左 衛 門

七月二日浦賀與力中島三郎助は箱館碇舶の佛人米國同様の取扱を要求せんが爲め内海に乗入らんとすとの風聞を報す

〔相州御備場御用一件〕

浦賀與力格別御出入中島三郎助が昨日面談致度儀有之候間下役之者に參吳候様御用達長島爲吉を以申來候ニ付早速御城使兼動澤田壽作差越候處御在府之浦賀御奉行様より當御奉行様ニ被仰越候之此節箱館表に弗蘭西船渡來いたし居申出候之亞墨利同様之御取扱被成下度箱館出帆之上四艘江戸内海に乘入可奉願との趣申立候由申聞候付箱館表に渡來いたし居候船數並内海に相廻候頃合相尋候處近日相廻候由申立此節渡來ハムし居候船數相分兼候由右之通候得共此末彌内海に相廻可申哉殿ト夫等之儀相分兼候得共先之爲含爲知候段申聞候間此段及御内達置申候委細相分候ハ、猶相達可申候以上

七月三日

吉田平之助

井上嘉左衛門殿

以別紙申達候箱館表に弗蘭西船四艘致渡來追而江戸内海に乘入亞墨利幹船同様之御取扱ニ被仰付被下候様奉願候等之段申出候由ニ而浦賀御奉行様御沙汰之趣吉田平之助紙面寫差進申候右付而委敷儀爲奉伺御在府之御奉行松平伊豫守様至今朝御留守居罷出候處御人拂ニ而御逢ニ相成浦賀表より御沙汰之趣と之些相違いたし箱館表に從泊罷在候佛蘭西船より申候之追而本國より使節船差越江戸内海に乘入阿墨利同様之御取扱相願候等之由申立候様子ニ候得共取締候儀ニ無之根元同國之儀之至而年舊キ帝王之國ニ候ハ中々新國之阿墨利幹御取扱之振合杯望候譯ニ無之其上先達而長崎に致渡來候時分英吉利同様之約條丈ケハ御許容も相濟喜ひ罷歸候末右様之申出實否何程ニ可有之哉依之江戸表に當時出府ニ相成居候相州詰之御家來態々急速御差返杯申候ニ之至り申聞敷敷たし御手厚御仕成ニ付役筋より表分夫ニ不及トハ難申達昨年來浦賀御在陣之時分度追々御咄有之候通自然之節御頼切とも申候程之事ニ候處遠國被懸萬々一御國力及疲弊候様ニ共成行候而ハ難相濟甚以御心配被成候間其心組ニ而程能取扱候様至而御懇切之御内話有之候由ニ

付別紙井上加左衛門書中ニ有之候御備場詰之面々江戸見物之一條も差扣ニ不及旨御奉行方達ニ及せ候事ニ御坐候此段爲可申達如是御座候以上

七月六日

木村次郎左衛門
溝口藏人

御家老宛
御中老宛

(以下本朱書)

八月八日之日付にて棧々返事來候由

一箱館表に渡來之佛蘭西船江戸内海に乘入亞墨利加同様之御取扱被仰付候様奉願等之段申立候由ニ而浦賀御奉行様御沙汰之趣吉田平之助より之紙面被差越右一件付而委曲被仰越候趣致承知何様近來異船之模様猶以煩敷次第御座候

七月六日在府本藩老臣は英佛米三國船の琉球來船等に關する幕令數件及び我砲術師範を江川太郎左衛門に入門せしめしことを藩政府に通報す

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候琉球國に英佛米之異船等渡來條約相濟候國も有之候間皇國之御取扱ニ准不申候而之不都合ニ有之右付而薩州様より御案内次第筒井肥前守様御列被方に御出之儀並濱御庭に仕懸有之候テレカラ一ノ且船打水泳御見分之儀付而別紙書付寫一通爲御承知差廻申候且又與力同心御徒等西洋傳銃可致修行旨尤弓組之儀茂右銃隊を兼候様被仰出之趣御廻狀寫ハ他御用狀之通ニ御座候異船一件ニ付而ハ種々之御取扱有之候内西洋法砲術御誘之儀別而嚴敷依之先便委敷申達置候諸師範門弟御臺場筒打様之儀茂如何様とそ急ニ被仰談之程祈申候志賀何右衛門列江川太郎左衛門様ニ入門之儀茂夫々相濟申候右ニ付而は追々積古之諸雜費要用之書籍買求等是非少々ハ御出方も相増可申候得共此砌之儀ニ付

安政二年

七二九

夫等之處ハ不惡御聞置候様存候此段爲可申達如是御座候以上(本文別紙云云は前に掲げある幕達なるを以て茲に略す)

七月六日

木村次郎左衛門
溝口藏人

御家老中宛
御中老宛

(以下本朱書)

八月八日之日付にて稔々返事來候内

一琉球國に英佛墨之異船等渡來ニ付而薩州様より御案内次第筒井様列彼方に御越之儀且濱御庭に仕懸之筒等打方水泳御見分之儀付而書付寫被差越候趣夫々致承知候右付而先被仰越置候御備場之炮器積古打方之儀被仰越右之一件ハ先達而夫々及貴報置候通御座候

七月十一日藩主齊護は相州警備に關し家老以下備頭等銳意事に從ひたるを嘉みし褒詞を與へて之を獎勵す

〔相州御備場御用一件〕

頁は人名也

去々夏異船渡來後之種々致心配一統人氣引立令満足候於公邊茂専ら武備御倡之事ニ付彌以組々相勵し候様可有之事頁ニ之抑揚茂違可申候得共唯今中間候趣を以愈組方を茂誘候様被思召上旨

七月

七月十三日英船長崎に來る

〔癸丑以降秘録〕

七月十三日、暎晴利船長崎ニ來ル類船も有之由申ス内壹艘之亞墨利加船ニ而魯西亞人を墨夷魯ノ本國へ連渡居候を洋中ニ而英船ニ行合候處英夷船魯人を捕子ニハたし夫ニ乘而來候物ニ可有之被察候由

七月十七日在府本藩老臣溝口藏人書を在國老臣平野九郎右衛門に與へ警備地兵員増加の要なきを論す

〔相州御備場御用一件〕

付御札
ハと御目録
ハと御附候
浦之御御
望之御御
後取之御
付候處
付候書

御別紙致拜見候此方様御備場之儀當時之儘ニ而之御人數茂少御手薄ニ有之候段御次々追々申立其末之雲上ハ茂御沙汰被爲在候得共根元當表ニ而御内意を茂伺取候末ニ付其御地ニ而御取切も出來被兼候由右付而被仰越趣致承知至極御尤之儀ニ存候追々御取替ニも及候通浦賀表之儀先之内海咽喉之地とも可申候得共廣大之戸間ニ付逆茂敵放を以打留成兼候段之公邊に茂度々御内意申入御役人様方も重疊尤御同意有之又上陸亂妨之方々申候へハ何之甘味茂無之土地に巨炮之矢石を犯し可寄附様も無之左候へハ全閑散之場所ニ而番兵ニ相違之無御座右様之所柄に大勢之御人數被差置候而之誠以無用之事ニ付種々ニ工夫を凝專平穩之御取扱中人質偏固之者共如何様之變事引起候茂難計且ハ閑散之内ニ國力を費戰爭實地之節ニ至御用ニ立兼候様ニ共成行候而之無是非次第馬廻上下百人計リハ御國許に差下殘ル人數ハ江戸表に引付御備場ハ定府之面々を可被差越置との趣其時分御在番之浦賀御奉行松平伊豫守様御内意奉伺候處至極御同意ニ而御城御取遣ニ相成内實ハ御老若様方も御評議之上御大國之御人數百人計之御減ニ而ハ左程之事も有之間敷此節内意申達候上ハ兎角御國力を費不申様勝手ニ練合候儀少も懸念ニ不及との趣御内話有之則別紙寫之帳而入御披見申候其已前大略三四百も被差置候而可然との御時も有之畢竟右様之儀も伺取候處ハ重疊申談も御取遣ニ及奉伺御内聽候上當時之有様ニ御仕法替被仰付左候而も御末家方御人數ともハ都合上下六百餘有之右御人數之小割書も先達而御役人様方御所望ニ付取らへ差出候得共其後何之御沙汰茂無之御人數減候而不苦と表分從公邊被仰出ハ無御座候得

出平段口も二入も直儘不之案り方等御行浦人范門を田人御と謝相御御之配少餘し候へハ
居之其氣懸ハ少無何書及心儀外申中口申含概實少越方助平に止申左御仁御田目進其も付御ハ
候助時無念のし處御支候之ニシ等處承同筋分奉跡御に御助吉之ハ門中附之置有ハ

共當時之御取扱ニ而子細無之儀えうふつき合ニ而相分既ニ此間江戸内海に佛蘭西船乗入之諷評有之候付御備詰之内より當表に致出府居候御家來可被差返哉之趣清田新兵衛が伊豫守様に罷出内分相伺候節茂段々御咄之末兎角御國力ハ御一大事之節ニ被蓋置候様との儀御懇篤之御教示有之候程之儀ニ候處御次より申出之通脇様ニ比較いたし候得ハ御人數不釣合杯との評を以増登りも被仰付候ハ、脇様誠候節ハ此方様茂又不被減候而ハ難相成形ニ成行他之釣合ニ應候儀之事柄ニ茂寄り候事ニ而御軍政之儀右之通有之候而ハ一統之人氣ニ茂係り第一ハ御大國之躰を得不申且又ムとへ兵端を開候とも何ぞ仇讐之間柄ニ而も無之候得之儀ニ右之時ニ至候譯ハ有之間敷數度再應御應對有之候上之儀と被考候間其内ニ之如何様とも操合可申萬々一入津忽チ浦賀杯に上陸亂妨ニも及候ハ、大筒手之面々徒ニ御臺場を守居候譯ハ無之左様之節之行軍位之野戰筒或ハ小筒或之鎗難刀弓杯得物々々を以重上之内ニ加り不申候而ハ難相成此人數も都合百二三拾人ハ有之夫ニ下地之重上且御物頭足輕も有之容易ニ恥辱を取り候儀ハ有之間敷左様之時ニ至り江戸表之儀も素々致傍觀候譯ハ無之候付臨時之取計も可有之品々より候而ハ御家老御用人等之内爲惣宰出張も可致設何様右之通之次第ニ付土臺ハ當時之儘ニ而御押移と被究置如此節丁度交代之時分不穩風聞も有之節ハ蝶つゝ位之御取扱ニ而丁度程を得可申事新敷申事ニ候得共御互御老威を被仰付置候身分ニ候へハ御勝手方迎御軍備筋ハ差置御出方減計リニ目を付候譯ハ無之御軍備を初御國民御扶助第一ハ追而戰爭之實地ニも至り條ハ、其節こそ天下粹一之御勤功も被爲在候様ニと彼是之事ニ引懸取扱候付深心魂を碎候事ニ候處右取扱前後之趣意も承り不申他に御不釣合位之事付而雲上に茂御聽付札

英賊上陸の時ニ至候而ハ御臺場之大砲ハ術之施練無之候付大筒手之在御家人聽衛之嚆次第には本文早々可被渡下と先達而及置候事ニ御座候

分之稽古致せ申候へハ御國力盡果却而爲識者ニ之被笑可申夫込前條之御趣意杯之見破候而之卓説ニも候ハ、猶爰許之何時御仕法替被仰付候而も聊異論無御座得斗御咄合有之度存候右之趣之些仰山ニ候得共々様之事柄土臺之御仕法立あらゝいたし候而ハ御奉行以下取扱候向々茂致疑惑且ハ委敷儀御許に之分り兼候稜も可有之と旁得御意候條不惡御聞取可被下候以上

七月十七日

溝口藏人

平野九郎右衛門様

向々防禦之患ハ兵之非不多して兵之不練ニ可有之其兵も申も專之要用ハ炮術ニ付從公邊之御誘も一入嚴敷就而ハ諸家之稽古も益盛ニ而不遠熟達ニも至り可申處猶此方様ハ追々申達候通當春御役人様方御臺場發炮御見分之節も極々不手際之向キも有之此末萬々一戰爭ニ及取を取候様之儀も致出來候ハ、兵之不練ハ不咎して兵を減候者ニ罪を歸し可申主ニ成取扱候身ニ取候而ハ右等之境之片時も案勞絶不申依之御備場詰御人數御仕法替付而ハ壹萬計も御出方相減候間其内を以御臺場居付之御筒打様之儀ハ如何様とぞ御取扱有之何々之門弟が被召仕候而も聊差支無之様兼而稽古之御仕法を被附度此儀之先達而茂及御相談候通ニ付此許之案勞御没取被下御奉行に茂得斗御相談有之御様子被仰越候様存候候地も記録可有之候得共右様之儀付而追々公儀被仰出之趣等機密間ニ書被せ是又入御披見申候以上

七月廿五日本藩警備地用の銃器を藩地より輸送するに當り家老大木舎人の名を署して今切關門通過の申告書を提出す

〔相州御備場御用一件〕

安政二年

七三三

覺

一鐵炮五十挺

八匁筒

但附屬之品々共

右者細川越中守相模國御備場御用被仰付置候付肥後國より江戸屋敷迄差遣申候今切御關所無異儀被成御通可被下候以上

安政二年 七月廿五日

細川越中守内

大 木 舎 人 印

今切

御關所

御當番衆 中(同文の申告多々なるを以爾後之を省略す)

七月廿八日幕府下田奉行都築峯重に禁裡附を命じ關白以下の朝官に開國の已むを得ざる所以を説かしむ

〔癸丑以降秘録〕

七月廿八日

都 築 駿 河 守

おろしや英咭利アメリカ等御所置之品追々所司代ニ申遣置候儀ニハ候得共書狀ニ而ハ難盡意味も有之兼而御所向ニおひて 御心配被遊候趣ニ付其方ニハ先役之節取扱候品ニ有之異國之事情相辨居候事ニ候間上京之上所司代へ篤ト申達 微聞ニ可然事共ハ事實能々相分時勢無御據譯柄等關白殿へ直話有之候様致度時宜次第其方儀所司代同道ニ而罷出候ハ、可然哉と存候右三ヶ國遣し候條約書寫相渡候間持参々たし所司代ニ申談御都合宜様可被取計候事

七月廿九日幕府勝鱗太郎矢田堀景藏等蘭人につきて汽船運用術研究の爲め長崎出張を命せらる

〔癸丑以降秘録〕

七月廿九日

勝 鱗 太 郎

右者長崎表へ阿蘭陀を献貢之英氣船運用其外傳習として被差遣候間早々出立可致旨且又小十人營善右衛門組矢田堀景藏並被地在勤御勘定格御徒目付永持享次郎申合重立取扱可申候尤外役々職方之者共も被遣候外國を傳授請候事ニ而不容易御用筋ニ有之候間銘々一時之功を争ひ一己之名聞を相立候様之儀有之候而ハ以之外之事ニ候右様之義聊も無之様厚申合外役々下々迄右之心得を以如何敷義ハ勿論不取締無之様可取計候尤永井岩之丞も諸事引受指揮いたし候事ニ付萬端得差圖可相勤旨今廿九日阿部伊勢守殿被仰渡依之申渡

七月某日幕府蘭國王に物を贈りて其贈遣に酬ゆ

〔癸丑以降秘録〕

七月 フランス箱館内海乗入アメリカ同様ニ願候旨浦賀與力御出入中島三郎助内話有云々

去秋蘭國王献貢ニ付國王へ被遺物

刀二口 眉尖刀一口 掩障一座 案一張 合子篋一具 巖鷹一座 花筒一箇 錆板一枚

紅葉紋縞紗廿疋 紅葉光絹廿疋

かひたんは

小簞笥一 紅白羽二重五疋 綿十把

右昨年阿蘭陀國王を献上御返禮としてかひたん御出ニ而被下置候由皆々大箱三重内ハ都而ろふ色ぬり金蒔繪金銀之金具之由此節之蒸氣船之御返禮如何成物被下候哉公邊も嚙々内輪ハ混雜と察候旨長崎御留守居佐分利十右衛門を七月三

安 政 二 年

七三五

日日付之狀

八月朔日英船五艘長崎に集る

〔癸丑以降秘録〕

八月朔日、英船一隻長崎ニ來都合五艘ニ成、蘭人ニ用有之湊内ニ入度申出候へ共不相成旨ニ候處蘭人ニ而右之罷越候ニ支ハ有之間敷申出且亞墨利加杯ハ下田へ之勝手ニ上陸もいたし候由ニ付上陸もいたし度旨申出候處下田箱館等ニハ左様ニも可有之此港ニテハ難承届と御答有之然ルニ一昨年か之約定書之趣ニ而ハ自由不苦と有之夫ニ右等之儀不被免儀ハ如何杯と申出候由ヘイトールとか申候和解違ニ而右之通ニ申出候様ニも成行候哉ニ而可有之趣又反物願度申出是ハ御奉行御含ニ而御取扱可有之ト御答之由當御奉行荒尾石見守様御病氣と申處ニ而未タ御應接ハ無之右之稜々ハ檢使ト應接之趣ニ相聞へ候八月八日佐分利狀中之趣也

八月五日在府本藩老臣は時勢を慮り暫く警備地交代の兵士を抑留して歸藩せしめざることを令達す

〔相州御備場御用一件〕

御備場詰組附御中小姓並大筒手共當秋交代被仰付答ニ而代り之人物孰茂先月廿日前後御國許被差立趣申來候付着陣之上ハ早々可被差下處御様子有之暫之間御人數二重ニ被差置候答候條昨年詰込之面々追而是より申達候迄ハ其儘相詰候様夫々可被達候以上

八月五日

井上加左衛門殿

木村次郎左衛門
溝口藏人

尚々本文交代之頃合之異船之模様ニ應候事ニ付田中八郎兵衛並御留守居に茂嶋合有之追而内意可被相達候以上

八月六日在府本藩老臣は書を藩政府に致し秋季交代歸藩せしむべき警備守兵を留め新兵着後相與に在番警備せしめむと欲する旨を照會す

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候相州詰組附御中小姓並大筒手共當秋交代被仰付答ニ而代り之人物孰茂先月廿日前後御國許被差立趣申來候付着陣之上ハ早々可被差下處御様子有之暫之間御人數二重ニ被差置候間昨年詰込之面々追而是より申達候迄之其儘相詰候様昨日及達候此段爲申達如是御座候以上

八月六日

木村次郎左衛門
溝口藏人

御家老宛
御中老宛

八月七日幕府は質實の士風を作新して各忠勤を勵むべき旨を令達す

〔神庫文書、尊攘錄皇武令〕

〔上書〕

阿部伊勢守様よ八月七日薩州様御留守居御呼出御渡之由ニ而差廻來候寫 格別簡易ニ御政務ニ被復

猶以 御嫡子様 御隱居様被成御座候 御方様之御附業迄御通達可被下候以上
以廻狀致啓上候今日阿部伊勢守様に私共御呼出ニ付筑右衛門罷出候處御用人を以御書付壹通被成御渡 御同席様方致
通達候様被 仰渡候付右寫差廻申候尤御承知之上從 御銘々様伊勢守様に爲御請御使者可被差出と奉存候且又御在國

安政二年

七三七

御在邑之御方々様御勤之儀之御銘々様御先例之通可被成御取計々奉存候依之廻狀數通相認持廻り申付候以上

松平薩摩守内

八月七日

西 筑 右 衛 門
早 川 五 郎 兵 衛
半 田 加 藤 次

御次第不同

細川 越 中 守 様
松平 肥 前 守 様
松平 大膳 大夫 様
松平 相 模 守 様
上 杉 彈 正 大 弼 様
南 部 美 濃 守 様

御留 守 居 中 様

同席之面々に通達可有之候事

御政務之儀 御代々様之 思召を被爲繼毎々御世話被爲在候得共年久敷昌平之化ニ浴し人心兎角外見虚飾ニ相流萬端御手重ニ成行無益之手數而已相増御實備之處往々 御安心不被遊殊ニ近來諸夷引續き致入津夫々御處置之品も有之候得共渡來別而非常之御手當肝要之儀ニ付此度諸事格別簡易之御制度ニ被爲復總而無益之舊習手重之古格を被爲省質直之士風ニ相成候様被遊度との 思召ニ付追々被 仰出候品も可有之候因而者一同右之 思召ニ基き萬端厚く申合聊等閑之心得無之様精々忠勤を可被勵候

八月

八月八日英人端舟に乗りて長崎灣内を徘徊し佐賀藩の兵士と衝突せしも大事に至らず

〔癸丑以降秘録〕

八月十三日、英船貳艘長崎ニ來、佐分利狀同(八月十三日ノ狀トイフ意)今十三日朝迄も同様異船神有ル御座候間異人應接御見合之處御目付様御奉行様も追々御着因而十四日ニ御應接之管候へ共猶異船渡來候ハ、可被差延や御應接ニて御論方を受無異儀出帆仕候様祈候へ共向方ニてハ是非開港之次第を立奥湊へ入万事自由ニ下田箱館通ニツたし度夫故數艘入り來勢を見せ候事と相見候御受持之諸家様ハ不及申齒らミツたし居候迄ニ御座候八日ニ之英人共バツテイラ乘廻佐嘉出張之御人數大筒船之側近參候付右人數々差咎メ其末爭差起檢使々取鎖メ混雜ニ之至り不申候得共向方ニてハ大形之ハツテイラニ士官之者も乘り大砲小砲乗せ組俄ニ押出候ニ付而ハ通詞共大ニ心配仕先事故なく治候へ共俄ニ御奉行所へも注進直ニ佐嘉類役早打之御呼出ニ而出張之御人數へ御論等有之候趣誠ニ危キ次第ニ御座候處相靜居併いつ小事々事起發炮ニも至り可申哉も難計御奉行様へも一方御心配之趣御用人杯密話仕候

八月十日英船一艘長崎を退き更に二艘新に來泊す

〔癸丑以降秘録〕

八月十日英船一艘退帆 佐分利八月十三日ノ狀檢使應接迄ニてハ何分英人承知不仕御奉行病氣ト申儀全ク虚病と見込候躰ニ付十日朝五時於西御役所異人御應接有之管之處同日卯上刻異船見出之相圖打有之自然渡來ツたし候へハ應接被差延ト之儀前日御約定書ニ有之候ニ付幸十日之朝之御應接ハ被差延候然ルニ十日ニ壹艘ハ出帆ツたし入替ニ右見出し壹艘入り來り右船ハ余程大形之フレカツト船ニ而人數も三百五六十人乗込居副將之船之様子ニ而通辯ニハ日本漂流人壹人乗組居右之者ハ先年モリソント申者船ニ助ケ乗せ置浦賀へ連行候處御受取無之依而薩摩へ參候處被打拂候漂流人

力松ト申者ニ而昨年參候乙吉々之通辨能相分り候山右之者申候様ニ之此船類船壹艘有之猶跡船三艘參り可申旨申出候然處右類船と見十日夕刻猶見出之相圖打有之云々

佐分利九月四日之狀中ニ八月十日英船貳艘着一艘ハ三百五十人乗一艘ハ貳百貳十人乗船々へ慰勞として奉行所々之被下物

- 絹縮 手箱 食籠蓋物 傘 茶碗 猪口 盃臺 皿 鶏玉子 大根 南瓜 東瓜
- 胡羅葡 芋

右被下物船々船將へ應接之處忝奉存候へ共右様之品受納したし候儀英國法無御座候尤乗組人夫へ被下候品之調法之品故受納可仕且又通辨之者へ被遺物是以白國々被下物難有受納仕候乍去無程惣都督も渡來したし候故着候ハ、船將も受可申夫迄御預置候事之旨通辯人申立候由

八月十二日長崎奉行川村脩就長崎に着す

〔癸丑以降秘録〕

八月十二日 長崎奉行川村對馬守様長崎着、御目付淺野一學様ハ八日被着今迄之永井岩之丞様と御交代

八月十二日唐船（濟國商船）長崎に入る

〔癸丑以降秘録〕

一唐船一艘七月廿一日午浦出帆當月五日薩摩島を見懸候處ニ而西北之風ニ成天艸鬼木（魚）邊とか申處ニ着其段此元へ注進船被差出十二日ニ長崎へ入津天艸在留船主へ送り候書翰和解
一筆申入候然去冬兩艘歸唐したし候此方豐利船十月八日午浦之内獨山之海面迄乘懸候處忽稻虫形之賊船六艘蔡岐門

を走り出本船を取圍み頻ニ投火矢を打掛續續ニ燃付候時丁度順風之折ニ而船先迄煙霧り無殘燒失いたし乗組人數大半水中ニ陥り候を皆賊船へ助ヶ乗せ其内人數を留置銀子を以償出候様申立惣而困苦之次第本書翰ニ而詳ニ申出候間別段不申進候勿論此方座方之元手銀繰り差支候上又々右様之災變ニ逢實以手を束計策も無之仕合ニ付去冬又々仕出方見合當年春々夏季迄色々心配したし得寶船壹艘仕出方可申等之處何分ニも元手銀繰合出來不申加之得寶船も大修理を加へ可申様ニ而莫大之入費ニ付右評議したし候央毎モ沙汰止相成不得止事泉州船壹艘借受船號金徳安と申候を仕出方したし長崎表へ渡來仕候ハ聊音信を通し候爲ニ御座候右船之幅狭之小形船積前も僅ニ而荷物も摘兼且之風順氣候も相後レ居候得共實以危峻を冒し罷渡候處幸ニ御蔭を以先月廿一日出帆同廿七日酉刻沖乗出し當月三日晝後順風ニ而五日之早朝薩州嶺島を見懸申刻迄走り候處西北之風ニ替何分難乗付只今天艸那鬼木邊へ沙繋りしたし早速船相願置候尤日限も大分相後レ居候付若此上延引致候而之彌以難澁可致事ニ付何卒御奉行所へ御願御役人衆御差越船御差配被成下連ニ入津したし候ハ、差急キ出帆ニも相成可申奉存候此段早々申進候且少堂二兄大人之御安否御尋問申入候 愚弟領子莫等同頓首 星禽十叔並 沈奇梅翁へも右同様別段不申入候
得寶船ハ去年十月十日歸着幸賊船引退キ平安無事ニ有之此段も申入候 八月六日
此節ハ一向ニ積荷も無之程ニ而唐國之模様知せ迄參候船ニ而有之候併大黃六千斤計其外砂糖少々長崎表夕立之潤共至不申誠之便りを付候船ニ而御座候山候（眞野小山當り佐分利八月十三日仕出し狀）

八月十三日幕府は米露英三國との條約書及び米船提出の本邦近海測量願書寫を各藩に交附す

〔相州御備場御用一件、神庫文書密書三百七十九印〕

口演之覺

一昨十三日達付伊勢守殿宅に相越候處別紙書而被相渡猶又口達ニ而被申聞候之右者先達約定ニ相成應接之向に尋候趣茂有之此節表向見置候様との事ニ候間同席一同に申通候様右之通約定ニ之相成候事なら種々難題申立反復難計夷人

共ニ而不易御時節如何様之儀到來茂難計候間其心得を以手當向行届候様可致治ニ亂を不忘者政治第一之事候間能々致通達候様且又同席中名差ニ而者雖申候得共格別手當無之向茂有之又者名目而已ニ而實備無之家々茂有之候様相聞得候間以後者急度手當行届候様有之度若此上等閑之家々有之候者及御沙汰候儀茂可有之候間國持庶流迄茂無殘處申通候様猶測量等之儀今日大和守殿宅ニ而御達申候儀も御座候間庶飾無之様精々相達候様との事左候而御請之儀者御披見之上以使者伊勢守殿に御請被仰達候様御賢息方に茂御通達有之候様ニとの事

右相濟大和守殿に相越候處別紙被相渡五月過參候との事故最早近々可參いつを御斷ニ相成可申候勿論此方より事を好ミ候儀之無之候得共應接之次第ニ依て者何時戰爭ニ相成候茂難計事故其心得を以手當行届候様との御趣意ニ候間不洩様相達候様との事御請使者其外伊勢守殿之通ニ候事

八月十五日

松平薩摩守

細川越中守様

細川右京太夫様

大廣間席に

(以下は神庫文書にはあし)

伊勢守殿より御渡之御書付寫

魯西亞英吉利亞墨利加等に別冊之通條約御取替せ相成候得共追々諸夷入港之上ハ以後之御實備彌以肝要之儀ニ付銘々右之心得を以尙又平常覺悟も可有之事ニ候因而爲心得條約書寫相達候事

覺

庶流にも廻達可被致候事

魯西亞條約

魯西亞國と日本國と今より後懇切ニして無事ならん事を欲して條約を定めんかため魯西亞ケイゾルは全權アチユタント、ゼネラール、フイース、アドミラル、エフイミニユス、フーチヤチンを差越し日本大君は重臣筒井肥前守川路左衛門尉ニ任して左之條々を定む

第一ヶ條

今より後兩國末永く眞實懇ニして各其所領ニ於て互ニ保護し人命ハ勿論什物ニ於ても損害なかるへし

第二ヶ條

今より後日本國と魯西亞國との境エトロフ島とウルツブ島との間ニあるへしエトロフ全島ハ日本に屬しウルツブ全島夫より北の方クルル諸島は魯西亞ニ屬すカラフト島ニ至りてハ日本國と魯西亞國との間に於て界を分たす是仕來之通たるへし

第三ヶ條

日本政府魯西亞船の爲ニ箱館下田長崎の三港を開く今より後魯西亞船難破の修理を加へ薪水食料闕乏之品を給し石炭ある地ニ於てハ又是を渡し金銀錢を以報ひ若金銀乏しき時ハ品ものにて償ふへし魯西亞の船難破ニあらされは此港の外決而日本他港ニ至る事なし尤難破船ニ付諸費あらハ右三港ニて是を償ふへし

第四ヶ條

難破船。漂民ハ兩國互ニ扶助を加へ漂民ハゆるしたる港ニ送るへし尤滞在中是を待つこと緩優なりといへとも國の正法を守るへし

第五ヶ條

魯西亞。下田箱館に渡來の時金銀品物を以て入用の品物を辨する事をゆるす

第六ヶ條

安政二年